

【研究ノート】

ベストセラーから見たナチス・ドイツの文学空間 ——上位 100 タイトルの分類と概要——

竹岡 健一

はじめに

2004年に発表された論考「第三帝国におけるベストセラー 1933年から1944年のドイツにおいて最もよく売れた小説の調査と分類」において、トビアス・シュナイダーは、第三帝国時代の文学に関する従来の研究が当時の文学の実態を十分に捉えきれていないことを指摘している。¹ 例えば、カール＝ハインツ・ヨアヒム・シェプスの『第三帝国における文学』（2000年）² では、プロパガンダ的著作、戦争文学、および「血と土の文学」が詳しく報告され、その後に非ナチス的な文学が扱われてはいるものの、それはもっぱら「国内亡命」の文学から成っている。同じことは、ハンス・ザルコヴィッツとアルフ・メンツァーの『ナチ・ドイツにおける文学』（2000年）³ にも該当し、100を超える伝記的情報の半分はナチスの作家に、残りの半分は「国内亡命」の作家と戦後作家に充てられている。それに対して、シュナイダーは、当時のドイツ文学に実際にそのような明確な区別があったのか、より具体的に言えば、一方にナチス的な文学が、他方に「国内亡命」の文学があるのみで、その間には何もなかったのかという問いを發する。というのも、シュナイダーによれば、これらの文学とは別に、第三帝国時代に多数のドイツ国民によって読まれた文学が存在したからである。そこで、シュナイダーは、本の売れ行きを手がかりとして、第三帝国において広く受容された文学がもっぱらナチス文学であったという型にはまった考え方を打破しようと試みる。すなわち、1933年から1944年までのベストセラーを把握することによって、クーニー・トレーメル＝エッグルトやハンス・ツューバーラインのような明らかなナチス作家の幾つかの小説と並んで、主として非政治的な娯楽小説が第三帝国において広く普及したことを証明しようとするのである。

* 本稿は JSPS 科研費 JP20K00500 の助成を受けた研究成果の一部である。また、本稿のうち「はじめに」の部分については、日本独文学会西日本支部第 72 回研究発表会（2020 年 11 月 7 日 オンライン開催）において口頭発表を行った。

¹ Tobias Schneider: Bestseller im Dritten Reich. Ermittlung und Analyse der meistverkauften Romane in Deutschland 1933-1944. In: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 52 (2004) H. 1, S. 77-97, hier S. 77. なお、シュナイダーによれば、イデオロギー批判的な方向性を持った研究の欠陥は、自らの立場の正当性を示そうとすること、すなわち、第三帝国時代の文学がもっぱらナチズムによって規定されていたと見なすことにある。その意味では、これらの研究によって初めて、ナチスが実際には成し得なかった事柄、つまり「ナチス文学」の確立が達成されたとも言えるのである。Vgl. ebenda.

² Karl-Heinz Joachim Schoeps: Literatur im Dritten Reich (1933-1945). 2., überarbeitete und ergänzte Auflage. Berlin: Weidler Buchverlag 2000.

³ Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: Literatur in Nazi-Deutschland. Ein biografisches Lexikon. Erweiterte Neuausgabe. Hamburg/Wien: Europa Verlag 2002.

このような観点から、シュナイダーは、さしあたり小説に的を絞り、ドナルド・レイ・リチャーズの『20世紀ドイツのベストセラー 1915年から1940年までの全書誌と分析』（1968年）⁴等の書誌情報に基づいて、1933年から1944年の間にドイツ全体で30万部以上の売り上げを達成したベストセラー小説40作品をリストアップした。⁵ 詳細は省くが、ここでその分類と作品数を示すと、表1ようになる。⁶ つまり、第三帝国時代のベストセラー小説40タイトルの中に、「純粋なナチスの小説」は10作品しか含まれておらず、残りの30作品は「非ナチス的、非政治的な娯楽文学」⁷によって占められている。すなわち、「科学小説」、「ユーモア小説」、「翻訳小説」、「非政治的歴史小説」、「恋愛小説」、および「カール・マイ」の作品である。シュナイダーによれば、こうした結果は、第三帝国における平均的な読者が、ナチスの文芸政策に盲目的に従う大衆ではなく、自らの読み物を積極的かつ自律的に選択していたことを示唆しているのである。

表1 シュナイダーによる分類

ジャンル	作品数	
科学小説	2	30
ユーモア小説	6	
翻訳小説	6	
非政治的歴史小説	11	
恋愛小説	4	
カール・マイ	1	
ナチス小説	10	10

さて、シュナイダーの論考から6年を経た2010年、同じ方向性を持つより浩瀚な研究が公表された。クリスティアン・アダムの『ヒトラー統治下の読書 第三帝国における作家、ベストセラー、読者』⁸である。アダムもまた、本書において、第三帝国時代の文学の特性を、ナチスのイデオロギーとは別な観点から、すなわちベストセラーという観点から明らかにしようと試みる。ただし、シュナイダーと異なるのは、対象を小説に限定せず、伝記的著作や自己啓発的な著作なども含めて幅広く捉

⁴ Donald Ray Richards: The German Bestseller in the 20th Century. A complete Bibliography and Analysis 1915-1940, Bern: Lang 1968. Dazu vgl. Tobias Schneider: A. a. O., S. 79.

⁵ 「小説」の基準は、第一には、当該の本が著者と出版社によって明らかに「小説」として商品化されていることであり、第二には、著者と出版社によってはっきりと「小説」と呼ばれていなくとも、形式上「小説」として分類され得ることである。Vgl. ebenda, S. 79.

⁶ Vgl. ebenda, S. 80-86.

⁷ Ebenda, S. 86.

⁸ Christian Adam: Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich. Berlin: Verlag Galiani 2010. (以下、本文における本書からの引用は、引用直後にAの記号とともに頁数のみを記す。また、注においても、本書の頁数については、Aの記号の後に頁数のみを記す。) なお、ナチス時代の文学に関する研究において本書が有する意義については、次の書評でも主な点のみを論じた。竹岡健一: Christian Adam: Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich. (日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第144号、2012年、218~223頁所収)。

えていることと、刊行数の基準を 10 万部以上としていることである。アダムは、上記のリチャーズやシュナイダーのほかにも、種々の先行研究⁹に加え、ドイツ国立図書館の資料や古書店のカタログ、同時代の新聞雑誌の記事や出版社の広告、および当時刊行された本の奥付から得られる情報などに基づいて、第三帝国時代のベストセラー350 タイトルをリストアップし、それらを当時の文学を特徴づける 10 タイプに分類する。ここでも、詳細は省き、上位 100 タイトルについて分類と作品数を示すと、表 2 のようになる。すなわち、非イデオロギー的なジャンルとしては、「実用的著作」、「ユーモア溢れる娯楽文学」、「娯楽小説」、「軽い娯楽と青少年文学」、「前線兵士向けの娯楽的著作」、「翻訳文学」、「高尚な文学」で、作品数は 72、ナチス的なジャンルとしては、「プロパガンダ的著作」、「戦争文学」、「血と土の文学」で、作品数は 28 である。つまり、ここでも、第三帝国時代のベストセラーの上位 100 タイトルの中に、ナチス的な著作が占める割合は 4 分の 1 に過ぎない。アダムによれば、こうした第三帝国時代の文学の実情は、ナチスの文化指導者の「破産宣告」(A321)を意味すると同時に、当時の本の世界が予想以上に「多彩かつ多様であった」(A16)ことを意味し、当時のドイツ国民が自らの読み物を自律的に選択していたことを示唆しているのである。

表 2 アダムによる分類

ジャンル	作品数	
実用的著作	14	72
ユーモア溢れる娯楽文学	11	
娯楽文学	10	
軽い娯楽と青少年文学	9	
前線兵士向けの娯楽的著作	4	
翻訳文学	12	
高尚な文学	12	
プロパガンダ的著作	7	28
戦争文学	10	
血と土の文学	11	

むろん、アダムも認めているように、作品の刊行数の把握は完全なものとは言い切れず、リストは今後修正される余地もある。(Vgl. A47, 85)しかし、このようにベストセラーという観点を取り入れることによって、これまでの研究では知られていない新たな知見が得られる可能性が生じることは否定できない。つまり、ナチス時代の文学に関する従来の研究は、ナチズムのイデオロギーを主な基準

⁹ Hellmuth Langenbucher (Hg.): Die Welt des Buches. Eine Kunde vom Buch. München: Langewiesche-Brandt 1938; Hans Ferdinand Schulz: Das Schicksal der Bücher und der Buchhandel. Elemente einer Vertriebskunde des Buches. Berlin: Walter de Gruyter 1952; Magnum. Die Zeitschrift für das moderne Leben 55, >Deutschlands Schriftsteller<, Jahresheft 1964. Dazu vgl. A325.

とし、ナチスによって禁止または推奨された文学の考察には適しているが、ナチズムと無関係な作家・作品に注意が払われていないという意味で、当時の文学受容の実態を解明する上で必ずしも十分ではないということである。それに対し、本の刊行数に基づいて、ナチス時代のベストセラーを突きとめ、それらを詳しく考察することにより、当時のドイツに、イデオロギー的な観点では捉えきれない、自由で多様な文学受容の余地があったことを明らかにできるとすれば、それは、ナチス時代の文学に関する通説の見直しを迫る有意義な研究となり得るであろう。

そこで、そのような研究の端緒として、シュナイダーとアダムのリストを主な典拠としながら、第三帝国時代のベストセラーの上位 100 タイトルについて、改めて筆者なりにより適切と思われる分類と作品数を示すと、表 3 のようになる。すなわち、非イデオロギー的なジャンルは、「実用的著作」、「ユーモア文学」、「娯楽文学」、「青少年文学」、「外国文学」、「高尚な文学」、「非政治的歴史小説」、「反戦小説」、「戦時下の娯楽的著作」であり、作品数は合計 75 である。一方、ナチス的なジャンルは、「プロパガンダ的著作」、「血と土の文学」、「戦争文学」であり、作品数は 25 である。したがって、ここでも、ベストセラーの上位 100 タイトルにナチス的な著作が占める割合は、4 分の 1 に留まる。もちろんこの結果は暫定的なものに過ぎず、今後、個々の著作の刊行数の再確認や、ほかに刊行数の高い著作がないかの確認、および分類の妥当性や分類項目自体の再検討などが求められることは言うまでもない。しかしそれでも、第三帝国時代の文学の特色をベストセラーという観点から明らかにするための出発点とはなり得よう。

表 3 筆者による分類

ジャンル	作品数	
実用的著作	12	75
ユーモア文学	10	
娯楽文学	10	
青少年文学	4	
外国文学	12	
高尚な文学	10	
非政治的歴史小説	11	
反戦文学	1	
戦時下の娯楽的著作	5	
プロパガンダ的著作	6	25
血と土の文学	10	
戦争文学	9	

では、当時のベストセラーの上位 100 タイトルとは、具体的にどのようなものだったのか。そのこ

とを明らかにするため、本稿では、以下にそれぞれのジャンルの概要を詳しく説明する。もっとも、これら多数の作品の一つひとつについて詳細な考察を行うことは、もとより不可能である。その代わりに、本稿では、個々の作家や作品のナチズムとのかかわり、具体的にはナチスの文芸政策や戦争遂行とのかかわりはもとより、書籍業界とのつながりや本の売り上げがもたらす経済的利益といった側面からの分析を通じて、ナチス時代の文学の多様なイメージを浮き彫りにすることを優先したい。以下、ジャンルごとに、冒頭に作品の著者（编者）、タイトル、初版刊行年、推定刊行数（万部）を記した一覧表を掲げた上で、それらの特色を論じる。

なお、本稿の内容は、すでにあげたシュナイダー、アダム、シェプス、ザルコヴィッツ/メンツァーの先行研究に負うところが大きく、とりわけアダムの著書には多くを負っている。その意味では、これらの研究の域を出ていない部分も少なくないと言える。だが、少なくともわが国において、本の刊行数を重視する形でのナチス時代の文学に関する研究がほとんどなされていないことを考慮すれば、そうした観点からの研究の可能性を明らかにするという意味で、少なからぬ意義を有すると言えよう。むろん、少なくとも部分的には先行研究には見られない独自の考察もなされている。

また、本稿では、引用に際して、孫引きや、それどころかひ孫引きが少なからず見られる。本来なら逐一原典に当たって確認するべきであるが、科研費による研究として研究期間の制約もあり、またコロナ禍の下でドイツ本国での調査ができなかったことなどから、叶わなかったものである。この点については、今後の課題としたい。

1. 実用的著作

1	Karl Aloys Schenzinger カール・アーロイス・シ エンツィンガー	Anilin 『アニリン』	1937	92.0
2	Erich Gritzbach エーリヒ・グリッツバッ ハ	Hermann Göring. Werk und Mensch. 『ヘルマン・ゲーリング 仕事と人』	1938	81.0
3	Fanny Gräfin von Wilamowitz-Moellendorff ファニー・グレーフィ ン・フォン・ヴィラモヴ イツ＝メレンドルフ	Carin Göring 『カーリン・ゲーリング』	1934	69.5
4	Karl Aloys Schenzinger カール・アーロイス・シ エンツィンガー	Metall 『金属』	1939	54.0
5	Johanna Haarer ヨハンナ・ハーラー	Die deutsche Mutter und ihr erstes Kind 『ドイツの母親とその第一子』	1934	>50.0

6	Sebastian Kneipp ゼバスティアン・クナイプ	Meine Wasserkur 『私の水療法』	1894	50.0
7	Anton Zischka アントン・ツィシュカ	Erfinder brechen die Blockade 『発明家が封鎖を破る』	1940	44.0
8	Hans Surén ハンス・ズーレン	Mensch und die Sonne. Arisch-olympischer Geist 『人間と太陽 アーリア的=オリンピア的精神』	1936	23.5
9	Elly Rosemeyer-Beinhorn エリー・ローゼマイヤー =バインホルン	Mein Mann, der Rennfahrer. Der Lebensweg Bernd Rosemeyers 『わが夫 レーサー ベルント・ローゼマイヤーの生涯』	1938	20.0
10	Eugen Diesel オイゲン・ディーゼル	Der Mensch – Das Werk – Das Schicksal 『人間—仕事—運命』	1937	16.5
11	Hellmut Unger ヘルムート・ウンガー	Germanin. Geschichte einer deutschen Großtat 『ゲルマニン あるドイツ人の偉業の歴史』	1938	15.0
12	Hellmut Unger ヘルムート・ウンガー	Robert Koch. Roman eines großen Lebens 『ローベルト・コッホ ある偉大な人生の小説』	1942	13.5

実用的著作には 12 の著作が含まれ、大きく科学小説、発明家の伝記、健康に関する啓発書、有名人の伝記に分けられる。

(1) 科学小説

ナチズム本来の前近代的な傾向にもかかわらず、第三帝国では科学小説が大きな受容をみた。その代表作と言えるのは、カール・アーロイス・シェンツィンガーの『アニリン』(1937年)である。ここでは、「インジゴ」、「都市ガス」、「コールタール」、「アニリン」、「ベンゾール」、「人造藍」、「アテブリン」という7つの章を通じて、人造インジゴの合成から IG ファルベン設立、そして外国の原料への依存からの脱却へと至る、ドイツ人化学者の功績が描かれる。

1886年に生まれ、医学を学んだシェンツィンガーは、第一次世界大戦中は精神病医を務め、戦後は1923年にニュー・ヨークへ赴き、医者として、また映画製作者として働いた。後に詳述するように、彼に作家としての最初の成功をもたらしたのは、ナチスのプロパガンダ小説とも言える『ヒトラー—青年クヴェックス』(1932年)であったが、その後は主に通俗科学的な小説を執筆した。

本作品の筋の中心をなすのは、人造インジゴ、すなわちアニリンの発明である。ここでは、とりわけ化学者フリートリープ・フェルディナント・ルンゲ(1794~1867年)の業績とインドのイギリス植民地におけるインド人労働者の非人間的な扱いが強調され、ドイツ人の発明家精神とイギリス人の

投機家根性が対照的に描かれる。前者は科学技術の進歩を人類の幸福に役立てようとするのに対し、後者は経済的利益の獲得を最優先するのである。だが、物語は巨大化学企業 IG フェルベン設立の頂点に達し、それは第三帝国の目標への最大限の貢献を目指す。すなわち、軍備拡張とアウトルギー化のための「四か年計画」の遂行である。この意味で、『アニリン』の最大の特徴は、技術信仰とナチズムが結びついた点にあった。¹⁰

1939年に刊行された『金属』では、金属工業と電気機械産業の歴史が扱われている。「金」と「銀」の章では、18世紀と19世紀のイギリスとフランスにおける蒸気機関、機関車、写真術の発明が描かれ、続いて「鉄」、「アルミニウム」、「マグネシウム」の章では、映画技術、自動車、および飛行機の発展へのドイツ人科学者の貢献が描かれる。そして、物語は、ドイツにおける航空機産業と軽金属産業の成立と第一次世界大戦における飛行機の投入でクライマックスを迎えるのである。

ところで、『アニリン』にも見られた自給自足に関連するテーマを取り上げて大衆的な人気を得たもう一人の作家は、アントン・ツィシュカである。出版人ヴィルヘルム・ゴルトマン (Wilhelm Goldmann) のもとで刊行された『世界的強国綿花のための戦い』(Kampf um die Weltmacht Baumwolle, 1934年)、『科学が独占を破る』(Wissenschaft bricht Monopole, 1936年)、『20億人のためのパン』(Brot für zwei Milliarden Menschen, 1938年)、『オイル戦争』(Ölkrieg, 1939年)といった彼の著作は、合成ガソリンの製造、人造繊維やブナ(合成ゴム)の開発などを扱っており、すでに「四か年計画」のプロパガンダをなしていた。だが、ナチスの中央出版社であるエーア出版社 (Eher Verlag) から「ナチス著作シリーズ」として刊行され、40万部以上の売れ行きを達成した『発明家が封鎖を破る』(1940年)は、1939年に始まった戦争の影響を強く蒙っている点で、それまでの著作とは趣を異にしている。というのも、そこでは、それ以前の著作にはまだ見られた平和維持に対する科学技術の貢献という観点が失われ、科学技術はもっぱら第三帝国の存続に役立てられるべきものとされたのである。

(2) 発明家の伝記

オイゲン・ディーゼルの『人間—仕事—運命』(1937年)は、発明家で設計家であった父ルドルフ・ディーゼル (Rudolf Diesel) の人生を描くものである。第三帝国において人気を博した通俗科学的な著作の中で本書が有する独自性は、対象となる発明家の息子によって著わされている点にある。つまりそれは、「人間」ルドルフ・ディーゼルのきめ細かい観察という点で際立っており、父親と息子との葛藤や、1913年に自殺へと至る影の側面をも呵責なしに描いているのである。

本書は、1937年の「ドイツ著作の年次概観」において、「四か年計画、労働、科学、および交通」の項目で「最も重要な新刊」¹¹に数えられるなど、ナチスの文芸批評においてきわめて好意的に受けとめられ、1942年には、ユニヴェルズム映画株式会社 (Universum-Film AG) によって映画化もなさ

¹⁰ 『アニリン』とナチズムのかかわりについては、竹岡健一：ナチス時代の科学小説における科学技術の濫用について——K. A. シェンツィンガーの『アニリン』を例として (日本独文学会『ドイツ文学』第164号、2022年、41～57頁)を参照。

¹¹ Die Angaben in: JdS (1938), S. 3, 7 und 9. Zitiert nach Sebastian Graeb-Könneker: Autochthone Modernität. Eine Untersuchung der vom Nationalsozialismus geförderten Literatur. Opladen: Westdeutscher Verlag 1996, S. 163.

れた。しかし、その後、ナチス体制下においても人間と機械、自然と技術に調和をもたらすような技術の利用はまだ達成されていないといった、ナチス政権にとって不利な見解を公にしたことにより、オイゲンは秘密情報機関の監視下に置かれた。

科学技術的な発明・発見における偉業の中でも、とりわけ医学の分野におけるそれに着目したのは、ヘルムート・ウンガーであった。バイエルによる 1920 年のアフリカ嗜眠病薬ゲルマニンの開発を扱った『ゲルマニン あるドイツ人の偉業の歴史』（1938 年）と、炭疽菌、結核菌、コレラ菌の発見者であるローベルト・コッホの人生を扱った『ローベルト・コッホ ある偉大な人生の小説』（1942 年）は、1939 年と 1943 年に映画化もなされた。

ウンガーの著作の成功には、彼自身の専門家としての知識と作家としての能力が効果的に結びついたことに加え、ナチスの政権獲得という環境の変化も大きな要因をなした。というのも、彼は、第一次世界大戦中に病人輸送部隊の医師として、その後数年間ライプツィヒで眼科の開業医として働いた後、ドイツ医師連盟の専門誌の編集長、および出版部の管理職となり、やがて人種政策局の職員となるなど、まさに第三帝国において栄達を見出した人物だったからである。ローベルト・コッホの伝記は、もともと『人類の援助者 ローベルト・コッホの人生の小説』（*Helfer der Menschheit. Der Lebensroman Robert Kochs*）というタイトルで 1929 年に刊行されていたが、1936 年に刊行された再版では、外国語はドイツ語に変えられ、コッホの幾人かのユダヤ人の同僚の名前が抹消されるなどの改訂が行われた。その意味では、ウンガーの著作のうち、1936 年に刊行され、8 万部の売れ行きを示した書簡体小説『使命と良心』（*Sendung und Gewissen*）が、安楽死を推進するためのナチスのプロパガンダ映画『私は訴える』（*Ich klage an*, 1941 年）の底本となったことにも、触れておかねばなるまい。

(3) 健康に関する啓発書

第三帝国時代に成功した健康に関する助言書の一つは、1934 年に J. F. レーマンス出版社 (J. F. Lehmanns) から刊行された、ヨハンナ・ハーラーの『ドイツの母親とその第一子』であった。出版人ユーリウス・フリードリヒ・レーマン (Julius Friedrich Lehmann) は、初期のナチ党員であり (会員番号 878)、彼の出版社はとりわけ人種学や人種衛生に関する著作で大きな成功を納めていたが、ハーラーの著作もまた、ナチスの教育理念を実際的な子育ての助言へと移し替えたものであった。したがって、刊行後間もなく『書籍研究』(Bücherkunde) に掲載された書評でも、本書の広範な受容が期待された。

特に歓迎すべきなのは、新生児と乳児の育て方のための、はっきりとした、落ち着いた指示である。本書がこの領域ですでに数多く存在するものを凌駕しているのは、それが書かれた精神である。¹²

¹² Die Bücherkunde 2 (1935), H. 1, S. 35. Zitiert nach A105.

この「精神」がナチズムを意味することは言うまでもあるまい。家庭と国民と人種のために子供を産むという義務を説く一方で、若い母親と乳児の間に愛情に満ちた関係を認めない本書は、ナチス婦人会によって創設された「帝国母親講習会」やドイツ女子青年団において指導書として用いられ、広く普及した。¹³

一方、ゼバスティアン・クナイプの『私の水療法』（1886年）には、ナチズムとのかかわりは認められない。それどころか、本書の初版が刊行されたのは、ナチスの政権獲得よりもおよそ80年も前であった。つまり、それは健康の教えに関する真のロングセラーなのである。

いわゆるクナイプ療法の創始者であるゼバスティアン・クナイプは、1821年に生まれ、24歳のとき肺結核を患い、医者にも見放されたが、ヨハン・ジークムント・ハーン（Johann Siegmund Hahn）の『人間、とりわけ病人の身体に対する新鮮な水の力と効用』（*Unterricht von Krafft und Wirkung des frischen Wassers in die Leiber der Menschen insbesondere der Kranken*, 1737年）を実践することによって、不治の病から生還した。1853年に31歳でカトリックの司祭に任命された後、バート・ヴェーリスホーフエン（Bad Wörishofen）へ赴任し、修道院の再建と水療法の実践に傾注し、1886年に『私の水療法』を出版した。その後は、クナイプ財団や保養施設ゼバスティアネウム、および国際クナイプ医師会などの設立を通じて水療法の普及に尽力し、1897年に76歳で死去した。

バート・ヴェーリスホーフエンは、1920年には村から町に昇格するとともに、バイエルン州から保養地の称号である「クーアオルト」（Kurort）を与えられた。また、第二次世界大戦後、1949年には町から市に昇格し、さらにドイツ水浴療法組合から「クナイプ浴療浴場」（Kneipp Hailbad）第1号地に出選され、1958年にはクナイプ療法士を養成するクナイプ・シューレが、1977年にはクナイプ医師を研修するクナイプ・アカデミーが設立された。

こうして、19世紀末の工業化の時代への反動とともに、通常医療（西洋医学）と代替医療を組み合わせて用いる「統合医療」の先駆けともなったクナイプ療法は、人間が本来もつ自然治癒力を高めることを目的とした代替医療の一つであり、一つひとつの病気からくる症状を和らげるだけの治療ではなく、からだ全体を健康な状態に戻すことを重視している。また、薬の副作用を深刻な問題と捉え、薬を使用せず、人間の持つ自然治癒力を高めて病気を完治する、あるいは予防することの必要性を説く。クナイプは言う。

水は一つの治療法である。それはあらゆる患者に利用できるものである。それゆえ水はまた病気を完全に治す一つの薬である。そして水を用いて病気を余すところ無くさらに安全に除去することができる。¹⁴

¹³ ザビーネ・ボーデ（齋藤尚子・茂幾保代訳）『ドイツの忘れられた世代 戦争の子どもたちが沈黙をやぶる』（三栄社）2017年、192～194頁参照。

¹⁴ Sebastian Kneipp: *Aus meinem Leben*. Bad Wörishofen: Stamm-Kneippverein e. V. 1987, S. 24f. 引用は、五十嵐有美子：クナイプ療法の成立と社会的意味——ドイツにおける自然療法の発展を見る（『社会福祉研究』第7号、2007年、59～79頁所収）68頁に拠る。

クナイブ療法は、自然と人間を区別しない古来の自然観に基づいており、人間が自然とどのように関わりを持ち、いかにして生きるべきかを示した点でも社会的な意味を有する。このような療法とそれにかかわる著作が、20世紀前半の時代の変遷にかかわらず引き継がれたことは、驚嘆に値しよう。

ところで、クナイブとはまた別な意味で注目に値するのは、裸体文化に関するハンス・ズーレンの著書『人間と太陽 アーリア的＝オリンピア的精神』（1936年）である。というのも、裸体文化運動は、ナチスの権力掌握後、一旦は禁止されたからである。だが、それは迅速な自発的統制を通じて生き延び、再び国家の認知を得るに至った。その最大の成功は、1942年に公布された「沐浴の規制に関する警察の指令」であり、それは、人に見られないと仮定されるところでは裸体での沐浴を許可するというものであった。

ハンス・ズーレンは、1919年から1924年まで軍属スポーツ教師養成に携わるほか、ベルリンのヴェンスドルフ軍事学校に体育指揮官として勤務した。ドイツ国防軍の身体教育全体の改革を指揮した功績により、1924年にはドイツ・スポーツ教員協会の名誉会員の称号を授与されている。また、彼は1933年5月にナチスに入党しており、ヒトラーの礼賛者でもあった。

このようなズーレンが、ドイツ国防軍を除隊する1924年に出版したのが『人間と太陽』であったが、それは、ベルリン・オリンピックが開催された1936年に、タイトルを『人間と太陽 アーリア的＝オリンピア的精神』と改めて、シェール出版社（Scherl）から刊行され、党審査委員会によってナチスの書籍目録に受け入れられた。

本書において、ズーレンは、「ゲルマン性に義務づけられて」¹⁵ という標題の下で、ナチズムの精神における裸体浴のイデオロギー的裏打ちを企て、裸体での徒歩旅行、体操、粘土浴、および裸でのスキーのためのあらゆる助言を与えた。

人里離れた地域では、孤独な裸の徒歩旅行はすべての人に承認されるだろう。他の人々の不機嫌を掻き立てることなしに、そのような徒歩旅行の感激を味わい尽くす人々が大勢いる。¹⁶

本書では、ズーレン自身が写真によってアーリアの裸体文化の輝かしい模範として登場する一方で、「己の裸体の眺めを他人に押しつけようとしてはいけない」¹⁷ とされ、そのような非ドイツ的な異常な衝動は共産主義者に見られるものとみなされた。このほかにも、改版にあたっては、ヒトラー、ゲッベルス、ローゼンベルクの発言や著作から多数の引用がなされ、ナチズムの人種理論的な認識が導入された。ナチス親衛隊の雑誌『黒い軍団』（Das Schwarze Korps）は、クリスマス前の期間に、1頁全体を本書の宣伝に充て、次のように述べた。

¹⁵ Hans Surén: Mensch und Sonne. Arisch-olympischer Geist. Berlin: 1936, S. 54. Zitiert nach A107.

¹⁶ Ebenda, S. 55. Zitiert nach A108.

¹⁷ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

私たちは——この点でゾーレンおよび彼の作品と完全に一致しているのだが——肉体的完成の力強い喜ばしい肯定を望む。なぜなら、私たちは、自己を意識した強い種族を育成するために、それを必要とするからだ。¹⁸

裸体文化は、いわば「人種の健康」¹⁹を保ち、改善する手段とみなされたのである。

こうして、身体と精神をともに美しく健康的にしようとするゾーレンの裸体文化運動は、古代ギリシア人とアリア人の身体美を規範として身体を鍛錬するドイツ人を賞揚すると同時に、ユダヤ人を身体的にも精神的にも劣等と評価するナチズムの反ユダヤ主義と危険な融合を果たした。ところが、ゾーレンは、1942年に公の場で自慰をしたため、「公的不快事惹起」の罪でブランデンブルク刑務所に収監され、ナチスからも除名されてしまった。

(4) 有名人の伝記

ナチス時代の上流階級の生活を窺わせる有名人の伝記として最も多く受容されたのは、エーリヒ・グリッツバッハの『ヘルマン・ゲーリング 仕事と人』(1938年)である。ゲーリングは、ナチス政権下でプロイセン首相、帝国森林官・狩猟区長、帝国航空大臣、および「四か年計画」責任者などの重責を担い、ヒトラーの後継者と目されていた。また、第三帝国の指導者の中でも、「左に勲章、右に勲章、そしてお腹にはいつも脂肪」といったジョークが流布するほど人気があった。

著者のエーリヒ・グリッツバッハは、国家公務員であると同時にナチス親衛隊の指導者であり、ゲーリングの右腕としても知られていた。その意味で、本書は当局に公認された著作であり、「総統の忠臣」たるゲーリングの英雄性を知らしめると同時に、彼が統括している省庁のためのロビー活動としても役立った。具体的には、最初に「仕事」が、つまりナチス国家においてゲーリングが果たしている役割が扱われ、次いで彼の「人」が取り上げられ、ここでは、権力掌握以前のゲーリングの人生が回想される。例えば、第一次世界大戦におけるパイロットとしての活躍などである。

だが、このようなゲーリングの伝記に劣らず成功した本として注目に値するのは、彼の最初の妻カーリンの伝記、すなわち実の姉ファニー・グレーフィン・フォン・ヴィラモヴィッツ＝メレンドルフ(本名バローニン・フォン・フォック＝シュトックホルム [Baronin von Fock-Stockholm])によって執筆された『カーリン・ゲーリング』(1933年)である。

ゲーリングと同様にナチズムの勢力拡大のために尽力したものの、政権獲得前の1931年に病気で亡くなったカーリンが人々の関心を集めた理由は、彼女の死後も、ゲーリングが彼女を大切にしたことにある。彼は、ベルリンの北部にある別荘を彼女にちなんで「カーリン・ホール」と名づけ、その湖畔に壮麗な墓所を設けて、1934年に彼女の遺体をスウェーデンから移した。その際、石棺は沿道や広場を埋め尽くす人々の讃歌の間を運ばれ、あたかも国葬であるかのごとく、ヒトラー、ゲッベルス、ハインリヒ・ヒムラー(Heinrich Himmler)、および政界や財界からの多くの列席者に見守

¹⁸ Kölperkultur, Privatsache? In: Das Schwarze Korps vom 17. 12. 1936, S. 6. Zitiert nach A108.

¹⁹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

られながら埋葬された。

本書は 1933 年に刊行されたが、最終章はすでにこの「改葬」に充てられており、出版社であるベルリンのヴァルネク (Warneck) は、書籍商組合の業界紙『ベルゼンブラット』(Börsenblatt) において、「ドイツの地への移送と埋葬を契機に、需要が再び高まるでしょう。どうか、その本を手許にお備え下さい」²⁰ と宣伝した。1933 年 12 月に本書を読んだヒムラーは、尊敬の念に満たされ、「その死がゲーリングにとって代えがたい損失であり、またそうあり続ける、果てしなく高貴な奥様の、気高く描かれた人生の歴史である」²¹ と述べた。

エリー・ローゼマイヤー＝バインホルンの『わが夫 レーサー ベルント・ローゼマイヤーの生涯』(1938 年) は、ナチス時代に活躍し、30 歳という若さで早逝したレーシングドライバー、ベルント・ローゼマイヤーの伝記である。著者は、ベルントの死によって寡婦となった妻エリーであるが、彼女自身も、当時としては数少ない女性パイロットを職業としていた。

二人は、1935 年にベルントが出場し、エリーがレースクイーンを務めたレースで知り合った。翌年結婚し、その後息子が誕生したが、早くも 1938 年、ベルントは事故で命を落とした。自動車メーカーのアウト＝ユニオン (Auto-Union) の依頼を受け、ダルムシュタットのアウトバーンで速度記録を試みた際、車が横風を受けて道路を逸れたのである。この事故はセンセーショナルに報道され、ベルントがナチス親衛隊の隊員であったことから、新聞にはヒトラーやヒムラーの弔辞も掲載された。

その後、エリーは、もともと夫と一緒に書く予定であった本を一人で書くことにし、ベルントの伝記として上梓した。それは、「ベルント・ローゼマイヤーという人間について、新聞に載っている以上のことを」²² 伝えるものとなり、そこには、改めてヒトラーから帝国女性指導者ゲルトルート・シヨルツ＝クリンク (Gertrud Scholz-Klink) にまで至るナチスの大物の弔辞が複写された。

ところで、本書は、第三帝国における一握りの上層の人々の生活を垣間見せるものとなった。というのも、ベルントとエリーは、まぎれもなく上流階級 (ジェット族) に属していたからである。彼らは、講演旅行、調査旅行、および様々なレースへの出場のため、ヨーロッパを横切って旅をした。今日はここ、明日はあそこにおり、家では家事使用人が待っていた。彼らは、「国内で大いに暴れ、インド洋で泳ぎ、巨大な魚を釣り、興味深い原住民の部族を訪ね、時折、特別なお返しとして愛機<台風> (Taihun) での小さな飛行をプレゼントした。」²³ また、コート・ダジュールでレーサーのハンス・シュトゥック (Hans Stuck) の家族と会い、リドやモンテ・カルロのカジノで賭けをした。このように、日常経験できないものの、だからこそ憧れである豊かで美しい生活の様子は、数多くの読者の興味を惹きつけたのであった。

エリーは、結婚後、一時はほとんど専業主婦となっていた。しかし、夫の早逝により再び元の生活に戻り、冒険的な飛行によって生計を賄ったが、それはそれで、パイロットとなり、ドイツのために

²⁰ Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 101, Nr. 141 vom 20. 6. 1934. Zitiert nach A104.

²¹ Lektüre. [Himmels Leseliste]. In: Nachlass Himmler. BArch N 1126/9, Bl. 69. Zitiert nach ebenda.

²² Elly Rosemeyer-Beinhorn: Mein Mann, der Rennfahrer. Der Lebensweg Bernd Rosemeyers. Mit 77 Aufnahmen. Berlin: 1938, S. 7. Zitiert nach A101.

²³ Ebenda, S. 111. Zitiert nach A101f.

奉仕するとう憧れを若者たちの間に喚起し得るものであった。ナチズムの立場からは「<システム時代に属するもの>」(A101)として批判されかねない、贅沢な暮らしを綴った本書が当局からの批判を免れた一因は、そこにあったのかも知れない。また、それに加えて、エリーは、アフリカ大陸横断の単独飛行に用いた愛機「台風」がドイツ空軍の主力戦闘機である「メッサーシュミット Me109」の前進となったという意味で、ドイツの戦闘能力の向上にも貢献していたのである。

2 ユーモア文学

1	Johannes Banzhaf ヨハネス・バンツハーフ	Lachendes Leben. Ein heiteres Geschichtenbuch 『笑う生活 愉快的物語集』	1937	>90.0
2	Heinrich Spoerl ハインリヒ・シュペール	Mann kann ruhig darüber sprechen. Heitere Geschichten und Plaudereien 『そのことは落ち着いて話せる 愉快的物語と読み物』	1937	89.0
3	Johannes Banzhaf ヨハネス・バンツハーフ	Lustiges Volk 『愉快な人々』	1937	81.7
4	Ehm Welk エーム・ヴェルク	Die Heiden von Kummerow 『クメロウの異教徒』	1937	73.9
5	Heinrich Spoerl ハインリヒ・シュペール	Die Feuerzangenbowle 『熱燗ワイン』	1933	56.5
6	Heinrich Spoerl ハインリヒ・シュペール	Der Gasmann 『ガス屋クニッテル』	1940	51.4
7	Heinrich Spoerl ハインリヒ・シュペール	Wenn wir alle Engel wären 『私たちがみな天使なら』	1936	48.5
8	Fritz Müller-Partenkirchen フリッツ・ミュラー＝パ ルテンキルヒェン	Kramer & Friemann 『クラマーとフリーマン』	1921	41.5
9	Heinrich Spoerl ハインリヒ・シュペール	Der Maulkorb 『口輪』	1936	36.5
10	Ludwig Thoma ルートヴィヒ・トーマ	Jozef Filsers gesammelter Briefwechsel 『ヨーゼフ・フィルザーの書簡集』	1912	>30.0

第三帝国においていわば「ガス抜き」の機能を果たしたユーモア文学には、10作品が含まれる。ともに1937年に刊行されたヨハネス・バンツハーフの『笑う生活 愉快的物語集』と『愉快な人々』

は、定評のある古典的な作家と同時代の作家のユーモア作品のアンソロジーである。そこには、例えばペーター・ローゼガー (Peter Rosegger) やルートヴィヒ・トーマと並んで、ヴィル・フェスパー (Will Vesper) やミュラー＝パルテンキルヒェンのような作家も見いだされる。

若くして出版業界で幅広く仕事をした後、ベルテルスマン出版社の文学的協力者兼原稿審査員となり、後に編集部主任となったバンツハーフは、これらのアンソロジーを編むにあたって、編集者にも多くの利益がもたらされるよう腐心した。すなわち、ハインツ・シュテグヴァイト (Heinz Steguweit) やパウル・ケラー (Paul Keller) のような重要な作家については2万部毎に収入が得られるように計らう一方、重要でない作家には一回限りのまとまった報酬で満足してもらうことに成功し、それによって、彼自身は、店頭価格の7.5%の報酬を手に入れた。つまり、2.85マルクという販売価格によって、すでに初版において、作家に支払われた2,000マルクの倍以上の、約4,275マルクの収入を得、その後も、2万部ごとに3,275マルクを得たのであった。こうして、バンツハーフの収入は、1943年には73,000マルク以上に達した。

だが、このような高額な収入をもたらした本の高い売り上げは、第二次世界大戦下における書籍出版のための紙の割当ともかかわっており、バンツハーフは、そのための認可書を発行した通信書籍販売業者マティアス・ラッカス (Matthias Lackas) とともに、やがて不正を働いた廉で逮捕され、終戦まで拘留された。

ところで、ナチス時代にユーモア文学のジャンルで最も成功した作家は、ハインリヒ・シュペールであった。1887年にデュッセルドルフに生まれたシュペールは、ミュンヘン大学で法学博士の学位を得た後、1919年から故郷で弁護士として働いたが、1937年以後はフリーの作家となり、当初はベルリンに、1941年からはテゲルン湖畔のロッタアッハ＝エーガーン (Rottach-Egern am Tegernsee) に住んだ。作家としてのキャリアの出発点となったのは、1933年に刊行された『熱燗ワイン』であった。1936年には『私たちがみな天使なら』と『口輪』が、1937年には『そのことは落ち着いて話せる』が続き、1940年には『ガス屋クニッテル』が刊行された。このうち、『口輪』は1938年に、『ガス屋クニッテル』は1941年に、そして『熱燗ワイン』は1944年に映画化された。また、『口輪』は1940年にラジオドラマ化されるとともに、舞台でも上演された。

こうして、シュペールは第三帝国において大きな成功を見出したが、彼の作品の特色の一つは、その無時間性である。つまり、はっきりとナチス時代のドイツで演じられる『ガス屋クニッテル』を除けば、筋の場所や時代が明確に定められておらず、書割を形成しているのは、20世紀前半のいつかの、ドイツのどこかの、はっきりとわからない小さな町なのである。また、彼の作品は非政治的であり、人々の弱さを描く。そこでは、国家機構や司法当局に対する抵抗は滅多に見られず、結末も宥和的である。そのため、彼の著作はナチスから認められ、娯楽文学に対して拒否的であったローゼンベルク一派からさえ称賛の言葉を得た。ナチスの指導者らは、人々を楽しませ、心を軽くするシュペールの作品が、いわばガス抜き機能を持つことを認識し、高く評価したのであった。(Vgl. A161) とはいえ、そこには風刺的な側面がまったくないわけではない。

題名がラムを浸した砂糖棒に点火してボウルの上にしたらせて作る飲料に由来する『熱燗ワイ

ン』は、学校を舞台とした喜劇である。仲の良い男たちが、熱燗ワインを飲みながら、学校時代の思い出話をする。ところが、若い作家ヨハネス・パイファーは、家庭教師に教育を受けたため、他の人達が学校でどんなに楽しかったかを理解することができない。そこで彼らは、青春時代に経験できなかった楽しい事柄を体験させるため、彼を高校に入れる。パイファーは、先生たちにいたずらをしようとするが、ガールフレンドのマリオンは、彼にこのばかげた考えをやめさせようとする。しかし、彼は校長先生の娘エーファを好きになり、学校に留まる。ラストでは、彼は学校から放り出さされるとともに、作家として認められる。このように、国家を担う職業身分、つまり教師を笑い物にする本作品には、シュペールの作品の必ずしも非政治的とは言えない一面を垣間見ることができる。

『私たちがみな天使なら』は、浮気をめぐる騒動を描いている。若くして結婚した実直な地方公務員クリスティアン・ケンペニヒは、ある日、大都市ケルンのホテルの部屋で、見知らぬ女性のそばで目覚める。彼は逃亡するが、事件は小さな村にまで追いかけてくる。そして、実際には何も起きていないにもかかわらず、その証しをたてられないまま、彼は職を失ってしまう。

『口輪』の筋は、次のようなものである。皇帝時代のライン地方の街で、不平を言う者たちを領邦君主が演説で罵倒するといううわさが流れ、住人たちは居酒屋で酒を飲みながらそのことに憤る。その翌日、領邦君主の像には口輪がつけられていた。検事トレスコウが犯人の捜査を開始するが、やがて彼は、自分が酒に酔ってしたことだと気づく。この作品は、今日の視点から見たとき、シュペールの作品が決して無害ではなく、むしろ体制批判的な可能性を持つことを、最も顕著に示すものである。第三帝国時代、政権は、とりわけ政治的な問題に関して思考の自由を認めなかったが、まさに本小説では、領主が臣下に対して独自の考えを持つことを否定するため、それに対する抵抗として、彼の立像が汚されるのである。ここでは、不敬罪が問題とされ、かつ検察の捜査が笑い物にされる。したがって、当局の信頼性や奴隷根性に対するパロディーとなっているという意味で、「政治的な小説」²⁴と呼ぶこともできよう。だが、それにもかかわらず、この小説が当局から好ましいとみなされたのは、最終的に有和的な結末が訪れるためだと思われる。すなわち、検事の行為はほみ消されるのである。

『ガス屋クニッテル』では、ガスメーターの検針員ヘルマン・クニッテルが列車に乗っているとき、一人の紳士がどうしても彼の着ている背広を買おうとし、彼は1,000マルクで売る。だが、しがないサラリーマンがそのような大金を得たことで、彼は周囲から疑いの目を向けられるようになる。この小説は、筋をはっきりと第三帝国に置かれており、人種証明書の発行書に迷い込んだり、ナチスの新聞『攻撃』(Der Angriff)を読んだり、時代を感じさせる。それどころか、スパイの嫌疑をかけられたクニッテルには、ゲシュタポの捜査がなされる。しかも、その際、このナチスの国家機構が戯画化される。というのも、クニッテルが最終的に尋問室へ行きつき、運を天にまかせて尋問を受けている間、彼も警察官も、それが何のためなのか知らないからである。

エーム・ヴェルクの『クメロウの異教徒』(1937年)は、フォアボンメルンと思われるクメロウ村

²⁴ Michael Kilian: Die Rechtsanwälte und Humoristen Ludwig Thoma und Heinrich Spoerl im Vergleich. In: Michael Kilian (Hg.): Jenseits von Bologna — Jurisprudencia literarisch. Von Woyzeck bis Weimar, von Hoffmann bis Luhmann. Berlin: BWV · Berliner Wissenschafts-Verlag 2006, S. 191-220, hier S. 213.

における、第一次世界大戦前の若者たちの日常のエピソードを描いた悪童物語である。牧師と教師が、主人公である 10 歳の農家の息子マルティン・グラムバウアーと彼の友人を、神を敬い、政府に忠実な市民に教育しようとする。だが、村の若者たちにとっては、異教的な伝統や習慣のほうが大切である。筋の中には、若者たちの遊び、諍い、彼らの大人たちへの関係などが織り込まれている。

貸出図書館の雑誌において「凌駕され得ぬユーモアと沸き立つ生の喜びに満ちた素晴らしい本」²⁵と評されるなど、本作品がナチスの批評家らに好感を持って受け入れられた理由は、マルティンの父親ゴットリーブ・グラムバウアーの教会や牧師に反抗する態度にあったのかも知れない。また、ヴィクトール・クレンペラー (Victor Klemperer) によれば、本作品が第三帝国で成功した秘密は、田舎の素朴な人々を描く非政治性にあった。(Vgl. A171) しかし、他方で、ここには第三帝国を念頭に置いた社会批判的な要素も欠けてはいない。マルティンは、クラスのトップとして教師から級友を密告するよう促されたとき、「より高い者に気に入られるために自分と同等の者たちに不親切になることでのみ、ある役職を保つことができるとは、どういうことだろう？」²⁶と自問するのである。

ヴェルクは、1943年に刊行された続刊『クメロウの義人たち』(Die Gerechten von Kummerow)によって、1944年に啓蒙宣伝省から表彰された。それについて、ドイツ出版社(旧ウルシュタイン出版社 [Ullstein Verlag])の取締役マックス・ヴァイスナー (Max Weißner) は、親会社であるエーア出版社への報告書で次のように述べた。

私たちの作家エーム・ヴェルクは、私たちのもとで刊行された小説『クメロウの義人たち』に対して、啓蒙宣伝省の娯楽小説のための 15,000 マルクの一等賞を受賞します。²⁷

このコンクールは、娯楽的な読み物の生産を活気づけるための啓蒙宣伝省のキャンペーンの一部であった。ゲッベルスは、第二次世界大戦勃発以後、娯楽的な文学の意義が高まっていることを重視していた。「大きな精神的浪費を必要とせず、押しつけがましくなく日常から連れ去る、軽い、魅力的な著作」²⁸が必要だと言うのである。

言葉と同様に内容が、私たちの国民同胞と兵士らの大多数が即座に接近できるものでなければならぬ。澁刺と進む筋の流れが、解釈や考察なしに読者を魅了し、本の魅惑のおよぶ範囲に引き込まねばならない。開戦以来国防軍と故郷の国民から再三求められたのは、まさにこのような物語なのである。²⁹

念頭に置かれていたのは、ユーモア的著作、冒険小説、探偵小説、恋愛小説、スポーツ小説などで

²⁵ Zeitschrift der Leihbücherei, H. 10 vom 25. 5. 1937, S. 9. Zitiert nach A170.

²⁶ Ehm Welk: Die Heiden von Kummerow. Roman, Berlin 1937, S. 189. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 92.

²⁷ Ullstein Archiv, Deutscher Verlag, Bericht über wichtige Geschäftsvorfälle im Oktober 1944. Zitiert nach A171.

²⁸ Rede von Reichsminister Dr. Goebbels. In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 109, Nr. 235 vom 17. 10. 1942, S. 222. Zitiert nach A171.

²⁹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

あった。

しかし他方で、ヴェルクは、すでに 1934 年に反体制的な言動によって拘留されるという経歴を持っていた。当時ウルシュタイン出版社で働いていた彼は、『ディ・グリュエネ・ポスト』(Die Grüne Post)の社説の中で、新聞雑誌に対する統制に対して、およびゲッベルスに対して批判的な意見を述べた。雑誌は3か月間禁止され、ヴェルクは数日間、オラーニエンブルク強制収容所に拘留されたのであった。必要に迫られていたとはいえ、娯楽的著作の振興という重要な課題をこのように必ずしも路線に忠実とは言えない作家に託さねばならないことに、ナチスの文化指導者たちは忸怩たる思いをしたことであろう。

フリッツ・ミュラー＝パルテンキルヒェンの『クラマーとフリーマン』(1921年)は、商人小説・徒弟小説である。それはいわば、グスタフ・フライターク(Gustav Freytag)の『借りと貸し』(Soll und Haben, 1855年)の伝統を引き継ぐ家族小説の市民的・商人的変形なのである。

ルートヴィヒ・トーマの『ヨーゼフ・フィルザーの書簡集』(1912年)は、バイエルン州議会のドイツ中央党選出議員であり肉屋であったヨーゼフ・フィルザーの体験や政治的コメントを、妻マリーと様々な友人や同僚に宛てた書簡の形で描いたものである。例えば、いわゆる陣笠議員の無能力、厳格な党派原理、権威的な党のエリート、議会外の権力グループによる議会の操作などが取り上げられている。トーマは、弁護士として働いた後、雑誌の編集を経て作家となり、バイエルンの日常生活や同時代の出来事を写实的、風刺的に描いたが、バイエルン方言で書かれた本作品でも、その才能が遺憾なく発揮されている。

3 娯楽文学

1	Reinhold Conrad Muschler ラインホルト・コンラ ート・ムシュラー	Die Unbekannte 『見知らぬ女』	1934	46.0
2	Polly Maria Höfler ポリャー・マリーア・ヘ ーフラー	André und Ursula 『アンドレとウルズラ』	1937	39.0
3	Georg von der Vring ゲオルク・フォン・デ ア・ヴリンク	Die Spur im Hafen 『港の中の手がかり』	1936	35.0
4	Theodor Kröger テオドーア・クレーガ ー	Heimat am Don 『ドン河畔の故郷』	1937	31.4

5	Arthur-Heinz Lehman アルトウール＝ハイ ンツ・レーマン	Hengst Maestoso Austria 『雄馬マエストゾ・オーストリア』	1939	30.6
6	Felicitas Rose フェリキタス・ローゼ	Heideschulmeister Uwe Karsten 『荒地の学校教師ウーヴェ・カルステン』	1909	30.0
7	Hans Dominik ハンス・ドミニク	Land aus Feuer und Wasser 『火と水の国』	1939	25.2
8	Betina Ewerbeck ベティナ・エーヴァー ベック	Angela Koldewey. Roman einer jungen Ärztin 『アンゲラ・コルデヴェイ ある若き女医の小説』	1939	24.0
9	Dinah Nelken ディナー・ネルケン	Ich an Dich. Ein Roman in Briefen mit einer Geschichte und ihrer Moral für Liebende und solche, die es werden wollen 『私からあなたへ 恋人と恋人になりたい人のための 物語とその道徳を備えた書簡小説』	1939	22.0
10	Hans Fallada ハンス・ファラダ	Kleiner Mann - was nun? 『しがない男よ——さあどうする』	1932	18.8

娯楽文学には 10 作品が含まれるが、大きく恋愛小説、探偵小説、未来小説、医学小説、社会小説に分けられる。

(1) 恋愛小説

ラインホルト・コンラート・ムシュラーの『見知らぬ女』(1934 年)は、「セーヌ川の身元不明の少女」(Inconnue de la Seine) のデスマスクという、よく知られた出来事からインスピレーションを得ている。1900 年頃にパリで死体が発見された見知らぬ死者のマスクの模造や模写は、その秘密に満ちた微笑ゆえに、芸術家たちの間で好まれる壁の装飾となり、様々な文学作品にインスピレーションを提供した。ハイネ出版社 (Heyne) で刊行されたムシュラーの小さな本のカバーにも、そのマスクの写真があしらわれている。本作品は間もなく、デンマーク語、英語、オランダ語、イタリア語、フィンランド語、ノルウェー語、ハンガリー語、スウェーデン語にも翻訳された。

物語の中で、ムシュラーは、見知らぬ人の秘密を探る。問題の女性マンデレーヌ・ラヴィンは、彼女の世話をしていた叔母を亡くし、田舎からパリへ赴くが、その途中、最初でただ一度の大恋愛をする。しかし、相手の男ロード・ベンティクにはすでに婚約者がおり、幸せな数日の後、彼はその女性のもとへ帰る。そのため、マンデレーヌは自ら命を絶ち、死によって恋人と結ばれようとする。——発見されたとき、彼女の顔はうっとりとして幸せそうに微笑んでいた。

本書は、その大きさと価格からプレゼントにも適しており、広範な受容をみた。また、本作品の一見無害な内容とは対照的に、ムシュラーはドイツ文化のための闘争同盟のメンバーであり、1932 年

にナチスに入党し、1933年にはユダヤ人の妻と離婚していた。にもかかわらず、『書籍研究』において、彼は、「多作家」で「アスファルト文士」であるとの評価を与えられ、それどころか「ユダヤ人文士」³⁰と罵られた。

きわめて不潔で軽蔑すべきものを作者が自然なこととして扱って憚らないこうした信じがたい本に対しては、拒否しながらもなお助ける用意がある好意的な批評の可能性はなく、〈けだものを潰せ〉という容赦のない要求があるのみである。³¹

こうして、自らはナチスの運動に尽力しようとしながら、他方ではナチスの一部から辛辣なあざけりと拒否を被ったムシュラーは、結局、1937年に党から脱退した。とはいえ、こうしたナチスとの矛盾した関係も彼の経済的成功を妨げることはなく、彼の作品は1940年代にも引き続き市場に提供され続けた。

ポリ・マリーア・ヘーフラの『アンドレとウルズラ』（1937年）では、ドイツ人女性ウルズラが、幼いとき、父親の遺品の中に、フランス人の兵士アンドレ・デュヴァルの前線での日記を見つける。そこには、『西部戦線異状なし』を彷彿とさせるような、第一次世界大戦における塹壕での体験が綴られている。その後、それを再び見つけ、熱心に読み始めた彼女に、その日記をアンドレの遺族に返したいという思いが生じる。彼女は、彼は死んだと思っていたが、間もなくそうではないことを知る。大学生になったウルズラは、1936年にフランスへ旅をし、医者として生計をたてている中年のアンドレに恋をする。だが、彼女の恋は悲劇的な終わりを迎える。アンドレは、結婚式の前に自動車事故で亡くなるのである。しかしまた、物語の最後には、ウルズラは彼女の恋物語を夢想したに過ぎないという可能性が暗示される。というのも、アンドレは、1916年に激戦地ドゥオモン（Douaumont）で戦死していたかも知れないのである。

1936年のベルリン・オリンピックと1937年のパリ万国博覧会という、国際的に宥和的なムードの中で刊行された本作品は、ドイツ人とフランス人の恋愛を描いており、いわば「ヨーロッパの二大文化国家の協調」（A145）をテーマとしている。ヒトラーの表向き平和外交にも資する本作品は、ナチスの著作権保護局からも推奨された。それどころか、第二次世界大戦においてドイツ軍がフランスに進駐した後にも販売され、兵士のための特別版さえ刊行された。

もともと、本作品が描く平和主義の下では、アンドレとウルズラがともに、自分がどこに属しており、自分の身体にどちらの血が流れているのかを意識していることが、留意されねばならない。彼らは自らの民族的出自を自覚しており、二人の協調は民族的に根拠づけられている。つまり、そこに描かれているのは、決して国際主義ではなく、「協調の用意があるナショナリズム」（A148）なのである。また、第一次世界大戦における戦争体験を扱っているという意味では、本書を戦争文学とみなすことも不可能ではない。

³⁰ Die Bücherkunde 1 (1934), H. 1-4, S. 8. Zitiert nach A179f.

³¹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

テオドーア・クレーガーの『ドン河畔の故郷』(1937年)も、ヘーフラーの場合と同様に、二つの国の結びつきを描いている。ただし、ここではそれは、彼の先行する作品『忘れられた村』(Das vergessene Dorf, 1934年)でも取り上げられたドイツとロシアの出会いであり、若いドイツ人女性アレクサと、11月革命の後に大農場をボルシェヴィストに略奪されたドイツ系ウクライナ人貴族の恋愛が語られる。彼は「赤軍」に対する「白軍」の戦いに加わるが、アレクサもまた、愛する人の戦いを自らのものとし、彼の近くにいるために、看護師としてコサック人の仲間に加わるのである。

フェリキタス・ローゼも、第三帝国で最も成功した女性作家の一人である。1930年代には20作品が販売されていたが、とりわけ1909年に刊行された『荒地の学校教師ウーヴェ・カルステン』は、映画化を通じて人気が再活性化した。1862年生まれ、ローゼの作風はおおむね郷土文学的なものだが、ナチスに対しては一定の距離を保った。ただし、彼女は、1933年以後、ナチスに入党しようと試み、食料農業大臣で帝国農政指導者でもあった夫のリヒャルト・ヴァルター・ダレ(Richard Walter Darré)もそのために尽力したと言われる。しかし、彼女は1938年6月に死去したため、——恐らく幸いなことに——それは叶わなかった。ローゼの作品の郷土文学的な特色は「血と土の文学」と結びつきやすいものだが、ヘルムート・ランゲンブーハーの文学史『時代の民族的文学』(Volkhafte Dichtung der Zeit, 1933年)では言及されていない。理由は定かではないが、幾らか通俗的・娯楽的に過ぎると考えられたのかも知れない。(Vgl. A292)

ディナー・ネルケンの『私からあなたへ 恋人と恋人になりたい人のための物語とその道徳を備えた書簡小説』(1939年)は、テキストと絵などのコラージュから構成されている。

恋の物語、すべての恋と同じように、とても通俗的でとても悲劇的、とても単純でとても崇高、書簡、メモ、切符、電報、映画館の入場券、および憧れの小さな、偶然の告白。絵本？ いいえ、読み物。その中で、私たちは——泣くためではなく、笑いながら——愛し合う二人の小説を語る。³²

つまり、カラーで印刷され、写真が貼りつけられ、ファクシミリの入場券やメモ書きなどが散りばめられた本書は、恋愛小説であると同時に、私的なアルバムであるかのような印象を持ち、プレゼントに適した魅力的な本であった。また、本書のタイトルは、第二次世界大戦の開戦後、多くのカップルが意図せぬ長期間の別離を強いられるという悲しむべき状況下で、多数の読者を惹きつけた。そしてさらに、刊行後間もなく、『あなたのような女性』(Eine Frau wie du)というタイトルで映画化されたことも、本書の効果的な宣伝となった。

ネルケン、ベルリンのヴィルマースドルフ(Wilmersdorf)の芸術家コロニーで生活していた。そこには、1923年から俳優、作家、造形芸術家らのために住居が設けられており、ヨハネス・R・ベッヒャー(Johannes R. Becher)、エルンスト・ブロッホ(Ernst Bloch)、ゼバスティアン・ハフナー(Sebastian

³² Diner Nelken: Ich an Dich. Ein Roman in Briefen mit einer Geschichte und ihren Moral für Liebende und solche, die es werden wollen. Berlin: 1939, Vorwort. Zitiert nach A181.

Haffner)、ルートヴィヒ・レン (Ludwig Renn)、エーリヒ・ヴァイネルト (Erich Weinert) らが住んでいた。だが、インテリと共産主義者が身を隠し、「目覚めつつあるドイツへの憎しみの歌」³³ を作っているとみなされたこのコロニーは、ヒトラー政権成立後、ナチスによる襲撃を受け、壊滅した。その後、ネルケンは、帝国著作院とことさら対立することは避け、むしろ協力的な関係を保った。だが、作品の主な市場はドイツであり続けたものの、空間的に距離を取ることを試み、ウィーンやユーゴスラビアなどに住んだ後、イタリアで終戦を迎えた。

なお、恋愛小説には、以上のほかに、アルトゥール＝ハインツ・レーマンの『雄馬マエストゾ・オーストリア』(1939年)も含まれる。

(2) 探偵小説

「娯楽文学の旗艦」(A189)ともいべき探偵小説は、第三帝国においても広く受容され、総数 3,000 にもおよぶ作品が刊行された。また、その中には、イギリスの作家エドガー・ウォーレス (Edgar Wallace) やベルギー出身のフランス語作家ジョルジュ・シムノン (Georges Simenon) のような、外国の作家も含まれていた。だが、ナチスの著作指導者らにとって、「お決まりのパイプをくわえた探偵」³⁴ は、むしろ克服されるべき対象であった。というのも、そこでは、新しいドイツとはもはや一致しない、「資本主義的な、西洋的な、とりわけイギリスの特徴を持つ市民社会の特殊な出来事」³⁵ が扱われている上に、犯罪の描写が、とりわけ若者たちに「一味の形成や反抗の衝動」³⁶ を引き起こす危険性があると考えられたからである。第二次世界大戦の開戦後には、娯楽的な読み物の需要が高まる中でも、ウォーレスやアガサ・クリスティ (Agatha Christie) らの探偵小説は出版が禁止された。しかし、その一方で、啓蒙宣伝省においては、「気晴らしと娯楽に、日々の単調さと労働からの気分転換と元気づけに役立つ」³⁷ 本が擁護され、イギリスの影響を受けず、ドイツの警察の活躍を描く探偵小説の創造が求められた。³⁸

このような状況の下で、ゲオルク・フォン・デア・ヴリンクの探偵小説『港の中の手がかり』(1936年)は、舞台を過去へ移すことによって批判を免れた。つまり、そこでは、1850年頃に北ドイツの小さな港町で起きた不可解な死亡事件の犯人を、その甥が追求するのである。もっとも、本書の中には、当時の政治的な出来事への当てこすりも見られるが、それは、読み方次第で、自由と民主主義の支持とも、大ドイツのための戦いとも受けとめられ得るものであった。

ヴリンク自身は、1933年以前の作品では戦争の無意味さを説き、民主主義を支持していた。だが、ナチスの政権獲得後、彼は体制に受け入れられ、ドイツ詩人会議やヨーロッパ詩人連盟にも参加し、

³³ Völkischer Beobachter vom 15. 3. 1933. Zitiert nach A181.

³⁴ Wilhelm Müller: Spannung im Buch des Jugendlichen. In: Jugendschriften-Warte 44 (1939), H. 5, S. 65. Zitiert nach A189.

³⁵ Erich Thier: Über den Detektivroman. Die Bücherei 7 (1940), H. 7/8, S. 207. Zitiert nach ebenda.

³⁶ Sebastian Losch: Unterhaltungsschrifttum — so oder so? In: Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 107, Nr. 88 vom 16. 4. 1940, S. 138. Zitiert nach A190.

³⁷ Ebenda, S. 137. Zitiert nach A190f.

³⁸ 竹岡健一：第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について——ナチスの文芸政策と娯楽的著作のかかわりに関する一考察（かいろすの会『かいろす』第33号、2019年、59～78頁所収）71～73頁参照。

1942年10月にワイマールで開催された会議では、「文学における素朴なもの」という題目で、一定の質を保ちながらも、常に読者と同じ目の高さに留まる「国民詩人」(A192)のあるべき姿を論じた。このような意味で、ヴリンクを「国内亡命」の代表者とみなすことも可能である。

(3) 未来小説

1933年から1945年の間には、いわゆる「未来小説」も数百作品刊行された。中でも最も大きな成功を取めたのは、ジューメンズ工場のエンジニアという経歴を持つハンス・ドミニクである。およそ25万部刊行された『火と水の国』(1939年)は、天才的発明家エッゲルト教授をめぐる三部作の一つである。ドイツのエンジニアであるエッゲルトは、祖国の自立のために新しい入植地を求めて戦う。彼が大臣から受けた任務は、本来は、帝国の外に成層圏飛行機の間着陸のための基地を作ることであった。ところが、最終的に、火と水から生まれた新しい土地、すなわち5万人の住民のためのコロニーが達成され、それによって、永遠の敵であるアメリカ人は敗北を喫する。

とはいえ、ドミニクについても、ナチスの著作指導者の間に批判的な見方がなかったわけではない。確かに『書籍研究』では、「とりわけ青少年文庫と貸出文庫におけるその本の振興」³⁹が推奨された。だが、雑誌『帝国』(Das Reich)に掲載された「ドイツの小説の未来」に関する記事では、『書籍研究』の編集者で、1943年以来エーア出版社の原稿審査主任でもあったベルンハルト・パイル(Bernhard Payr)が「技術的未来小説」⁴⁰に反対を表明し、そのことは、ドミニクの出版社ハーゼ&ケーラー(Hase & Koehler)の出版人フォン・ハーゼ(Von Hase)には、「彼らの小説に対する党の正式な拒否」⁴¹と感じられた。しかし、また他方で、ゲッベルスはドミニクの70歳の誕生日に電報を贈り、次のように祝した。

あなたは、あなたの小説によって数十万人の読者の手に魅惑的な本をもたらし、彼らに喜びと気晴らしを用意したのです。⁴²

これに対し、ドミニクは次のようにお礼の言葉を述べた。

あなたは、娯楽的な形で自然科学・技術の知識を伝え、ドイツの研究の偉業に対する関心と理解を喚起しようとする私の長年の努力が、政権からも好意的に評価されることを証明して下さいました。⁴³

娯楽的な形で自然科学と技術の知識を伝えること——それこそまさに、ドミニクの成功の鍵であっ

³⁹ Die Bücherkunde 2 (1935), H. 3, S. 109. Zitiert nach A194.

⁴⁰ Schreiben v. Hase an Dominik vom 18. 12. 1944. In: Staatsbibliothek Berlin, NL 337/50. Zitiert nach A195.

⁴¹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

⁴² Telegramm Goebbels an Dominik vom 14. 11. 1942. In: Staatsbibliothek Berlin, NL 337/49. Zitiert nach A195.

⁴³ Schreiben Dominik an Goebbels vom 19. 11. 1942. In: Staatsbibliothek Berlin, NL 337/49. Zitiert nach ebenda.

た。そこでは、空想的なものが前面に出るのではなく、語りによって飾り立てられた未来の世界が、自然科学的・技術的情報を伝達する手段となったのである。実際、シェール出版社の社長であり、未来小説によるドミニクの成功の生みの親の一人でもあったカール・ゾル（Karl Soll）も、1936年に、ドミニクの創作を次のように特徴づけている。

しかしとりわけ、それは真の空想の産物ではありません。すべての個々の小説にとって、技術的な構造は、支える力のある科学的基盤の上に達成されたのです。⁴⁴

実のところ、このことは当時の未来小説全般に当てはまる。すなわち、それらは、今日一般に「サイエンス・フィクション」と呼ばれているものよりも、むしろ通俗科学小説に近いのである。（Vgl. A196）

（4）医学小説

ベティナ・エーヴァーベックは、医者であり、作家としての活動はいわば副業であった。しかし、彼女がそこから得た収入は、1937年にはまだ1,300マルクだったが、1941年には35,880マルクへと高まった。そこには、1939年に刊行された『アンゲラ・コルデヴェイ ある若き女医の小説』の成功があった。

職業的解放と科学的成功を求める若き女医の戦いを描いた本小説には、自伝的な要素も織り込まれている。主人公アンゲラはフライブルク大学で学業を終えるが、エーヴァーベック自身、1938年にこの大学で、「湯治の経過における関節リウマチの主な温度の変更」という論文で学位を得ていた。また、そこには、医者ならではの職業上の苦労や苦悩の叙述も欠けてはいない。だが、それでも主人公は、医学に召されていると感じ、人々を助けるためにあらゆることを犠牲にする。彼女は、十分に解明されていない癌の研究に専念し、最終的には自らも同じ病で命を落としながらも、治療の方法が見いだされることに多大な貢献をする。のみならず、彼女は、自らがあと数年しか生きられないことを知りながら、同僚の医者と結婚して息子をもうけ、母親としての使命も果たすのである。

他方で、主人公が遺伝的素質を持った幼馴染の男性との結婚を断念するくだりには、当時の優生学的な考え方が編み込まれているとも言え、その意味では、ナチスの健康政策に沿った物語と見ることもできる。

（5）社会小説

ワイマール共和国時代でも第三帝国でも成功し、かつ今日なお文学のカノンに数えられる作家の筆頭格といえば、ハンス・ファラダであろう。そして、彼に決定的な成功の突破口を開いたのは、1932年に刊行された『しがいない男よ——さあどうする』であった。つまり、世界恐慌の下で苦しみ、期待

⁴⁴ Schreiben Dr. Soll an Dominik vom 4. 9. 1936. In: Staatsbibliothek Berlin, NL 337/ 10. Zitiert nach A195f.

した社会的成功を得る代わりに、失業と困窮への転落を経験するサラリーマンの生活を描いた小説である。

本作品は、戦後、ローヴォルト出版社 (Rowohlt Verlag) がアメリカのペーパーバックを手本に、書籍を手頃な価格で読者に届けようと 1950 年に創始したロロロ叢書 (rororo) の第 1 巻に選ばれた。また、2011 年にはアウフバウ出版社の文庫版が出、2016 年にはノーカットのオリジナル版が刊行されて話題を呼んだ。日本でも、2017 年になって、赤坂桃子による翻訳『ピネベルク、明日はどうする!?!』⁴⁵ が刊行されている。

ファラダは、ナチスに対する陰謀を企てたとして、1933 年にナチス突撃隊によって刑務所に 10 日間拘留されたという経験もあり、作品の成功のためには、それを時代の精神に合わせて改作することも厭わなかった。例えば、ラウターバッハが退屈しのぎにナチスのもとへ赴いたといったようにナチスが否定的に描かれた箇所は、退屈しのぎからゴールキーパーとなったと変更された。(Vgl. A185f.) つまり、ここでは、振り役とはならないまでも、不都合な箇所を消し去ることによって、新たな時代精神への適応がなされたのである。一種の自己検閲と言えよう。それでも、子羊ちゃんの共産主義的な傾向や、反ユダヤ主義に対するノートナーゲル夫人の嘆きなどは、そのまま残されている。こうした点について、ファラダは、1941 年 1 月 24 日に母親に宛てた手紙で次のように述べている。

ぼくは、共産党と並んで、ユダヤ人とナチスへのすべてのあてこすりを取り除くよう求められています。もちろん拒否しました。というのも、その本は闘争時代の一種の記録だからです。闘争時代の痕跡を取り除くなら、ピネベルクの立場全体が理解不能となってしまいます。⁴⁶

他方で、本作品が出版直後からきわめて多くの人に読まれ、20ヶ国語に翻訳された一因として、経済的困窮と社会不安という状況の中で拠り所を求めている多くの読者にとって、母親を中心とした愛情に満ちた核家族のイメージが魅力的なものと映ったこともあげられよう。⁴⁷

ローヴォルト出版社は、1934 年には『ベルゼンブラット』のタイトル頁を使ってファラダの作品を宣伝した。ファラダは、ゲッベルスにとっては、「システム時代」の成功した作家のうち、新しい帝国のために獲得すべき一人であったが、彼の大衆的な成功は、ローゼンベルクのグループにとっては必ずしも評価に値するものではなかった。

ファラダの人気を説明できるものは、わかりやすいスタイル、逸脱することのない平板で凡庸な日常の語彙、きわめて巧妙な構成によって緊張を生む能力、そして最後に彼の語りの迅速

⁴⁵ ハンス・ファラダ (赤坂桃子訳) 『ピネベルク、明日はどうする!?!』 (みすず書房) 2017 年。

⁴⁶ Hans-Fallada-Archiv, Akademie der Künste Berlin. Zitiert nach Werner Liersch: Kleiner Mann — Was mit Dir tun? In: Carsten Cansel/Werner Liersch (Hg.): Hans Fallada und die literarische Moderne. Mit 23 Abbildungen. Göttingen: V & R unipress 2009, S.67-77, hier S. 75.

⁴⁷ 鷺巣由美子: ホワイトカラーの家族像 ファラダの『しがない男よ、さあどうする』を中心に (『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 3 号、1999 年、221~237 頁所収)、233 頁参照。

なテンポである。彼の作品の乱雑な素材の堆積が、無批判な群衆の娯楽の衝動を満足させるのだ。それでもなお、ファラダのそのような文学的駄作に反対して、きわめて厳しい声をあげることが、常に私たちの課題であり続ける。⁴⁸

作品の成功は、1939年におよそ48,000マルクであったファラダの印税収入を、1942年には74,000マルク以上にまで押し上げ、快適で自立した生活をもたらした。だが、経済的な成功も、彼が拘留やローゼンベルク一派からの拒否的な態度から受けた精神的な傷を持続的に癒すことはできなかった。ファラダは1947年に、アルコールとモルヒネの中毒の結果死去した。

4 青少年文学

1	Johanna Spyri ヨハンナ・シュペーリ	Heidi 『ハイジ』	1880	30.0
2	Karl May カール・マイ	Schatz im Silbersee 『シルバー湖の宝』	1894	30.0
3	Fritz Koch-Gotha フリッツ・コッホ＝ゴータ	Die Häschenschule 『うさぎ小学校』	1924	20.0
4	Waldemar Bonsels ヴァルデマル・ボンゼルス	Die Biene Maja und ihre Abenteuer 『みつばちマーヤの冒険』	1912	15.5

青少年文学の4作品は、いずれもナチス時代以前からのロングセラーである。

ヨハンナ・シュペーリの『ハイジ』（1880年）が広範な受容をみたのは、郷土文学的な側面にもよるであろうが、あるいはむしろ同時代の文学の状況からの逃避によるものかも知れない。

カール・マイの『シルバー湖の宝』（1894年）も19世紀の産物であるが、こうしたインディアンを主人公とする冒険小説が、20世紀前半において、青少年だけでなく、大人にも多く読まれた理由としては、「合理化の波による労働の質的变化」⁴⁹が指摘されている。つまり、労働がとるに足らない無意味なものと感じられ、アイデンティティーや現実が失われたことが、人々を自由な領域の探索へと向かわせたのである。

ところで、ナチス時代におけるマイのブームの契機となったのは、カール・マイ出版社

⁴⁸ Die Bücherkunde 5 (1938), H. 1, S. 49. Zitiert nach A187.

⁴⁹ Jan Berg u. a.: Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag GmbH 1981, S. 208. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他（山本尤他訳）『ドイツ文学の社会史』（上）（法政大学出版局）1989年、356頁を参考にした。

(Karl-May-Verlag) が 1938 年に創立 25 周年を迎えたことであった。このとき、出版社は、宣伝パンフレットにおいて、カール・マイの本が総統のお気に入りの本であることを強調した。また、『フェルキッシャー・ベオーバハター』(Völkischer Beobachter) や『黒い軍団』のようなナチスの雑誌にも肯定的な書評が掲載され、著名なナチ作家もマイに対して肯定的な発言をした。例えば、次のようなものである。

青年時代にカール・マイを読んでいなかったら、私の発展には隙間が感じられねばならないでしょう。彼はその作品で、私たちの青春の空想の空間を大胆に捉え、青年のまだ硬直化していない心の深みを余すところなく表現したのです。——永遠に若いドイツ人カール・マイが。帝国議会での総統の演説の後に、1938 年 2 月 20 日 ハンス・ツェーバーライン。⁵⁰

こうして、ヒトラーがその愛着を国民同胞と共有していたマイの冒険小説は、ナチス時代のベストセラーとなり、1943 年には「国防軍総司令部の特別版」も刊行され、前線兵士の読書に供された。

しかし、他方で、このようなマイの本の優遇は、ナチスに反対する人々の非難的ともなった。例えばクラウス・マンは、1940 年に、論考『カール・マイ ヒトラーの文学指導者』(Karl May, Hitler's Literary Mentor) を発表し、オールド・シャッターハントの確信と戦術に対するヒトラーの偏愛が実際の政治に移されたことを、そして、マイが数百万人の読者に否定的な影響を与え、彼らの心と魂を偽善的な道徳と残酷な行為の賛美で汚染したことを批判した。(Vgl. A198) もっとも、すでに 1933 年以前から、青少年への悪影響という点で、マイには厳しい批判もなされており、ナチスの政権獲得後には、マイの作品が「青少年のための良書カタログ」に掲載されることに対して、強い反対意見も出された。(Vgl. Ebenda) とはいえ、マイは詩人というよりは、大衆的・通俗的な国民作家に過ぎず、ローゼンベルクのようなイデオログから見れば、もともと推奨に値する作家には含まれなかった。

なお、ナチスからの庇護と、それに対する反ナチスからの批判においては、マイの文学がナチズムと共鳴する部分を有することが前提とされているが、それとは異なる見方もあることも指摘しておきたい。ジョージ・L・モッセ (George L. Mosse) は、論考「ドイツ人が本当に読んだものは何か——マルリット、マイ、ガングホーファー」において、マイの文学は暴力の行使と結びつくものではなく、ナチスの野蛮を先取りしてなどいないということを、詳しく論じている。モッセは、カール・マイの主人公たちはいかにしてプレーリーを征服したのか、と問う。——それは決して火と剣によってではない。オールド・シャッターハントにとって、残忍さや流血は嫌悪に値するものである。彼は敵を殺すことなく、「神と人間の正義」⁵¹ によって敵を打ち倒す。したがって、モッセによれば、マイの作品はすべて、「同情、法、および秩序」⁵² を説いているのである。

⁵⁰ Eintragung im Gästebuch des Blockhauses. In: 25 Jahre Schaffen am Werke Karl Mays. Allen Freunden des Volksschriftstellers gewidmet vom Karl-May-Verlag, Radebeul bei Dresden. 1. Juli 1938, S. 48. Zitiert nach A197.

⁵¹ George L. Mosse: Was die Deutschen wirklich lasen. Marlitt, May, Ganghofer. In: Reinhold Grimm/Jost Hermand (Hg.): Popularität und Trivialität. Fourth Wisconsin Workshop. Frankfurt am Main: Athenäum Verlag 1974, S. 101-120, hier S. 103.

⁵² Ebenda.

ヴァルデマル・ボンゼルス『みつばちマーヤの冒険』(1912年)は、ドイツの青少年文学の中で、『ハイジ』と同様に世界的に有名になった。1912年に創刊された本作品は、1938年には総刊行数がおよそ77万部となり、ナチス時代だけでも少なくとも15万部が販売されたと見積もられる。

ところで、意外なことに、本作品がベストセラーになるきっかけは、第一次世界大戦中に前線兵士の間で読書が広まったことにあった。その理由については、愛国主義的な観点とそれとは異なる観点の二通りが考えられるが、それについて「みつばちとすずめばちの戦い」の章を中心に見たとき、次のようなことが言える。⁵³ まず、愛国主義的な観点からは、敵をみなごろしにせよというみつばちの女王の言葉がヴィルヘルム二世の「フン族演説」と類似していること、善良で勤勉なみつばちの民族が強欲で力にまさる仇敵に襲われるという場面設定が、第一次世界大戦時のドイツにおける国家主義的なメンタリティーと一致すること、女王バチと働きバチを女王と臣下の関係とみなす通俗的な考え方の利用が、君主的な国家観を支持していることなどが指摘される。だが、そのような見方は、多様性を持つこの作品の単純化・矮小化にほかならず、また1917年以降、ドイツで厭戦気分が広がったことや、戦後に戦争の悲惨さを描いたレマルクの『西部戦線異状なし』のような作品が幅広く共感を得たことを考慮したとき、必ずしも適当とは言えない。そこで、見方を変えたと、そこには例えば、死にゆくすずめばちの士官に対してマーヤが見せる慈悲の心や、戦争終結を決断するにあたってすずめばちの指揮官が見せる文民的な理性が指摘される。ドイツの敗戦を前にして、希望のない過酷な状況に置かれていた前線兵士らの心を捉えたのは、愛国主義的な要素よりもむしろ、現実の戦争では示されなかったこうした崇高な人間性の描写だったとも考えられるのである。

とはいえ、著者であるボンゼルス自身はある程度体制に順応していたとみなすのが適当と思われる。確かに、ボンゼルスはナチス時代の当初は批判的に見られ、『みつばちマーヤの冒険』を除く多くの作品が禁止され、焚書に付された。詳細は明らかではないが、一部の作品に見られる性的放埒さが主な原因だったのではないかと推察される。⁵⁴ しかし、やがて、第三帝国においてボンゼルスが朗読のために動員されることになったとき、ミュンヘン＝オーバーバイエルンの大管区指導部から所見を求められたシュタルンベルクの管区指導者は、「W・ボンゼルスは、彼の幾つかの本の破壊を通じてかなりの損害を被った。にもかかわらず、彼は新しい時代に適応し、順応しようと試みている」⁵⁵ と評価し、それに基づいて、大管区指導部は次のように結論づけた。

上記の者は、ナチスの党员ではないが、ナチス作家同盟に所属している。彼の社会的態度は申し分ない。ボンゼルスは、運動の義務に対処しようと努めている。ミュンヘン＝オーバーバイエルン大管区指導部は、いかなる政治的疑念も唱えない。⁵⁶

⁵³ 詳細は、竹岡健一：『ミツバチ・マーヤの冒険』における「ミツバチとすずめばちの戦い」について——戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察（かいろすの会『かいろす』第59号、2021年、1～8頁所収）を参照。

⁵⁴ Vgl. Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 112.

⁵⁵ Gauleitung München-Oberbayern an Kreisleitung Starnberg vom 17. 7. 1939. In: BArch (ehem. BDC), RK, Bonsels, Waldemar, 21. 2. 1881. Zitiert nach A219.

⁵⁶ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

その後、啓蒙宣伝省とローゼンベルクの著作課は、ボンゼルスに対して次のような判断を下した。

ボンゼルスがその作品を通じて近年疑いなく達成している外国への好ましい影響という観点から、彼の人物と創作にはいかなる困難も準備されない。党自体はある種の慎重さを保つものの、彼の作品の通常の振興に対して異議を唱えるものではない。⁵⁷

ボンゼルスの60歳の誕生日には、ゲッベルスが個人的に電報を送って祝福した。

なお、ボンゼルスのナチズムへの順応には、彼の反ユダヤ主義も含まれるかも知れない。実際、それに対する非難により、彼の作品の一部、例えば『ドズィトス 時代の変わり目からの神話的報告』(Dositos. Ein mythischer Bericht aus der Zeitwende, 1943年)は、戦後の一時期、アメリカで出版が禁止された。これについて、ボンゼルス自身は次のように弁明している。

実際に問題になったのは、ドイツ性とユダヤ性の間の純粋に事実に基づく議論であり、その際、私は(今ではなく当時)はっきりと党から距離をとっていました。⁵⁸

以上のほか、フリッツ・コッホ＝ゴータが絵を描き、アルベルト・ジクストゥス (Albert Sixtus) が文章を書いた『うさぎ小学校』(1924年)も、子供向けの本のロングセラーである。

5 外国文学

1	Trygve Gulbrandsen トリグヴェ・ガルブラ ンセン	Und ewig singen die Wälder 『そして森は永遠に歌う』	1935	56.5
2	Trygve Gulbrandsen トリグヴェ・ガルブラ ンセン	Das Erbe von Björndal 『ビョルンダルの遺産』	1936	56.5
3	Ernst Zahn エルンスト・ツァー ン	Lukas Hochstraßers Haus 『ルーカス・ホーホシュトラ ーサーの家』	1907	35.2
4	Gustav Renker グスタフ・レンカー	Heilige Berge 『聖山』	1921	30.1

⁵⁷ Schreiben [vermutlich RSK] an Wilhelm Baur vom 23. 2. 1943. In: BArch (chem. BDC), RK, Bonsels, Waldemar, 21. 2. 1881. Zitiert nach A220.

⁵⁸ Brief Book Section, Library, Cultural Relations Branch, Information Services Division an Licensing Adviser vom 16. 7. 1948. In: BArch (chem. BDC), RK, Bonsels, Waldemar, 21. 2. 1881. Zitiert nach ebenda.

5	Knut Hamsun クヌート・ハムスン	Segen der Erde 『土の恵み』	1918	>30.0
6	Knut Hamsun クヌート・ハムスン	Victoria 『ヴィクトリア』	1921	>30.0
7	Warwick Deeping ウォーウィック・ディー ーピング	Hauptmann Sorell und sein Sohn 『ソレル大尉とその息子』	1927	30.0
8	John Knittel ジョン・クニッテル	El Hakim 『エル・ハキム』	1936	30.0
9	Margaret Mitchell マーガレット・ミッチ ェル	Vom Winde verweht 『風と共に去りぬ』	1937	30.0
10	Hervey Allen ハーヴィー・アレン	Antonio Adverso 『アントニオ・アドヴァース』	1935	26.4
11	John Knittel ジョン・クニッテル	Via Mala 『ヴィア・マラ』	1934	25.3
12	Axel Munthe アクセル・ムンテ	Das Buch von San Michele 『サン・ミケーレ物語』	1931	16.0

外国文学には 12 作品が含まれるが、地域としては、スカンジナビア、アメリカ、スイス、イギリスに分けられる。

(1) スカンジナビア

ナチス時代のドイツの書籍市場で翻訳が最も多く販売されたのはスカンジナビアの作家だったが、中でも際立っているのは、ノルウェーのトリグヴェ・ガルブランセンとクヌート・ハムスンであった。前者は、特に成功したビョルンダル三部作のうち『そして森は永遠に歌う』（1935年）と『ビョルンダルの遺産』（1936年）が、ミュンヘンのランゲン＝ミュラー出版社（Langen Müller Verlag）で刊行された。

スカンジナビアの作家のドイツでの成功には、彼らのヒトラーの運動への親近感や、ノルウェーの文化に対して開かれたナチスの文芸政策、およびドイツの読者のスカンジナビアへの一般的な関心が功を奏したと思われる。そのため、ナチスの文芸指導者からはやや通俗的だとみなされながらも、貸出図書館の代表者からは次のような言葉で推奨された。

この素晴らしい小説は、すぐれた想像力の賜物であり、偉大な作家としての才能に奉仕する

厳しい自己鍛錬の賜物である。私たちはこの本を貸し出し図書館に強く推薦する。その本はとも多くの読者を見いだすであろう。⁵⁹

とはいえ、ガルブランセン自身は、ナチスに対して批判的であった。彼は、1936年に、新聞『アフトゥンポッスン』(Aftenposten)の通信員として、ベルリン・オリンピックの取材のためにドイツを訪れたものの、講演旅行の誘いは断り、ノルウェー占領後も、ドイツの進駐軍とは距離を保った。にもかかわらず、彼の文学に対しては、「血と土の文学のスカンジナビア版」(A243)であるとの見方もなされている。

クヌート・ハムスの『土の恵み』(1918年)と『ヴィクトリア』(1921年)も、第三帝国において広く受容された。ゲッベルスは、このノーベル賞作家を、すでに1920年代から「最も偉大な生きた語り手」⁶⁰として評価しており、啓蒙宣伝大臣になってからも繰り返しハムスを読み、称賛している。一方、ハムスの側でもドイツに対して好感を抱き、親ナチスのクヴィスリング(Quisling)政権を支持した。1940年4月9日のナチス・ドイツによるノルウェー占領の一か月後には、国民に対して次のように述べたほどである。

ノルウェー人よ！ 武器を棄てて、家に帰れ！ ドイツ人は私たちみんなのために戦い、私たちおびすべての中立な人々に対するイギリスの暴政を今こそ打ち破るのだ。⁶¹

また、ハムスのみならず、彼の妻マリーもノルウェーのナチスを支持し、1940年秋には、同国のファシズム政党である「国民連合」(Nasjonal Samling)に入党した。と同時に、彼女はドイツで作家として活動し、青少年向きの作品で成功した。

ゲッベルスにとって、ハムスは、とりわけ第二次世界大戦の開戦後は、単に敬愛すべき「精神的なヨーロッパからの帝国の最良の友人」⁶²であるのみならず、ナチスに対して好意的な数少ない外国の著名人の一人として、かけがえのない存在となった。その際、ゲッベルスにとって特に都合がよかったのは、「彼ほどイギリスに敵対的な発言をする偉大な人物は滅多にいない」⁶³ことであった。1943年初夏には、ハムスは、ゲッベルスとヒトラーを訪問した。彼は、歓待への御礼として、彼がノーベル賞を受賞した際に送られたメダルをゲッベルスに贈り、次のように述べた。

大臣、あなたのように理想的かつ飽くことのないやり方で、年々歳々文書と口頭でヨーロッパと人類のために尽力した人物を、私はほかに存じません。⁶⁴

⁵⁹ Die Zeitschrift der Leihbücherei, H. 15, 10. 8. 1935, S. 9. Zitiert nach A242.

⁶⁰ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 24. 8. 1928. Zitiert nach A243.

⁶¹ Zitiert nach Aldo Keel: Knut Hamsun und die Nazis. Neue Quellen, neue Debatten. Neue Zürcher Zeitung vom 9. Februar 2002. Zitiert nach A244.

⁶² Tagebuch von Joseph Goebbels vom 8. 3. 1940. Zitiert nach A243.

⁶³ Ebenda. Zitiert nach A244.

⁶⁴ Aldo Keel: Knut Hamsun und die Nazis. Neue Quellen, neue Debatten. Neue Zürcher Zeitung vom 9. Februar 2002;

また、1943年には、ナチス・ドイツが主催したヴィーンの国際ジャーナリスト会議で、「イギリスよ、膝を屈せよ！」⁶⁵と叫び、ヒトラーの死に際しては、追悼の言葉を新聞に発表した。

ハムスは、ドイツの文芸指導者にとって、「彼らの意味で民族的作家である」(A244)という理由から、文学的な価値を認められていた。彼は、技術的な現代と伝統的な生活の総合を、モデルネと農民的な生活との和解を求める「土着の現代性」(A245)の代表者として称賛されたのである。中でもローゼンベルクは、ハムスの文学はナチスの世界観にぴったりと一致しているとみなし、『二十世紀の神話』(1930年)において、『土の恵み』を次のように讃えた。

『土の恵み』は、木の犁を押すときでも英雄的で、筋肉を動かすごとに実を結び、未知の涯まで一直線に進むといったその永遠の根本形式において、北方的意志を歌った今日の大叙事詩である。⁶⁶

このような意味で、ハムスの作品がナチス・ドイツで大幅に売り上げを伸ばしたのは、彼が明確にナチスを支持したと同時に、ナチスの側でも彼の作品の内容が望ましく、プロパガンダの道具としての利用価値があったためだと思われる。

だが、それとともに、そこにはハムスの妻マリーによる内助の功があったことも見逃せない。彼女のナチスへの協力はむしろハムスよりも積極的であり、1939年から1943年にかけて、毎冬ドイツに講演旅行に出かけ、ほぼ毎日、市民や兵士を前に、ローゼンベルクが庇護する北方協会の主催で朗読会を催した。⁶⁷それは、「クヌート・ハムスはドイツの勝利を祈っております」という言葉で始まり、続いて『土の恵み』の最初の2章と『ヴィクトリア』の愛のエピソードが幾つか朗読され、最後に彼女の子供向けの本から幾つかの話が読まれた。元女優であったマリーにとって朗読はお手のもので、ドイツ語の発音もしっかりしていたので、この朗読会は人気が高かった。聴衆は平均500人、毎シーズン2〜3万人の人々がこの朗読会に参加した。こうしたマリーの活動も、ハムスを第三帝国で最もよく読まれた作家の一人にするのに貢献したのであった。

ところで、『土の恵み』は、ハムス自身の体験を踏まえて書かれた小説である。主人公の農夫イサクは、北の果ての未開の湿原を自分の腕一つを頼りに苦労しながら切り開き、人も、家畜も、畑の作物も育ち栄えるオアシスのような地に変えていくが、そこには、自然対文明、農村対都会、農業・牧畜・林業対近代産業といった、大まかな図式が見られる。だが、口唇に自分と同じ障害があること

Walter Baumgartner: Knut Hamsun. Hamburg: 1997, S. 117. Zitiert nach A244.

⁶⁵ Thorkild Hansen: Knut Hamsun. Seine Zeit — sein Prozeß. (Langen Müller. 1985), S.142. 酒井謙一：ナチ統治下でよく読まれた作家——クヌート・ハムスの場合（『京都工芸繊維大学繊維学部学術報告』第15号、1915年、121〜132頁所収）、124頁より引用。

⁶⁶ Alfred Rosenberg: Der Mythos des 20. Jahrhunderts. Eine Wertung der seelisch-geistigen Gestaltenkämpfe unserer Zeit. München: Hoheneichen-Verlag 1934, S. 438. 訳出にあたっては、アルフレット・ローゼンベルク（吹田順助・上村清延訳）『二十世紀の神話』（中央公論社）1939年、350頁を参考にした。

⁶⁷ 酒井謙一：前掲論文、126頁参照。

に絶望して長女を殺し、町の監獄で服役した妻が、一時的に文明の風に染まるものの、やがては自然に帰ることや、都会に出て読み書きもできるようになった兄ではなく、家を離れず、父を手伝って開墾に汗を流す弟が農場を継ぐことから見て取れるように、ハムスンにとっての理想は、むしろ自然の方にある。結末近くでは、イサクが切り開いたこの農園について、次のように述べられている。

ここにはあらゆるものが、人間が、動物が、畑の作物が成長する。イサクは種子を播く。夕日が穀粒を照らす。彼はそれを手から弧を描いてまく。それはまるで黄金の雨のごとく地に落ちる。そこへシヴェルトが来て、馬鋤で耕し、それをならし、そしてまた馬鋤で耕す。森や山が立ってそれを見ている。すべてが力に満ち、荘厳である。ここに因果と目的がある。⁶⁸

自然は、イサクのように苦労を惜しまない者には「土の恵み」を与えてくれるのであり、この農園はまさに、家父長イサクを中心として、自然と人間が手を携え合うユートピアなのである。

もっとも、1937年の『社会研究誌』第2号に掲載された、レーオ・レーヴェンタール(Leo Löwenthal)の「クヌート・ハムスン——権威主義的イデオロギーの前史のために」によれば、ハムスンの登場人物のように、近代産業社会の現実を目の前にした失望や無力感から自然へと逃避する人々には、受動的で、権威に屈伏しやすく、感傷的で野蛮であるといった特徴が見られるが、それこそまさにナチズムを信奉する人々の特徴である。⁶⁹

なお、スカンジナビアからのベストセラーには、スウェーデンのアクセル・ムンテの『サン・ミケーレ物語』(1931年)も含まれる。「一九〇〇年代のヨーロッパのよき時代を舞台にして、ひとりのスウェーデン人の医師の眼を通して描かれた、ヨーロッパの人と生活の記録」⁷⁰である本書は、同じく医師であるハンス・カロッサの伝記的随筆『美しき惑いの年』と対をなすものと言ってもよいであろう。

(2) アメリカ

1937年にドイツでマーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』の翻訳を刊行したH・ゴーヴェルツ出版社は、ヘンリー・ゴーヴェルツ(Henry Goverts)とオイゲン・クラッセン(Eugen Classen)によって1934年に設立された新しい出版社であった。彼らは、亡命生活を送っていた演劇家のカール・ツックマイヤーによって、第三帝国終焉後の出版活動にふさわしい出版人として、アメリカの秘密警察に報告されていた。それによれば、彼らは、グループI「好ましい(ナチスの影響がなく、抵

⁶⁸ Knut Hamsun: Romane I. Hunger/Kinder ihrer Zeit/Segen der Erde. München: List Verlag 1974, S. 759. 訳出にあたっては、クヌート・ハムスン(宮原晃一訳)『土の恵み』(下巻)(三笠書房)1940年、322頁を参考にした。

⁶⁹ 酒井謙一: 前掲論文、127~128頁参照。(Leo Löwenthal: Knut Hamsun. Zur Vorgeschichte der autoritären Ideologie [dtv Reprint. 1980]. 6. Band.)

⁷⁰ 近藤駿四郎: 日本語版への言葉(アクセル・ムンテ[久保文訳]『サン・ミケーレ物語』[紀伊國屋書店]1965年、i~ii頁) i頁。

抗を試みており、信頼できる)」⁷¹ に数えられていたのである。

ゴーヴェルツとクラッセンは、作品の通俗的な側面や、新興の小さな出版社が成功し過ぎることによって、必要以上にナチスの著作指導者の注目を引くことを警戒していたが、刊行後には、『フェルキッシャー・ベオーバハター』でも、「歴史的な雰囲気との啞然とするほどの再現と、驚嘆に値する精神的見地からの人間の性格の描写を伴った、アメリカの歴史の偉大で情熱的な叙述である」⁷² と称賛され、1940年代には、『風と共に去りぬ』はドイツの娯楽文学のカノンに属した。アメリカ合衆国の参戦とともに刊行は停止されたが、1944年にも、雑誌『帝国』において、ローゼンベルクの著作保護局の協力者であり、むしろ大衆的な成功の敵であったベルンハルト・パイルが、「敗戦はそれに先立つ戦争中の恐ろしい出来事よりも悪いという認識は、この本の肯定的な認識であり教えである」⁷³ と述べた。

第三帝国における『風と共に去りぬ』の読者の立場は、反動的ロマン主義に彩られた南部諸州の側にあった。⁷⁴ 彼らにとって、南北戦争は、北に対する南の文化の戦い、つまり、金銭とビジネスを至上とする文明化した人々に対する教養ある人々の戦いであった。そこでは、同盟支持者の繊細に養われた人種主義は、正しいものとみなされる。小説の中の「よい黒人」は、「主人」に進んで順応する。例えば、黒人の監督は、戦後の混乱の中でかつての主人であるスカーレットに再会したとき、次のように言う。

自由ならたっぷりもっております。私は再び毎週シュヴァルツザウアーを食べ、誰かが私になにをするのかしないのかを言ってくれ、病気になれば私の世話をしてくれます。⁷⁵

このような、一級と二級の人間がいる社会に対する意見表明はまさに、人種差別的な反ユダヤ主義を法的に定めた、1935年の「ニュルンベルク法」の考え方と合致していたのである。ドイツ語版の刊行後間もない頃、ミッチェルの大学時代のある女友達は、ドイツに旅行した際、ミュンヘンの書店で自分はマーガレット・ミッチェルの友人だと男性書店員に告げると、感激した店員から握手を求められ、「<素晴らしい作家のご友人の手に、キスしてもよろしいですか>」⁷⁶ と言われたという。

なお、アメリカ文学としては、ハーヴィ・アレンの『アントニ・アドヴァース』（1935年）もベストセラーに含まれる。アメリカが生んだ「国民的文学」⁷⁷ とも呼ばれるこの長編小説は、フランス

⁷¹ Carl Zuckmayer: Geheimreport. Göttingen: 2002, S. 15. Zitiert nach A239.

⁷² Aus einer Verlagsanzeige. Zit. nach Anne-M. Wallrath-Janssen: Der Verlag H. Goverts im Dritten Reich. Archiv für Geschichte des Buchwesens. Studien Bd. 5. München: 2007, S. 193. Zitiert nach A240.

⁷³ Bernhard Payr: Vom Winde verweht. Kriegsgedanken zu einem Vorkriegsbuch. In: Das Reich. 29. Oktober 1944. Zitiert nach A241.

⁷⁴ Vgl. Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 239. (ヤン・ベルク、他 (山本尤他訳)、前掲書、411頁参照。)

⁷⁵ Margaret Mitchell: Vom Winde verweht. [Gone with the Wind]. Deutsch von Martin Beheim-Schwarzbach. H. Goverts Verlag Hamburg, Leipzig: 1937, S. 753. Zitiert nach A238.

⁷⁶ エレン・F・ブラウン/ジョン・ワイリー二世 (近江美佐訳) 『世紀の名作はこうしてつくられた』(一灯社) 2013年、296頁。

⁷⁷ 大久保康雄: 序 (ハーヴェイ・アレン [大久保康雄訳] 『アントニ・アドヴァース』 [三笠書房] 1939年、頁数なし)。

で命を授かり、アルプスの山中で生まれ、イタリアで少年時代を過ごし、長じて西インドへ、アフリカへと渡り、最後はアメリカでその生涯を終えた、アントニー・アドヴァースという孤児の数奇な運命を描いたものである。

(3) スイス

『ヴィア・マラ』(1934年)と『エル・ハキム』(1936年)の著者であり、英語で執筆しながらも、ドイツ語圏を主な販売領域としたスイスの作家ジョン・クニッテルにとって、最大のファンの一人は、晩の読書の後で、「素晴らしく書かれた」、「魅惑的な本」、「心を深く動かす、とても素晴らしく、感動的な小説」⁷⁸などのコメントを日記に記したゲッベルスであった。それどころか、二人は、私的に、または1942年のワイマールでの詩人会議のような公的な機会に、幾度も直接会っていた。

ゲッベルスにとって、クニッテルは、ハムスンと同じように、ドイツにとってその名声が大きな意味を持つ、「精神的なヨーロッパからの帝国の最良の友人」⁷⁹であった。そのため、例えば1937年に、帝国著作院がクニッテルの『指揮官』(Der Commandant)を「共産主義的・平和主義的傾向」⁸⁰ゆえに「望ましからぬ著作のリスト」に載せようとしたとき、啓蒙宣伝省は、問題の箇所は登場人物の発言に過ぎないとして断固反対した。

この本の著者は、ドイツで最もよく読まれている外国の作家に属しており、決してその作品全体で共産主義的または平和主義的傾向を支持してはいない。それどころか、彼の著作は国際的な名声を享受しているため、すでに1933年に刊行されたこの本の禁止は、今日の時点では、宣伝的観点からしてドイツの文化政策的世評に不利な結果をもたらすであろう。⁸¹

ナチス・ドイツでの大きな成功と、世間にも知られずにはいられなかったゲッベルスとの出会いは、スイスにいるクニッテルに、ドイツのスパイ活動を行っているとか、スイスの知識人の間にナチズムを広めようとしているといった疑いをもたらし、警察や軍による調査もなされたが、証拠は見いだされなかった。というよりも、もともとクニッテルとゲッベルスの出会いは、常にスイス政府の承認のもとになされており、前者は帰国の度に報告を行っていた。その意味で、彼は、スイスとドイツの両方にとって、一種の外交官的な役割を果たしていたのかも知れない。

著者によってヴィルヘルム・フルトヴェングラー (Wilhelm Furtwängler) に捧げられ、ウィーンの『新自由新聞』(Neue Freie Presse)から「昨年の最も素晴らしく、最も偉大な小説の一つ」⁸²と讃え

⁷⁸ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 5. 8. 1939 zu El Hakim, vom 6. 8. 1939 zu El Hakim, vom 5. 7. 1939 zu Therese Etienne. Zitiert nach A224.

⁷⁹ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 31. 5. 1943 (Teil II, Bd. 8, Diktate). Zitiert nach A225.

⁸⁰ Schreiben RSK an das RMVP vom 5. 7. 1937. In: BArch (ehem. BDC), RK, Knittel, John, 24. 3. 1891. Zitiert nach ebenda.

⁸¹ Schreiben RMVP an Präsidenten der RSK vom 23. 7. 1937. In: BArch (ehem. BDC), RK, Knittel, John, 24. 3. 1891. Zitiert nach A226.

⁸² Neue Freie Presse vom 6. 1. 1935. Zit. Nach: Höhn-Gloor: John Knittel. Ein Erfolgsautor und sein Werk im Brennpunkt von Fakten und Fiktionen. Zürich: 1984, S. 182. Zitiert nach A227.

られた『ヴィア・マラ』は、1941 年にもなお、ベルリンのローゼ劇場で、フーゴー・ヴェレ (Hugo Welle) の演出で上演された。それどころか、ユニヴェルズム映画株式会社による映画化も着手されたが、上映には至らなかった。

なお、スイスからのベストセラーには、エルンスト・ツァーンの悲劇的家族小説『ルーカス・ホーホシュトラーサーの家』(1907 年) とグスタフ・レンカー のアルペン小説『聖山』(1921 年) も含まれる。前者の舞台は、——その作家から期待されるものとは違い——スイスの山の世界ではなく、都市のプロレタリアの環境に移されている。

(4) イギリス

イギリスの戦争帰還兵小説であるウォーウィック・ディーピングの『ソレル大尉とその息子』(1927 年) も、ミッチェルの『風と共に去りぬ』と同様、イギリスとアメリカの参戦まで持続したドイツ文化の「西方とのつながり」を証明しており、第三帝国における社会的現実が実際には「民族主義的であると同時にアメリカ的であった」⁸³ ことを示している。

6 高尚な文学

1	Walter Flex ヴァルター・フレックス	Der Wanderer zwischen beiden Welten. Ein Kriegserlebnis 『二つの世界の間の放浪者 ある戦争体験』	1916	62.2
2	Rudolf G. Binding ルードルフ・G・ビンディング	Der Opfergang 『犠牲』	1912	45.9
3	Eugen Roth オイゲン・ロート	Ein Mensch. Heitere Verse 『人間 愉快的詩』	1935	45.5
4	Rainer Maria Rilke ライナー・マリーア・リルケ	Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke 『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』	1906	35.9
5	Eugen Roth オイゲン・ロート	Die Frau in der Weltgeschichte 『世界史の中の女性』	1936	24.0
6	Eugen Roth オイゲン・ロート	Wunderdoktor 『奇跡の治療師』	1939	23.0
7	Werner Bergengruen ヴェルナー・ベルゲング	Der Großtyrann und das Gericht 『大暴君と審判』	1935	19.4

⁸³ Schäfer, Das gespaltene Bewußtsein, S. 156. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 93.

	リューン			
8	Günter Kaufmann/Baldur von Schirach (Hg.) ギュンター・カウフマン /バルドゥーア・フォン・シーラッハ (編)	Goethe an uns. Ewige Gedanken des großen Deutschen 『ゲーテから私たちへ 偉大なドイツ人の永遠の思想』	1938	>17.0
9	Rainer Maria Rilke ライナー・マリーア・リルケ	Ausgewählte Gedichte 『詩選集』	1927	14.0
10	Hans Carossa ハンス・カロッサ	Das Jahr der schönen Täuschungen 『美しき惑いの年』		14.0

高尚な文学には 10 作品が含まれる。

文学作品の中には時にカルト的な性格を持つものが見られるが、ヴァルター・フレックスの『二つの世界の間の放浪者 ある戦争体験』（1916 年）もその一つである。本書の刊行数は、第二次世界大戦終結までにおよそ 100 万部に達した。そのうち 3 分の 2 は 1933 年以後に販売されたが、その主な要因の一つは、本書が、第二次世界大戦下において兵士が戦地へ携えて行く著作となったと同時に、故郷に留まった人々のための慰めの書ともなったことであった。

本作品の言う「二つの世界」とは、ワンダーフォーゲルの世界と第一次世界大戦の戦争の世界であり、そこでは、ワンダーフォーゲルの青年が前線兵士へと変化を遂げ、英雄的な「犠牲の死」⁸⁴ を遂げる様が描かれる。だが、それに加えて、著者のフレックス自身が、志願兵として 1917 年に東部戦線で戦死したことが、本作品に特別な感動を与えた。つまり、主人公ヴルヒェとフレックスの二重の戦争体験が、第一次世界大戦後の理想主義的・国家主義的な若者たちにとって崇拜の対象となったのである。

本作品においては、ドイツ国家的な思想の正当化によって、平和を好んだワンダーフォーゲルの運動が戦闘的・攻撃的な運動へと転じ、戦争は「真正な義務の遂行」⁸⁵ であり、「偉大な共同体体験」⁸⁶ とみなされる。また、死は「英雄的な存在の不可欠の構成要素」であり、「攻撃的・美学的なナショナリズムの最上位の善」⁸⁷ となる。決定的なのは、「戦うこと」であり、「安穏な暮らしの中で名誉を

⁸⁴ Walter Flex: Der Wanderer zwischen beiden Welten. Ein Kriegserlebnis. München: [o. J., ¹1916], S. 12. Zitiert nach A254.

⁸⁵ Irmela von der Lühe: Der Wanderer zwischen beiden Welten von Walter Flex. In: Wehrwolf und Biene Maja. Der deutsche Bücherschrank zwischen den Kriegen. Hg. von Marianne Weil. Berlin: Verlag Ästhetik und Kommunikation 1986, S. 107-125, hier S. 113.

⁸⁶ Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 370. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他（山本尤他訳）、前掲書、624 頁を参考にした。

⁸⁷ Irmela von der Lühe: A. a. O., S. 117.

失わない」⁸⁸ ことである。

このような本作品は、第一次世界大戦の敗戦とヴェルサイユ体制という屈辱的な経験をしたワイマール共和国からナチス時代にかけてのドイツ人にとって、「戦争と死の美しさへの支持を表明する祈祷書」、たとえ敗れて数百万人の人々が犠牲になろうとも、戦争はきわめて高い意義を持つという確信を伝える「啓示と浄化の本」⁸⁹ となった。本作品の読者は、ナチスの権力掌握と民族主義的な国家の設立を目の当たりにして、そのような至高の意味が間もなく再び与えられると確信したのである。

1912年に初版が刊行されたルードルフ・G・ビンディングの『犠牲』（1912年）は、ナチス時代に広く普及し、ライプツィヒのインゼル出版社（Insel Verlag）の野戦郵便版としても刊行され、1942年にはファイト・ハーラン監督（Veit Harlan）の下で映画化された。

主人公のアルプレヒト・フローベンは、憧れの従妹オクタヴィアと結婚する。だが、彼は、秘密めいた隣人の女性ジョイーに引かれる。そして、アルプレヒトとジョイーは、貧しい環境にある子どもを救う仕事を通してコレラに感染する。アルプレヒトは命を落とすが、彼の一番の心配は、ジョイーもまた命を落とすことである。そこで、オクタヴィアは夫の服を着て散歩に出かけ、彼の恋人に挨拶をする。そのとき、ジョイーは、気高いオクタヴィアの犠牲を無駄にしないためにも健康を回復せねばならないという義務を感じる。

ここに描かれた犠牲は、第二次世界大戦において兵士から求められた自己犠牲とはほとんど関係ないように思われるが、本作品はナチスの関係者から高く評価された。例えば、ハインリヒ・ヒムラーは、すでに1920年に『犠牲』を読み、「自分自身とその感情を十分かつ完全に支配する高貴な、自己を犠牲にする女性の物語である」⁹⁰ と記した。また、8年後にも、「悲劇と十分な人間性と女性の崇高さの物語だ。これらの人々は気高く偉大である」⁹¹ と記している。1940年の『書籍研究』では、ヘルムート・ランゲンブーハーが、「ビンディングが彼の作品に与え、これらの仕事を素晴らしい内面的態度への理解を持つすべての人々が享受し得るものとする注意深い言葉の取り扱い」⁹² を評価した。

しかしながら、フランクフルト大学の名誉博士（1927年）であり、ゲーテ・メダルの受賞者（1932年）でもあるビンディングのナチズムに対する関係は、終始曖昧なものであった。例えば、彼は1933年10月に、彼の名前がヒトラーへの忠実の誓いの中にあることに抗議した。だが、その直後、ある文学賞にローベルト・ムージル（Robert Musil）を推薦した彼は、プロイセン科学・芸術・国民教育省に対して、「ムージルがユダヤ人だとは思わなかった」⁹³ と謝罪した。彼はまた、アルフレート・モンベルト（Alfred Mombert）がプロイセン詩人アカデミーから粛清されたことに同情したが、1934年には、自らがその後継組織であるドイツ詩人アカデミーの副会長となった。さらに、ノーベル文学

⁸⁸ Ebenda, S. 118.

⁸⁹ Ebenda, S. 122.

⁹⁰ Lektüre. [Himmlers Leseliste]. In: Nachlass Himmler. BArch N 1126/9, Bl. 24. Zitiert nach A259.

⁹¹ Lektüre. [Himmlers Leseliste]. In: Nachlass Himmler. BArch N 1126/9, Bl. 63. Zitiert nach ebenda.

⁹² Hellmuth Langenbuecher: Rudolf G. Binding als Kündler deutscher Diesseitsfreudigkeit. In: Die Bücherkunde 7 (1940), H. 7. Zitiert nach A259.

⁹³ Brief vom 29. 11. 1933. Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 102.

賞受賞者トーマス・マンに対して、彼がナチス・ドイツに反対しなかったことを非難しながら、1935年には、内務大臣フリックに、トーマス・マンの60歳の誕生日に敬意を払うよう提案した。

同じようなビンディングの曖昧な態度は、枚挙に暇がない。だが、1933年5月21日に「ケルン新聞」に公開されたロマン・ロランへの書簡において、次のようにナチスのテロを擁護したことは、決定的と言える。

私たちは、独自の声明を、(あなたがそう解釈したいなら)暴力への煽動を、ユダヤ人のような他の人種を傷つけるに違いない人種差別主義(racisme)を、思想の焚書を、つまり子供じみた本の薪の山を、「アカデミーや大学における政策」への(あなたがそう思うなら)干渉を、否定しません。——私たちは移住や追放を否定しません。しかし、どれほど恐ろしく見え、個人や多くの人にどれほど決定的な打撃を与えようと、すべては——どれほど決定的であろうとも——本来の主権、核心、出来事の真実にはいささかもかわりのない周縁的な現象なのです。(強調は原文)⁹⁴

『ハーケンクロイツの下での文学』(1966年)の著者エルンスト・レーヴィ(Ernst Loewy)も言うように、このようなビンディングのナチスに対する言葉をなかつたことにはできず、それは、ナチス体制の確立において、幾多の熱狂的なナチスの言動よりも、より大きな意味を持ったのである。

『人間 愉快な詩』(1935年)、『世界史の中の女性』(1936年)、『奇跡の治療師』(1939年)が広範な受容をみたオイゲン・ロートの成功は、エーム・ヴェルクの場合と似ている。1895年に生まれたロートも、ワイマール共和国時代にジャーナリストであり、最後は『ミュンヘン最新報』(Münchener Neueste Nachrichten)の地方編集部に勤めた。すでに1920年代初めに最初の詩集が刊行されたが、あまり注目されなかった。だが、1933年4月に恐らく政治的な理由から編集者のポストを失った後に、経済的な成功もたらされた。

詩集『人間 愉快な詩』は、「人間は……」という独特の言い回しが有名になった。

人間はこの世に生を受ける。だが、それがただ一度光を見たときだったことが、多くの暗い年月を過ごした後に、しばしば明らかになる。⁹⁵

また、この詩集は、『ある人間が、しばし楽しい時を共に過ごすよう同僚を招く』(Ein Mensch lädt Kameraden ein, mit ihm ein Stündchen froh zu sein)というタイトルで、国防軍のための限定版も刊行され、そこには兵卒の日常に関する次のような詩も見られた。

兵舎の門の前に多くの人が立っているのが見える。とても沢山の街灯が。でも、リリー・マ

⁹⁴ Antwort eines Deutschen an die Welt. Frankfurt am Main 1933. Zitiert nach ebenda, S. 103.

⁹⁵ Eugen Roth: Ein Mensch. Heitere Verse. Weimar: 1940 [1935], S. 9. Zitiert nach A268.

ルレーンだけは滅多にいない。⁹⁶

自らが執筆した後書きで、ロートは次のような展望を披露した。

私たちみな勝利が獲得されると望んだとき初めて、すでに完成している多くの本が刊行されるでしょう。これまで印刷されず、または雑誌の中にちらばっている、新しい「人間の詩」も。それまでは、待ち、働き、戦わねばなりません。——私がそのような緊張と苦勞に少しばかりほほえみを寄付することができるなら、喜びです。⁹⁷

ロートのユーモラスな詩は非政治的であり、国民の読書の欲求に歩み寄ったことで、エーム・ヴェルクの村の笑い話と同様に成功した。こうした時流に制約されない本は、時代とのかかわりを避けたい作家と、政治や戦争に疲れ、気晴らしを求める読者の両方にとって、一種の非難所となったのである。

ライナー・マリーア・リルケの作品のうち、第三帝国時代に多くの受容をみたのは、『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』（1906年）と『詩選集』（1927年）であった。このうち、1906年に300部の愛蔵版として刊行された『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』は、1912年に改めてインゼル文庫の第1巻として刊行されるや、わずか3週間で8,000部が販売された。その数は、第一次世界大戦勃発時には4万部、その終結時には16万部となり、ナチス時代だけを見ても、35万部以上となった。

物語られるのは、1660年、神聖ローマ帝国とオスマン帝国との戦闘に旗手として参加し、戦死したとされる、リルケの祖先クリストフ・リルケの物語である。そこには、祖国のために遠い異国の地まで赴いた誇りと死への不安、ヨーロッパの様々な国から集まった兵士との交流、祖国にいる家族や恋人への思い、悲惨な戦場、つかの間の休息と情欲などが描かれている。

もっとも、24歳のときに一夜で書きあげられたと伝えられるこの作品は、マルセル・ライヒ＝ラニッキー（Marcel Reich-Ranicki）が言う通り「甘ったるく」で「センチメンタル」⁹⁸であり、決してリルケの最良の作品というわけではない。しかし、それにもかかわらず、そこには、読む人を引きつけてやまない魅力があった。例えば、ライヒ＝ラニッキーは、ベルリンのユダヤ人ボーイスカウトのホームのタペでその作品と出会ったときのことを、次のように記している。

二十歳を超えるか超えないくらいの、私たちの指導者の一人が、天井の照明を消し、そばにあった机を中央に動かした。（中略）彼は第一次世界大戦時の長い軍の外套を着ており、一方の

⁹⁶ Eugen Roth: Ein Mensch lädt Kameraden ein, mit ihm ein Stündchen froh zu sein. Eine kleine Feldpostgabe von Eugen Roth mit Bildern von Christian Modersohn. Soldatenbücherei des Oberkommandos der Wehrmacht. Allgemeines Wehrmachtamt, Abt. Inland. Band 20, S. 52. Zitiert nach A268f.

⁹⁷ Ebenda, S. 111. Zitiert nach A269.

⁹⁸ Marcel Reich-Ranicki: Mein Leben. München: 2003 [1999], S. 65. Zitiert nach A252.

手にはポケットランプを持ち、もう一方の手には薄い本を持っていた。(中略) その若い男は、読み始めた。⁹⁹

このような本作品は、第一次世界大戦中と第二次世界大戦中の二度にわたって、若い世代の心を捉えた。つまり、恋愛の経験がないまま、強制的に、あるいは自発的に戦場へと向かった無数の若者たちにとって、自己同一視の可能性を強く持つ、カルト的な物語となったのである。

実際、『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』は、第一次世界大戦中の多くの兵士の行軍用の装備に含まれた。例えば、ハンス・カスパール・フォン・ツォーベリッツ (Hans Caspar von Zobeltitz) は、リルケの没年である 1927 年に発表した「背囊の中にコルネット」という文章の中で、次のように述べている。

新約聖書が最初の本だった。それは、ナイトテーブルからやってきたが、大抵の者たちのものとで、しばしば古く、使い古されていた！ 祖母と母が、すでにそれを静かな晩の時間に読んでいた。二冊目は、縦横数センチのマッチ箱の大きさで、知恵とドイツ性に満たされた、ミニチュア版の「ファウスト」だった。三冊目として、『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』がやってきた。¹⁰⁰

また、マックス・シェーンハウアー (Max Schönhauer) は、1941 年に、『島の船』(Inselsschiff) への寄稿において、ポーランド進軍の間に、戦友のタバが、まったく思いがけずリルケ一色となったことを報告している。朗らかに酒を酌み交わした後、会話が引き始めた頃、戦友の一人がこの歌の出だしを口ずさんだ。

私は驚いて彼を見つめた——一瞬だけ——、それから私は続けた、今再び彼が、そして突然みんなが目覚め、驚いた。すべての疲れも憂鬱も吹き飛んだようだった。ワインのむっとするような空気も同様に。私たち二人は互いに競い合って、リルケのこの素晴らしい詩の最も美しい箇所を記憶の中から魔法で呼び出した。私たちはまぎれもなく『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』の美に酔っていた。¹⁰¹

ここで注目すべきなのは、こうした報告自体が、その元になる図式を作品の中に持っていることであろう。すなわち、第 6 連で、兵士らが「かがり火」の周りに横たわり、「誰かが歌う」という期待

⁹⁹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

¹⁰⁰ Hans Caspar von Zobeltitz, „Der Kornett im Tornister. Ein dankbares Gedanken an Rainer Maria Rilke“, in: Daheim. Ein deutsches Familienblatt 63, 16 (Berlin, Leipzig, 15. Januar 1927), 17. Zitiert nach Gunnar Och: Der Cornet im Tornister — zur Rezeption literarischer Kultbücher. In: Kultbücher. Hg. von Rudolf Freiburg, Markus May und Roland Spiller. Würzburg: Königshausen & Neumann 2004, S. 31-44, hier S. 41.

¹⁰¹ Walter Simon (Hg.): Rainer Maria Rilke, Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke: Textfassungen und Dokumente. (Frankfurt a. M., 1974), S. 299. Zitiert nach ebenda, S. 42.

が、「昔の悲しい歌」¹⁰² を歌い始めるクリストフによってついに満たされる場面である。この意味で、この報告においても、シェーンハウアー自身が、旗手クリストフまたは語り手としてのリルケに、あるいはその両者に自己同一視しているのである。

ヴェルナー・ベルゲングリューンの『大暴君と審判』（1935年）は、ルネサンス時代のイタリアの神秘的な都市国家カッサーノで起きた、ある殺人事件をめぐる物語である。大暴君の宮殿の庭で、スパイのフラ・アゴスティエーノが殺害される。秘密警察長官ネスポリは、3日以内に殺害者を見つけ出さねばならず、さもなければ首をはねられる。捜査の中で、すべての人がすべての人に対して自責の念や疑念を抱く。だが、結局、疑いをかけられた人々のだれも殺害を犯していない。明らかになるのは、ある裁判手続きによって国家の秘密が暴かれるかも知れないため、大暴君自身がアゴスティエーノを排除する必要があったということである。

大暴君がヒトラーを連想させるこの小説は、意外にも、ローベルト・レイ（Lobert Ley）直属のドイツ労働戦線（統制された労働組合）に属していたハンザ同盟出版社（Hanseatische Verlagsanstalt）から刊行された。小説は当初、ローゼンベルクの著作局から、「その本は、読者に多くのことを与える。とりわけ、言葉が生き生きとしており、芸術的な価値があるからだ！」¹⁰³ との肯定的な批評を受けた。それどころか、『フェルキッシャー・ベオーバハター』は、「それはルネサンス時代の指導者小説である」¹⁰⁴ と評した。したがって、この小説がナチスからの批判や攻撃を受けたのは、ようやく1941年から1942年にかけてのことであったため、1941年にもなお国防軍の前線書籍販売のための特別版が生産された。

ところで、この小説の大暴君には、確かにヒトラーとの類似性が指摘される。例えば、彼は無制限の支配者である。また、彼は成り上がり者であり、老いた世代を排除する。彼は実用建築を愛し、子供がいない代わりに、建築物に特別な愛情を注ぐ。彼は特に好んで山の孤独な狩猟小屋に引きこもり、たくさんのごますりに囲まれている。唯一の明確な違いは、彼がナチスの支配者とは違って、賢明であり、判決に屈することである。

ベルゲングリューン自身は、ドイツ国家的な思想を持ち、軍事的な伝統を支持していたにもかかわらず、ナチズムを断固拒否した。なるほど1936年にベルリンで開催されたドイツ戦争詩人会議に参加し、ヒトラーへの誓いの電報も分かち合ったものの、彼はそれ以上譲歩するつもりはなかった。それは恐らく、彼が4分の3ユダヤ人の女性と結婚していたことも関係があったと思われる。ベルゲングリューンが公的な側からどのように見られていたかを、1940年6月14日のミュンヘン＝ゾルン（München-Solln）のナチス地区指導者による評価から知ることができるが、啓蒙宣伝省で著作の監視を担当していた専門部局の指示で作成された報告書には、次のように記されている。

ベルゲングリューンは、政治的に信頼できないであろう。窓にハーケンクロイツの旗を掲げ

¹⁰² Rilke, KA, Bd. 1, 143. Zitiert nach ebenda.

¹⁰³ Rezension. In: Die Bücherkunde 3 (1936), H. 3, S. 81. Zitiert nach A257.

¹⁰⁴ Zitiert nach Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 215.

たり、集會に喜んで参加したりしたとしても、そのほかの振る舞いは、彼が政治的に信頼できないことを示している。彼も彼の妻も子供も、組織のメンバーではない。「ハイル・ヒトラー」というドイツ式の挨拶は、彼にも彼の家族にも用いられない。彼がときおり手を少し上げることがありはするが、よく知られているように、彼はナチスの新聞雑誌を購読していない。この彼の立場の理由は恐らく、彼がその妻を通じてユダヤ人と親戚であることに求められる。¹⁰⁵

こうした事情から、ベルゲングリューンは、「望ましからぬ作家」としてすでに1937年に帝国著作院から除名され、以後の出版は、特別許可によってしか行えなかった。にもかかわらず、ベルゲングリューンは第三帝国において非常に成功した作家であったが、その主な理由は、彼自身が後に「闘争の書」¹⁰⁶と呼んだ『大暴君と審判』を始めとする彼の作品が第三帝国への批判を含んでいたことが、読者の共感と呼んだためだと考えられる。

ところで、1935年秋、第2回ドイツ図書週間の開催にあたり、ゲッベルスらによってゲーテとシラーの記念碑への献花が行われた。偉大な詩人の精神を呼び覚まし、ナチズムの運動が彼らの伝統を引き継ぐものであることを印象づけるためである。ドイツ古典主義の作品は、第三帝国においても教養のカノンに属したが、それゆえに、多かれ少なかれプロパガンダ的な目的のために利用された。その代表と言えるのが、ギンター・カウフマンとバルドゥーア・フォン・シーラッハによって編まれた『ゲーテから私たちへ 偉大なドイツ人の永遠の思想』（1938年）である。

編者の一人であるシーラッハは、ミュンヘン大学でドイツ民族学と歴史を学んでいた1925年にナチスに入党し、1929年にナチス・ドイツ学生同盟の指導者に指名され、1931年にナチス帝国青少年指導者に昇進した。その後、1932年にヒトラー専属の写真家ハインリヒ・ホフマンの娘との結婚によって、ヒトラーに近い人々の仲間に加わった。『教育の革命』（*Revolution der Erziehung*, 1938年）としてまとめられた講演や、『ヒトラー・ユーゲント 理念と形態』（*Hitler-Jugend Idee und Gestalt*, 1934年）のような著作において、またナチス青少年指導者の雑誌『意思と力』（*Wille und Macht*）の編集者として、シーラッハは、彼の管轄下に置かれた若いドイツ人からヒトラーとナチスの運動への無条件の服従を求めた。したがって、ゲーテのアンソロジーもこうした彼の信条の下に編まれたのであった。ただし、古典主義の作家は、支配者によって利用されただけはなかった。オイゲン・ロートの場合と同様、こうした本は、当時の現代文学に満足できず、好きな現代作家が禁止されたり追放されたりした人々にとって、一種の避難所のような役割も果たしたのである。

『美しき惑いの年』（1941年）は、ハンス・カロッサが、1897年10月から翌年夏にかけての大学生活を描いた自伝小説である。親友らと詩人リヒャルト・デーメルとの朗読会に行った話、自称フランス人の女性アルディーンとの奇妙な交流、知り合いの少女アマリーエへの思慕にも似た感情、大学で口述試験を受けたときに化学式が分からず苦心した話、若き女流詩人エレメンツ・マイヤーの家を訪ねるべく数日をかけて徒歩旅行した話など、様々なエピソードが描かれている。世紀末ミュンヘン

¹⁰⁵ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 90.

¹⁰⁶ Schreibtischerinnerungen, 160-61. Zitiert nach Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 214.

の古きよき時代の雰囲気を彷彿とさせるこの作品は、古典主義作家のアンソロジーと同様、第三帝国の文学に満足できない読者にとって、いわば「<国家公認>の逃避の読み物」(A260)となった。だが、それによって、カロッサは後年、「道徳的に非の打ちどころがない人物としての自らの名声をナチスの文芸政策のために役立てた」¹⁰⁷ との汚名を着せられることにもなった。

カロッサは、一面ではナチズムを決然と拒否し、1933 年以後、統制された詩人アカデミーへの招聘に勇敢に抵抗したが、他方で、繰り返し譲歩した。1934 年にはヒトラー・ユーゲントの前で朗読し、1938 年 8 月には第三帝国において最も重要で名声の高い文学賞であるフランクフルト市のゲーテ賞を受賞し、1938 年 3 月のオーストリア併合と同年 9 月末のチェコスロヴァキアのズデーテン地方の割譲に関して、11 月 20 日にベルリンのオペラハウスで行った講演「創造的創作活動の静けさについて」(Von der Beschaulichkeit des schöpferlichen Schaffens) で、総統の行為への感謝を表明し、1939 年の総統の 50 歳の誕生日に祝辞を書いた。そして 1941 年、ワイマールで開催された大ドイツ詩人会議において、ゲッベルスの発案になる「ヨーロッパ作家連盟」(Europäische Schriftstellervereinigung) の会長に任命された。

このような意味で、カロッサとナチスは——前者にとっては厳しい見方になるかも知れないが——もちつもたれつの関係にあったのである。カロッサにとって、ドイツは作品の市場として重要であった。他方、ナチスにとって、カロッサは外国に対するドイツ作家の代表者であると同時に、国内の市民的読者に自己同一視を可能にする市民的文学の代表者でもあった。その際、ナチスにとって最も大きな意味を持ったのは、新たに設立された「ヨーロッパ作家連盟」の会長としてカロッサを売り出すことに成功したことである。というのも、その連盟は、ドイツの指導の下で、占領された、ないしは中立的なヨーロッパの作家の連盟として、国際的なペンクラブに対抗するものだったからである。

こうして、いわばナチス・ドイツにおいて優遇され、その広告塔となったカロッサは、そこから多大な経済的利益と名声を享受した。1940 年には 12,600 マルクであった彼の収入は、1941 年にはおよそ 4 倍の 47,600 マルクへと高まり、1942 年にも 37,300 マルクであった。また、1942 年 9 月 6 日に雑誌『帝国』に掲載されたヘルベルト・ギュンター (Herbert Günther) の記事では、「カロッサが冬季に町に朗読に招かれると、今や最も大きなホールでさえ小さい」¹⁰⁸ とされている。

7 非政治的歴史小説

1	Gustav Schröer グスタフ・シュレーア ー	Heimat wider Heimat 『故郷対故郷』	1929	59.9
2	Horst Wolfram Geißler	Der liebe Augustin	1921	47.1

¹⁰⁷ Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 402. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他 (山本尤他訳)、前掲書、676 頁を参考にした。

¹⁰⁸ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 134.

	ホルスト・ヴォルフラム・ガイスラー	『愛しのアウグスティン』		
3	Ina Seidel イーナ・ザイデル	Das Wunschkind 『申し子』	1930	41.0
4	Gustav Schröer グスタフ・シュレーアー	Um Mannesehre 『男の名誉』	1932	41.0
5	Felix Dahn フェーリックス・ダーン	Ein Kampf um Rom 『ローマ攻防戦』	1876	35.9
6	William von Simpson ウィリアム・フォン・シンプソン	Die Barrings 『バリン家の人々』	1937	35.5
7	William von Simpson ウィリアム・フォン・シンプソン	Der Enkel 『孫』	1939	33.1
8	Ludwig Ganghofer ルートヴィヒ・ガングホーファー	Der Klosterjäger 『修道院の狩人』	1893	31.0
9	Ludwig Ganghofer ルートヴィヒ・ガングホーファー	Das Schweigen im Walde 『森の中の沈黙』	1899	30.3
10	Ludwig Ganghofer ルートヴィヒ・ガングホーファー	Edelweißkönig 『エーデルワイスの王』	1886	30.0
11	Ludwig Ganghofer ルートヴィヒ・ガングホーファー	Schloß Hubertus 『フーバルタス城』	1895	30.0

非政治的歴史小説には 11 作品が含まれる。

イーナ・ザイデルのきわめて浩瀚な小説『申し子』は、1930年に初版が刊行されてから1940年代にかけて、当時の最も成功した小説に含まれた。1934年の秋、ドイツ出版社は、『ベルゼンブラット』の表紙で、「権威ある小売店の一致した判断によれば、イーナ・ザイデルの『申し子』の新たな廉価

版は、今年のクリスマスの事業を支配するでしょう」¹⁰⁹と述べた。また、翌年には、同出版社は、ザイデルの50歳の誕生日を機に、この作家に注意を促すため、「4頁の『申し子』の特別パンフレット」、「『申し子』のポスター」、および「24×30センチの詩人の肖像」¹¹⁰などを書籍業に提供した。そして、1944年12月の雑誌『帝国』によれば、全面戦争の中で「どのような本が最も求められるか」という問いの答えは、イーナ・ザイデルの『申し子』であった。(Vgl. Adam 262)

小説で語られるのは、プロイセンの貴族に生まれたコルネリー・フォン・トラハトの物語である。時代はフランスがオーストリアに宣戦布告した1792年4月から1813年10月にかけて、主な舞台は、フランス軍の進軍と駐留の影響で政情が不安定な状態にあるかつての大司教座都市マインツと、対仏戦争の中心的な軍事拠点となったプロイセンである。マインツに嫁入りしたコルネリーは、夫クリストフの出征中、義母の世話と息子の教育を担いながら家を守る。つまり、戦時下のドイツ諸邦国が理想とした、政治的にも社会的にも規範となる母親の役割を担うのである。だが、クリストフは、いまだプロイセン軍が完全な勝利に至らないうちに、戦場で死を迎える。彼女は、愛する二人が最後にもにした夜に身ごもった「申し子」であり、夫と同じ名をつけられたクリストフと共に、後に残される。クリストフは、満13歳にして擲弾兵として出征し、1806年10月14日、イエナ高地カペレンドルフのフォン・プリンケン連隊殲滅の際に負傷する。その後、ベルリン大学の学生として政治学の研究に没頭し、また若き農場主として農村改革にも携わる。だが、満18歳の誕生日にコルネリーの死んだ姉の娘デルフィーネと結婚の約束をかわした彼は、ロシア敗戦の報を受け、再びプロイセン解放の義勇軍に加わり、命を落とす。それでも、母コルネリーは、祖国に殉じたクリストフの運命を幸福と信じ、母なるものが戦争を越えて勝利し得るという漠然とした希望を残す。

だが、その日は来るだろう。——来なければならぬ。——女たちの涙は、洪水と同じように、戦争の炎を永遠に消す強さを持つだろうから。¹¹¹

物語の中心的なテーマは、素性と家系がどの程度人生に影響をおよぼすのか、または人間がその血による規定から解放され得るのかという問いである。だが、作者自身が、「夫が戦死した後に生まれた息子が、二十年間、父親の運命に向かって歩いて行くのを見守る一人の女性の運命の叙述である」(『詩人、民族性、言葉』[Dichter, Volkstum und Sprache]、1934年)¹¹²と述べているように、ここではとりわけ「永遠に母親的なものの理念と、血と祖先の遺産によって条件づけられ、人間の中に影響をおよぼす生の法則の実現」¹¹³が重きをなしている。すなわち、ナチスによって奨励された良妻賢母の理想と国家繁栄のための純血の理念に符合する特徴である。ザイデルが、一面ではフェミニズ

¹⁰⁹ Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 101, Nr. 271 vom 20. November 1934, Titelseite. Zitiert nach A262.

¹¹⁰ Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel 102, Nr. 208 vom 7. 9. 1935, S. 3735. Zitiert nach ebenda.

¹¹¹ Ina Seidel: Das Wunschkind. Stuttgart: 1930, S. 1048. Zitiert nach A263.

¹¹² Zitiert nach Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 402. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他(山本尤他訳)、前掲書、677頁を参考にした。

¹¹³ Zitiert nach Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 188.

ムの先駆者とみなされながら、今日ではそうした点でまったく顧みられないのは、このように「ナチズムの母親崇拜にその対応物を見いだした、神話的なく根源に根づいた母性の英雄化」¹¹⁴ のためであろう。

こうした母親崇拜と祖先崇拜は、ナチスの文化政策にとってとても都合がよいものであったが、実際、ザイデルはナチスに対して協力的であった。彼女は、1932 年以後、芸術アカデミー文芸部門のメンバーであり、通信員の女性助手らの戦時の手紙の編集に携わり、1939 年のヒトラーの誕生日を祝う詩を執筆した。また、1941 年には、ウィーン市のグリルパルツァー賞を受賞している。

グスタフ・シュレーアーは、今日ではほとんど知られていないが、第三帝国時代には、とりわけ『故郷対故郷』（1929 年）と『男の名誉』（1932 年）が広く受容された。当時のベルテルスマン出版社に関する調査によれば、シュレーアーの作品は、大部分が「郷土文学と農民文学の民族主義的・ナチス的な再評価を代表するもの」¹¹⁵ である。例えば、『故郷対故郷』は、全体が 19 世紀のロマン主義的なスタイルで語られる。物語は 18 世紀頃のザーレ河畔の小都市で演じられ、その中心には、放浪する時計職人ハインリヒ・ピムフェルがいる。彼はその町が気に入り、間もなくその地の美しい娘に恋をするのである。描かれた世界はビーダーマイヤー的な雰囲気を持ち、それどころか、ビーダーマイヤー様式の指導的画家の一人カール・シュピッツヴェーク（Carl Spitzweg）を指す「シュピッツヴェーク」というキーワードさえ発せられる。

だが、そこで伝えられるのは、「故郷は人間の血管を流れる血によって規定される」（A278）という考え方である。登場人物たちは、「世代を通してとどろき流れる血の秘密の流れ」について、「故郷という言葉の中にあるが、それを解釈するのに詩人の言葉も十分ではない秘密に満ちたもの」¹¹⁶ について語る。

故郷！ それは責任と正当化、幸せと重荷、笑いと涙、力と弱点なのだ。¹¹⁷

とはいえ、このような意味で「血と土の文学」と呼べなくもない『故郷対故郷』の成功には、1933 年以後、禁止と亡命によって文芸市場の競争が鈍化したことも奏功した。むしろ、シュレーアー自身も、新しい国家への支持を控えなかった。例えば、1942 年、彼はベルテルスマン出版社の宣伝パンフレットのために『すべてはひとつ』（Alles ist eins）というタイトルの詩を寄稿し、民族共同体の理念を呼び覚ましたのであった。

世紀末の郷土芸術運動の流れを汲む娯楽作家ルートヴィヒ・ガングホーファーは、すでに 1920 年に死去しているが、第三帝国時代に 4 つの作品が幅広い受容をみた。すなわち、『エーデルワイスの王』（1886 年）、『修道院の狩人』（1893 年）、『フーベルトラス城』（1895 年）、『森の中の沈黙』（1899 年）である。ハンス・シュヴェーアテによれば、ガングホーファーの著作を特徴づける「健康」、「健全さ」、

¹¹⁴ Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 366.

¹¹⁵ Saul Friedländer u. a.: Bertelsmann im Dritten Reich. München: C. Bertelsmann Verlag 2002, S. 160.

¹¹⁶ Gustav Schröer: Heimat wider Heimat. Gütersloh: 1943 [1929], S. 225. Zitiert nach A278.

¹¹⁷ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

「明るさ」、「高み」、「高地」は、「深く考えないナショナリズム」や「ヴィルヘルム 2 世時代のブルジョワジーのプロイセン＝ホーエンツォレルンの君主主義と彼らの郷土と民族への憧憬」¹¹⁸ と結びついている。「高み」、「山頂」、「山」、「高地」といったものは、ゲーテをはじめとする芸術家たちには高貴な魂の存在と人間の本質の比喩であったが、ガングホーファーにおいては、「芸術的に形づくられたイメージの緊張状態と対立の深みもなく、創造性もなく、人間をめぐる問いもない」¹¹⁹。つまり、それは「通俗文学と権力イデオロギーが互いに認め合った」¹²⁰ 状態なのである。その意味で、シュヴェーアテは、ガングホーファーの自伝的著作を多く引用しながら、彼の思想がドイツ帝国と密接に結びついていたことを示し、彼の「健全な」、「高地の」郷土文学が、決まり文句と単純さのみを欲する通俗文学の読者に、「土」、「家」、「郷土」といったイデオロギーを植えつけようとしたことを厳しく批判するのである。¹²¹

しかし、他方で、彼の小説にそうした政治的イデオロギーを読み取ることは難しいという見方もある。例えば、ペーター・シュナイダーによれば、そこにはナショナリズムはほとんど感じられず、ガングホーファーが「血と土」の価値を高く評価するとしても、人種差別的な「血と土」の神話とはまったく関係はない。¹²² ガングホーファーの作品が大都市の読者に受け入れられた理由は、むしろ保守的な市民趣味との一致にあった。つまり、アルプスの山の世界を描いた彼の小説に出てくる山岳住民は、実は田舎の衣装をつけた小市民なのである。それらの作品は、明らかに権威主義的な構造を持ち、身分上のヒエラルキーが賛美され、社会的偏見は強く、アウトサイダーは排斥され、服従心が奨励されたのであった。

以上のほか、非政治的歴史小説には、フェーリックス・ダーンの『ローマ攻防戦』（1876 年）、ホルスト・ヴォルフラム・ガイスラーの『愛しのアウグスティン』（1921 年）、ウィリアム・フォン・シンプソンの『バリン家の人々』（1937 年）と『孫』（1939 年）が含まれる。これらのうち、帝国の建設から第一次世界大戦までの東プロイセンの貴族の一族を描いた『バリン家の人々』は、いわば家族叙事小説（Familiensaga）であり、そこでは故郷やその土地との結びつきが強調されている。

8 反戦文学

1	Erich Maria Remarque エーリヒ・マリーア・レマルク	Im Westen nichts Neues 『西部戦線異状なし』	1928	>100.0
---	--	--------------------------------------	------	--------

¹¹⁸ Hans Schwerte: *Ganghofers Gesundheit — Ein Versuch über sendungsbewußte Trivialliteratur*. 1965, S. 158. 引用は、横山香：戦後ドイツの大衆文化における“*Heile Welt*”の表象と言説——Ludwig Ganghofer の小説と映画を事例として（『奈良大学紀要』第 47 号、2019 年、1～17 頁所収）、11 頁に拠る。

¹¹⁹ Ebenda.

¹²⁰ Ebenda.

¹²¹ 横山香：前掲論文、11 頁参照。

¹²² Vgl. Peter Schneider: *Gerechtigkeit und Recht im Werk von Ludwig Ganghofer*. In: Michael Kilian (Hg.): *A. a. O.*, S. 149-188, hier S.186f.

反戦文学は、エーリヒ・マリーア・レマルクの『西部戦線異状なし』（1928年）である。

物語の冒頭、第一次世界大戦中のドイツのある学校で、老いた教師が生徒たちに愛国心を説く。生徒たちは進んで入隊を志願し、愛国歌を歌いながら教室を後にする。パウルは学友とともに内務班に配属され、厳しい訓練を経て一人前の兵士となる。前線に送られた彼らを古参兵たちがいたわってくれるが、砲撃を受けて仲間は次々と戦死していく。パウルは激戦中に砲弾穴へ落ちた際、同じ穴に飛び込んできた若いフランス兵を突き殺す。だが、そのフランス兵のポケットから妻子の写真が落ち、彼の胸は痛む。負傷休暇をもらって故郷へ帰ったパウルは、母校に立ち寄る。そこでは、相変わらず老教師が戦争を讃え、愛国心を説いている。パウルは教室で戦争の悲惨さを語ろうとし、軍国主義の教師や生徒たちを失望させる。休暇が終わったパウルは前線に戻り、知り合いになったフランス娘と楽しいひとときを過ごす。仲間の一人が弾片を受けて戦死する。そして1918年10月、長雨の後の晴れた日、戦場は珍しく静かで、ハーモニカの音も聞こえていた。一羽の蝶が飛んできて、パウルが塹壕からそっと手を出す。その瞬間、敵の狙撃兵の一発の銃弾が彼の若い命を吹き消す。その日、司令部は「西部戦線異状なし」と報告した。

とりわけこの最後の場面で有名なレマルクの『西部戦線異状なし』は、ドイツ文学における「最初の真のベストセラー」（A136）であると同時に、今日に至るまで、「最も成功したドイツの本の一つ」（A136）であり続けている。1928年11月10日から12月10日にかけて『フォス新聞』に前刷りが掲載された後、1929年1月31日に刊行された初版の3万部は即座に売り切れ、2月12日には5万部目が、2月23日には10万部目が供給された。同年3月には40万部目、5月には50万部目が、9月には80万部目が続き、1930年5月には100万部の境界が越えられた。こうして、1931年には28の言語の翻訳と点字でも刊行され、総刊行数は350万部になった。また、早くも1930年に、ルイス・ミルストーンのアメリア映画としてドイツに逆輸入された。

この作品のこれほど膨大な成功には、ウルシュタイン出版社の出版戦略が大きな役割を果たした。まず、刊行時期が十分に計算されていた。つまり、クリスマス商戦の中で他の数多くの新刊との競争の中に埋もれてしまうことが、意図的に避けられた。それによって、この作品は、1929年の1月と2月に市場を独り占めすることができたのである。次に、小説の刊行に先立って、十分な宣伝がなされた。ウルシュタイン出版社は、幾つかの地方新聞に一章の複写を許可したのみならず、幾つかの抜粋をダイレクトメールで送付した。また、自社の新聞と雑誌を宣伝に活用し、本の刊行日である1929年1月31日には、刊行数の多い3つの新聞にこの作品を絶賛する著名な作家の記事を掲載し、およそ260万人の読者に対して注意喚起がなされた。すなわち、『ベルリーナー・イラストリールテ・ツァイトゥング』（Berliner Illustrierte Zeitung、刊行数1,874,000部）ではカール・ツックマイヤー（Carl Zuckmayer）が、『ベルリーナー・モルゲンポスト』（Berliner Morgenpost、刊行数618,000部）ではベルンハルト・ケラーマン（Bernhard Kellermann）が、『ベルリーナー・ツァイトゥング・アム・ミッターク』（BZ am Mittag、刊行数174,000部）ではフェドール・フォン・ツォーベリッツ（Fedor von Zobeltitz）が記事を書いたのである。また、同じ日、『フォス新聞』（刊行数70,000部）では、この小説の本と

しての出版に関する記事が第一面に掲載された。同新聞には、2月5日にもフリッツ・フォン・ウンルー (Fritz von Unruh) の記事が掲載された。その上、『ベルゼンブラット』では、数か月にわたってほぼ毎日、頁全体の記事によって、この作品の最新の刊行数に関する情報が伝えられた。

このような『西部戦線異状なし』を同時代の他の戦争文学から隔てる主な要因は、保守的な側からの攻撃の対象となり続けたことであろう。本作品は、「粗野な、墮落させる本だ。ある隠遁者の戦争の記憶。それ以上何もない。二年後には、この本について話す人はもはやいまい」¹²³ というゲッペルスの読後感 (1929年7月) とは逆に、その後も読まれ続け、右翼的な人々はその影響力を削ぐために苦勞したのである。様々な新聞等に掲載された無数の中傷的な記事のほか、小冊子の形で刊行された批判として、ヴィルヘルム・ミュラー＝シュルト (Wilhelm Müller-Schuld) の『西部戦線異状なし 妄想の書』 (>Im Westen nichts Neues< eine Täuschung, 1929年) やゴットフリート・ニッケル (Gottfried Nickl) の『西部戦線異状なしとその真の意味』 (Im Westen nichts Neues und sein wahrer Sinn, 1929年) があげられる。ハンス・ライマン (Hans Reimann) がエーミール・マリーウス・レクヴァルク (Emil Marius Requark) という匿名で出版したパロディー『トロヤ戦線異状なし』 (Vor Troja nichts Neues, 1930年) も、レマルクの弱点を突くものであった。そして、ヨーゼフ・マグヌス・ヴェーナー (Josef Magnus Wehner) の戦争賛美小説『ヴェルダンの7人』 (Sieben vor Verdun, 1930年) もまた、レマルクへの反論として構想されたものであり、その後、無数の国粹主義的な小説がこれに続いた。さらに、小説のみならず映画も、ドイツ人の評判を貶めるという理由で映画上级審査所から上映禁止を宣告され¹²⁴、これに対する対抗措置として、ローヴォルト出版社から『絵で見る西部戦線異状なし』 (Im Westen nichts Neues in Bildern, 1931年) が刊行された。¹²⁵ こうして、レマルク自身によって戦争体験の重圧からの一種の自己解放として、非政治的なものとして執筆されたこの作品は、ほかならぬ「第一級の政治的重要事件」¹²⁶ となったのであった。

このような保守的な人々からの攻撃はまさに、『西部戦線異状なし』がそれほど多くの受容を見た理由を明らかにする。つまり、それは、1920年代にいたるところに存在し、戦争を理想化した、将校たちによる戦争文学への対案をなしたのであった。それらの戦争文学は、「華やかな言葉や安っぽいフレーズ」で「兵隊経験の素晴らしさ」を際立たせたが、そうした「栄誉の物語」を前にして、一介の「しがない兵士」は、彼らの経験に表現を与える「言葉や叫び」を探しても「無駄」¹²⁷ であった。それに対し、「きわめて恐るべき戦争の<真の>イメージを生き生きと保つ」¹²⁸ レマルクの小説によって、今やこの「叫び」が描出されたのである。

また、そうした「戦争の<真の>イメージ」を、つまり「信頼すべき戦争報告」¹²⁹ を描くにあた

¹²³ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 21. 7. 1929. Zitiert nach A137.

¹²⁴ Vgl. Kornelia Vogt-Praclik: Bestseller in der Weimarer Republik 1925-1930. Eine Untersuchung. Herzberg: Verlag Traugott Bautz 1987, S. 55.

¹²⁵ Vgl. Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 237. (ヤン・ベルク, 他 (山本尤他訳), 前掲書, 406頁参照。)

¹²⁶ Kornelia Vogt-Praclik: A. a. O., S. 50.

¹²⁷ J. E, 1928; zit. Nach: Schneider 2004, S. 203f. Zitiert nach Christian Klein: Kultbücher. Theoretische Zugänge und exemplarische Analysen. Göttingen: Wallstein Verlag 2014, S. 242.

¹²⁸ J. E, 1928; zit. Nach: Schneider 2004, S. 203. Zitiert nach ebenda.

¹²⁹ Christian Klein: A. a. O., S. 243.

って、「〈傾向のなさ〉」¹³⁰ という点に特別な注意が払われたことも見逃せない。つまり、テキストが様々な素性と年齢層の登場人物に焦点を当てることによって、すべての読者が物語の叙述に自らの経験を結びつけ、自己を再発見することができたのである。

さらに、テキストの「信頼性」、すなわち「信頼のおける体験の呈示」¹³¹ という印象を喚起する上では、小説の大部分を占める現在形での語りや文法的に不完全な文、単純で日常的な語彙、わかりやすい言い回し、兵士の隠語の利用なども効果的であった。それらは、ここでは兵士の日常が美化されることなく呈示されているという印象を生んだのである。

こうした「傾向のなさ」によって、『西部戦線異状なし』は大量の戦争文学から際立ち、いわば「〈無名の兵士の記念碑〉」¹³² となった。例えば、エルンスト・トラーは、次のように言う。

ある人物が、私たちみんなのために語ったのだ。塹壕に横たわって、シラミにたかられ泥だらけになった、敵を撃ちまた撃ち殺された、戦争を参謀本部の視点から見ず、事務室や編集室から見ず、日常として、恐るべき単調な日常として経験した、私たち歩兵のために。¹³³

また、カール・ツックマイヤーは、次のように述べた。

それは、真実を与えた最初の戦争の本である。私たちはみな繰り返し経験した。人が戦争について何も言うことができないことを。人がその戦争体験を語ることほど哀れなことはない。そのため私たちは沈黙した。だが、私たちは忘れることはない。(中略) ところがここで、レマルクのもとで、初めて運命が自ら形となった。全体が。過ぎ去ったものが、その下で燃えたものが、——後に残ったものが。そのように書かれ、そのように創造され、そのように生きられて、それは現実以上のものとなる。つまり真実に、純粹に的確な真実に。¹³⁴

むろん、このように可能な限り「傾向」をなくす努力は、他方で、本作品が、相対立する様々な解釈に開かれる一因ともなった。したがって、同時代の解釈は、そこに、平和主義や敗北主義、反国家主義だけでなく、戦争支持をも見出した。右翼勢力から激しく攻撃された一方で、リベラルな市民層や社会民主主義からは賛同を得たが、他方で、共産主義やその他の左翼勢力からは、著者の平和主義的な意図に理解が示されながらも、「兵卒の経験のロマン主義化という危険性」¹³⁵ が指摘されたのであった。これに対し、レマルク自身は、この作品についての立場を表明することはなく、どのような

¹³⁰ Ebenda, S. 242.

¹³¹ Ebenda, S. 245. Dazu vgl. auch ebenda, S. 244.

¹³² Zit. Nach: Tilman Westphalen: Ein Simplissimus des 20. Jahrhundert. Nachwort. In: Remarque 2010, S. 267-286, hier S. 275. Zitiert nach Christian Klein: A. a. O., S. 246.

¹³³ Ernst Toller: Buchchronik der Woche: >Im Westen nichts Neues<. In: Die literarische Welt vom 22. 2. 1929; zit. Nach: Remarque 2010, S. 218f., hier S. 218. Zitiert nach ebenda, S. 248.

¹³⁴ Carl Zuckmayer: Erich Maria Remarque: >Im Westen nichts Neues<. In: Berliner Illustrierte Zeitung vom 31. 1. 1929; zit. nach: Schrader (Hg.) 1992, S. 22-25, hier: S. 23f. Zitiert nach ebenda, S. 248.

¹³⁵ Kornelia Vogt-Praclik: A. a. O., S. 50.

悪意ある攻撃に対しても沈黙を守り続けた。

このような意味で、その解釈になお議論の余地はあるものの、戦争を批判的な視点から描き、政治的・軍事的指導者層の戦争責任を暗示したという点で、本小説は反戦文学的な要素を強く持っており、第三帝国時代の他の戦争文学とは著しく性質を異にしているのである。

9 戦時下の娯楽的著作

1	VB-Feldpost (Hg.) VB 野戦郵便 (編)	Derüber lache ich heute noch 『今日もまだぼくはそのことを笑う』	1943	260.0
2	VB-Feldpost (Hg.) VB 野戦郵便 (編)	Soldeaten Alltag 『兵士の日常』	1943	210.0
3	VB-Feldpost (Hg.) VB 野戦郵便 (編)	Im Angriff und Biwak 『攻撃と露営の中で』	1943	120.0
4	VB-Feldpost (Hg.) VB 野戦郵便 (編)	Landser Lachen 『兵士が笑う』	1943	100.0
5	Heinz Goedecke/ Wilhelm Krug ハインツ・ゲデケ/ヴィ ルヘルム・クルーク	Wir beginnen Wunschkonzert für die Wehrmacht 『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』	1940	35.0

戦時下の娯楽的著作には、2種類の作品が含まれる。一つは前線兵士の愉快的体験談を集めた4つのアンソロジーであり、もう一つはラジオのリクエスト音楽会に関するものである。

前者に含まれるのは、「フェルキッシャー・ベオーバハター (VB) 野戦郵便」の編集によって、1943年にエーア出版社からシリーズで刊行された4つの著作、すなわち『今日もまだぼくはそのことを笑う』、『兵士の日常』、『攻撃と露営の中で』、『兵士が笑う』であり、いずれも前線兵士の愉快的体験談を集めたものである。第二次世界大戦中のドイツでは、前線兵士の読書に供するため、「野戦版」や「野戦郵便版」といったシリーズの本が多数刊行された。それらの総刊行数はおよそ4,800万部と見積もられるが、その14%程度を、計690万部にも達するこれら4つの本が占めている。このように刊行数がきわめて多い娯楽的な著作がナチスの中央出版社から刊行されたことは、第二次世界大戦勃発後にナチスの文芸政策本来の世界観的な在り方が後退したことを示しているのである。¹³⁶

ここで、『今日もまだぼくはそのことを笑う』を例として、これらの著作の一端を紹介したい。本書はB6判ほどの大きさの仮綴じ版で、全体は96頁である。表紙には、兵舎でテーブルを囲んで談笑する5人の兵士の様子が描かれている。中には、ハーモニカを吹いている者や、『フェルキッシャー・ベオーバハター』を読んでいる者、手紙を書いている者などもある。序文には次のように書かれてい

¹³⁶ 竹岡健一：第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について——ナチスの文芸政策と娯楽的著作のかかわりに関する一考察（前掲論文）70頁、73～74頁参照。

る。

「今日もまだぼくはそのことを笑う」

それが、『フェルキッシャー・ベオーバハター野戦郵便』が兵士の読者のために催した『フェルキッシャー・ベオーバハター』の懸賞募集のタイトルでした。今度の戦争の出征での愉快的な体験が求められたのです。危険な、あるいは真剣な状況で、ユーモアによって気分が「持ち直した」、そのような戦友たちの冗談がです。この懸賞募集の反響は、1万通を超える投書でした。将校と部隊が関与しました。この小さな本は、すべての兵士の憂さ晴らしと、故郷にいる人々の喜びのために、選り抜きの投書を少しばかり複写したものです。¹³⁷

掲載されている投書の数は100件であるが、その中から、全体の雰囲気が見えるものを幾つかあげておきたい。

尻軽な娘

カールは休暇だった。カールは部隊に戻った。さて、仲間たちはあらゆることを知りたがった。故郷はどうだったか、そして特に小さな娘たちは何をしたかを。

「一人の娘と知り合いになったんだ。甘ったるい娘とね」とカールは言う。「次の休暇のとき、結婚するんだ——本当に。彼女がもうほかの男たちと歩かないようにね。」

「なんだって？ 彼女はほかの男たちと一緒に歩くのかい？ 気をつけろよ、カール。お前には向かないよ。」

「いや、そう悪くもないさ……。」

「恥を知れ。そんな尻軽な娘と結婚しようっていうのかい？」

「そうさ。彼女がほかの男たちと歩くのは、そうしなきゃならないからなんだ。それはいわば彼女の仕事なんだよ！」

「仕事だって？ おい、ちょっと聞けよ……。」

防空壕では革命が勃発しかねなかった。でも、カールは笑ってそれを防いだ。「どうしたっていうんだ。彼女は映画館の座席案内係なんだよ。ね、だから彼女はそうしなきゃならないんだ……。」¹³⁸

サマリア人

東部戦線のある野戦病院。負傷者を載せた車が乗りつけ、患者運搬人たちが、降ろすためにやってくる。軍医少佐が偶然通りかかり、負傷者を見、いつものように彼らの健康のために気を遣

¹³⁷ VB-Feldpost: Darüber lache ich heute noch. Soldaten erzählen heitere Erlebnisse. Berlin: Zentralverlag der NSDAP, Franz Eher Nachf. GmbH, 1943, S. 6.

¹³⁸ Ebenda, S. 26.

う。ひと言も口にせず、彼は最初の負傷者を背負う。負傷者は軍医の意図を知って抵抗しようとするが、軍医は彼にしゃべらせず、急いで階段を二つ上がる。上に着くと、軍医は、額の汗をぬぐいながら、相手の怪我について尋ねる。相手は、ためらいながらこう答える。「私たちの医者のために薬を取りにきていただけなんです。」¹³⁹

中隊が小包を受けとる

みんなが沢山の小包と手紙を受けとった。フリッツだけが、小包を一つ受けとり、ぼんやりと前を見ている。

隊長：フリッツ、何も受けとらなかったのか？

フリッツ：いいえ、大尉どの！

隊長：いいものが入っていなかったのか？

フリッツ：わかりません。クリスマスに開けるようにと書いてあるんです。まだ三月の終わりでというのに !!!¹⁴⁰

重大な紛失

西部戦線でのフランスの砲兵隊の急襲射撃の際、狙撃兵パウルは近くに着弾した強力な手榴弾によって、生き埋めになった。大きな危険を顧みず、彼を救うために、すぐさま仲間が飛んできた。敵の射撃のまったただ中で、彼らはパウルを掘り出した。最初は脚が一本見えるようになり、間もなく全身が引っ張り出された。彼は最初、少しぼうっとして、太陽を見て目をしばたいたが、それから機械的にポケットに手を突っ込み、悪態をつきながら跳びあがった。

「こんちくしょう。タバコを下に置いたままにしちまったぜ！」¹⁴¹

いずれもたわいのない笑い話であり、上述のようにナチズムの世界観とはまったく関係ないが、こうした読み物も、英気を養うといった意味では、戦争遂行に一定の役割を果たしたものであろう。

一方、ハインツ・ゲデケとヴィルヘルム・クルークによる『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』（1940年）は、第二次世界大戦の開戦から1941年の春まで開催された国防軍のためのリクエスト音楽会に関する著作である。音楽のリクエストと寄付を組み合わせたこのラジオ番組は、すでに1936年から「冬季救済事業のためのリクエスト音楽会」として放送されていたが、戦争勃発とともに「国防軍のためのリクエスト音楽会」と名前を変えて放送され、人気を博した。1940年には番組のアナウンサーであるゲデケとクルークによって書籍化されてベストセラーとなり、さらに映画化もされて、ナチス時代の映画として第2位の観客数を達成した。番組は、前線と故郷の架け橋として、ホールの観客と故郷の聴取者と前線兵士が一体となる民族共同体的な空間を作り出したが、その書籍

¹³⁹ Ebenda, S. 56.

¹⁴⁰ Ebenda, S. 58f.

¹⁴¹ Ebenda, S. 61.

化であり、多数の写真も掲載された本書は、録音等の手段のない当時、個々の聴取者が番組を振り返るためのよすがとなったと思われる。¹⁴²

10 プロパガンダ的著作

1	Adolf Hitler アードルフ・ヒトラー	Mein Kampf 『わが闘争』	1925/27	1245.0
2	Philip Bouhler フィリップ・ブーラー	Kampf um Deutschland 『ドイツをめぐる戦い』	1938	195.0
3	Alfred Rosenberg アルフレート・ローゼンベルク	Mythus des 20. Jahrhundert 『二十世紀の神話』	1930	133.5
4	Wilfrid Bade/ Heinrich Hoffmann ヴィルフリート・バーデ/ハインリヒ・ホフマン	Deutschland erwacht 『ドイツは目覚める』	1933	117.5
5	E[duard] Ahlswede エドゥアルト・アールスヴェーデ	In Gottes eigenem Land 『神自らの国で』	1942	110.0
6	Joseph Goebbels ヨーゼフ・ゲッベルス	Vom Kaiserhof zur Reichskanzlei. Eine historische Darstellung in Tagebuchblättern 『皇室からドイツ帝国宰相官房へ 日記における歴史的叙述』	1934	66.0

国民同胞を獲得する手段の一つともなったプロパガンダ的著作には、6 作品が含まれる。

まずあげられるのは、アードルフ・ヒトラーの『わが闘争』（1925/27 年）である。1925 年に本書の第 1 巻が刊行されたとき、その後の成功はほとんど予測できなかった。というのも、書籍市場は深刻な危機の状態にある一方で、第 1 巻の 12 マルクという価格は法外に高かったからである。それでも、ヒトラーの信奉者による購読のお蔭で、年末までにおよそ 1 万部が販売された。だが、第 2 巻が刊行された後は、販売はより緩やかに経過し、1928 年には 2 つの巻を合わせても 3000 部しか売れなかった。それでも、権力掌握直後の 1933 年までに 25 万部が販売されて以後、売り上げは急速に伸び、1935 年には、総刊行数は 190 万部に達した。そして、第三帝国の崩壊までには、総数 1,245 万部が国民の間にもたらされたのであった。

このような『わが闘争』の売れ行きの経過は、高い版数で普及したナチスのプロパガンダ文学全般

¹⁴² 詳細は、竹岡健一：ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について——メディアによる「民族共同体」の形成（かいろすの会『かいろす』第 60 号、2022 年、45～70 頁所収）参照。

にも該当するが、そこで注目に値するのは、1933 年以後の急速な売り上げの伸びが一般的な読者による購読とは必ずしも一致しないと考えられることである。例えば、『わが闘争』は、ドイツの工業界の財政的支援によって、1934 年に、第一次世界大戦のすべての傷痍軍人とミュンヘン一揆の際の負傷者に寄贈された。また、ナチス文学に関するすべての推薦リストに掲載され、すべての図書館に備えられた。そして、よく知られているように、結婚式を迎えた夫婦に、戸籍役場からお祝いの品として贈られた。さらに、第二次世界大戦勃発後は、国防軍への大量販売という新しい市場も見いだされた。ヴィル・フェスパーは、すべてのドイツ人が『わが闘争』を持つべきだとして、次のように述べている。

ドイツには、総統の『わが闘争』を所有していない国民同胞、家庭、家族がまだある。だが、『わが闘争』は、すべてのドイツ人が持っていなければならない、ナチズムと新しいドイツの神聖な本である。それは読むための本ではなく、検討し生きるための本である。¹⁴³

このような「総統」の本を古書店で扱うことは、冒涇にほかならなかった。そこで、帝国著作院の元院長ハンス・フリードリヒ・ブルンク (Hans Friedrich Blunck) は、1938 年 10 月 11 日に、「古書店で提供される版は陳列棚から姿を消すべきである」、「いかなる小売書店員も、今日、この指示に内面的に同意しないほど政治的に時代遅れになることは許されまい」¹⁴⁴ と伝えた。

なお、ヒトラーの私的副官ユーリウス・シャープ (Julius Schaub) によれば、ヒトラーは銀行口座を持たず、日常生活でお金が必要などときには、エア出版社から支出された。というのも、そこには、1925 年の初版刊行以後、『わが闘争』の売り上げによってもたらされたすべての印税が保管されていたからである。エア出版社の取締役であったマックス・アマン (Max Amann) の戦後の証言によれば、ヒトラーが得た印税はおよそ 1,500 万マルクで、そこから引き出された金額はおよそ 800 万マルクであった。(Vgl. A115f.) こうした事情は、第三帝国の指導者らにとって、本の執筆・刊行が持った二重の意味を明らかにする。つまり、それはプロパガンダの手段であると同時に、闘争のための資金調達や権力の地位にある人間にふさわしい生活のための財政的基盤となったのである。

ところで、第三帝国における安楽死の全権委員としても知られるフィリップ・ブーラーは、人種主義イデオロギーの促進に尽力したミュンヘンの民族主義的な出版社 J. F. レーマンスで働いた後、『フェルキッシャー・ベオーバハター』の発行に従事し、党の第二事務局長となった。そして、1923 年のヒトラー一揆の参加者として、いわゆる古参の闘士に数えられた。党員番号は 12 である。

彼は、1937 年にヒトラーから直々に運動の歴史を書くよう委任され、その第 1 巻を『ナチスの運動史のための著作』として刊行したが、ほとんど反響を呼ばなかった。そこで、1938 年に、『ドイツのための戦い』というタイトルで、より短いナチスの歴史として青少年向けに改作したところ、ヒト

¹⁴³ Zit. nach Manfred Overesch u. a. (Hg.): Das Dritte Reich. Daten, Bilder, Dokumente. Berlin: 2001. Digitale Bibliothek Band 49, S. 8279. Zitiert nach A117.

¹⁴⁴ Zit. nach Manfred Overesch u. a. (Hg.): Das Dritte Reich. Daten, Bilder, Dokumente. Berlin: 2001. Digitale Bibliothek Band 49, S. 8524. Zitiert nach A118.

ラー・ユージェントや学校での必読書として成功し、ベストセラーとなった。ブーラーは、序文において、この類の本の必要性を次のように力説する。

本書によって、私はこの課題を解決することを試みた。本書がドイツの少年少女を忠実な義務を満たすよう鼓舞し、民族と帝国への、そして彼らがいつかその継承者であることを証明せねばならない「総統」への熱狂的な信仰を強固にすることに貢献することを願う。というのも、彼らはドイツの未来の担い手となるよう定められているのだから。¹⁴⁵

ヒトラーの場合と同様、ブーラーもこの本の成功によって固定した収入を得ることができたが、そこには公的な利用の義務化が大きな役割を果たした。例えば、帝国教育省の公布により、「帝国大臣ブーラーの『ドイツのための戦い』は、高等学校の第5学年の歴史の授業で時代史を扱う際に利用されねばならなかった」¹⁴⁶ のである。

1930年に初版が刊行されたアルフレート・ローゼンベルクの『二十世紀の神話』は、1933年以後、半ば党公認の著作となり、急速に売り上げが高まった。1933年には73,000部だったのが、1935年には293,000部、1938年には500,000部となり、1942年にはついに100万部を突破し、第三帝国時代のベストセラーの最上位に到達した。

とはいえ、本書は当初、ほとんど世の中の注目を浴びなかった。「国家政治的革命は終結した。だが、精神の変革は始まったばかりだ。今こそ、『二十世紀の神話』は何よりも先に役立つのだ」¹⁴⁷ というローゼンベルクの認識にもかかわらず、1933年までに書評はたった一つしか書かれず、それも著者自らが『ナチス月刊誌』（Nationalsozialistische Monatshefte）に執筆したものであった。

しかし、他方で、本書のその後の刊行数の増加は、著者に多大な経済的利益をもたらした。1932年にローゼンベルクが税金を支払った収入は19,000マルクだったが、1934年にはすでに57,000マルクへと高まった。そのうち、42,670マルクは出版活動から得たものであったが、そのかなりの部分を『二十世紀の神話』の印税が占めていたと思われる。さらに、1935年には、報酬は100,000マルクとなったが、そのうち70,000マルクが同書から得られたものだった。つまり、「魂をかけた戦いは、世俗的な報酬をもたらした」¹⁴⁸ のである。

本書の刊行数が100万部を突破したとき、『大ドイツ貸出図書館新聞』（Großdeutsche Leihbücherei-*blatt*）は、「ローゼンベルクの『神話』が100万部！」¹⁴⁹ と、誇らしげに告知した。本書はまた、『ドイツ一般新聞』（Deutsche Allgemeine Zeitung）でも、ドイツの精神生活が大砲の響きの中でも黙することなく活発であることの証左とされた（Vgl. A120）。

¹⁴⁵ Philipp Bouhler: Kampf um Deutschland. Ein Lesebuch für die deutsche Jugend. München: 1938, S. 7. Zitiert nach A121.

¹⁴⁶ Bouhlers >Kampf um Deutschland< im Geschichtsunterricht [Kurznотiz]. In: Jugendschriften-Warte 44 (1939), H. 5, S. 79. Zitiert nach A122.

¹⁴⁷ Einleitung zum Mythos mit der Ergänzung vom Frühjahr 1934. Zitiert nach Ernst Pieper: Alfred Rosenberg. Hitlers Chefideologe. München: 2005, S. 293. Zitiert nach A119.

¹⁴⁸ Ernst Pieper: Alfred Rosenberg. Hitlers Chefideologe. München: 2005, S. 293. Zitiert nach A119.

¹⁴⁹ Großdeutsches Leihbücherei-*blatt* 4 (1942), H. 21, S. 311. Zitiert nach A119.

とはいえ、こうして高い刊行数を誇り、ナチズムのイデオロギーにとって最重要とみなされる本書といえども、ヒトラーの『わが闘争』との間には決定的な違いがあった。それは、例えば、1935年に雑誌『カトリック』(Der Katholik)が、『二十世紀の神話』の「疑いのない間違い」を指摘し、「著者がその本を撤回するか、またはすべてのカトリック教徒にとって大きな苦痛と感じられるに違いないすべての部分を削除すること」¹⁵⁰を求めたことに、顕著に表れている。もし『わが闘争』に対してそのようなことがなされたとすれば、それは神の冒瀆にも等しいものであり、まったく考えられないことであった。そのような意味で、「血の神話と魂の神話、人種と自己、民族と個人、血と名誉だけが、それらのみが、妥協することなく全生活を貫き、担い、規定せねばならない」¹⁵¹というローゼンベルクの見解は、たとえヒトラーの著作においてよりもより知的に基礎づけられていたとしても、誤って救世主と思われた人物の言葉ではなく、一つの意見表明でしかなかったのである。

続いて、ヴィルフリート・バーデとハインリヒ・ホフマンの共著『ドイツは目覚める』(1933年)であるが、これはいわゆるコレクタブルカードのアルバムである。図版の印刷されたカードを商品の付録とすることは、ドイツでは19世紀半ばから始まったが、やがて専用のアルバムも刊行され、詳しい文章なども添えられるようになり、多くの煙草会社が参入した。カードの主なテーマは、当初は映画やスポーツなどであった。だが、1920年代から1930年代初めにかけて、国家主義的な観点から、軍服や軍艦、第一次世界大戦などに関するカードが多数刊行された。そして、ナチスの政権獲得とともに、公然とナチスを賞揚するコレクタブルカードとアルバムが多数刊行された。当時の煙草市場を支配していた煙草会社レームツマ(Reemtsma)の「煙草写真アルバム」(Zigarettenbild-Album)もその一つであり、ヒトラー専属の写真家ハインリヒ・ホフマンの多数の写真と、そこに添えられた文章を通じて、ナチズムのプロパガンダとしての役割を果たしたのであった。¹⁵²

ところで、『ドイツは目覚める』では、啓蒙宣伝省の役人であり、作家でもあったヴィルフリート・バーデが文章を担当しているが、そこには、ナチス時代の出版活動における公的活動と私的活動の絡み合いという問題が指摘される。ゲッベルスは、啓蒙宣伝省の職員がその肩書を商業活動に利用することに対して批判的であったが、それは必ずしも守られなかった。バーデの場合も、『第三帝国の道』(Der Weg des Dritten Reiches、1933年)の刊行にあたっては、大臣が地位や部署をあげることを「とても嫌っている」¹⁵³ことを出版社に指摘した。しかし、他方で、彼の官職がはっきりとあげられた寄稿や本が多数公にされた。例えば、1942年に刊行された、啓蒙宣伝省の業務にも関連する冊子『私は新聞記事をどのように書くか』(Wie schreibe ich einen Zeitungsartikel?)は、「帝国政府新聞雑誌出版

¹⁵⁰ Die Antwort Alfred Rosenbergs. Seine neue Schrift: >An die Dunkelmänner unserer Zeit<. In: Der Katholik vom 12. 5. 1935, S. 4. Zitiert nach A120.

¹⁵¹ Alfred Rosenberg: Der Mythos des 20. Jahrhunderts. A. a. O., S. 699. 訳出にあたっては、アルフレット・ローゼンベルク(吹田順助・上村清延訳)『二十世紀の神話』(前掲書)、552頁を参考にした。

¹⁵² 詳細は、竹岡健一: コレクタブルカードとナショナリズム——『アドルフ・ヒトラー 総統の人生の写真』を例として(かいりすの会『かいりす』第60号、2022年、15~57頁)を参照。

¹⁵³ Christian Härtel: Stromlinien. Wilfrid Bade — Eine Karriere im Dritten Reich. Berlin-Brandenburg: be.bra wissenschaft verlag 2004, S. 123.

部門長・参事官ヴィルフリート・バーデの前書つき」¹⁵⁴とされている。つまり、ゲッベルスの命令は一貫して従われることがなかったか、または啓蒙宣伝省にとって都合がよい場合は無視されたのであった。

このように、啓蒙宣伝省においても私経済的活動と公的活動の絡み合いが多く見られることは、省の人事部から問題視されていた。そのため、1941年11月11日の会議で、とりわけ本業以外の収入が本業の収入を上回るケースについて、「著作活動からの収入の吸い上げ」¹⁵⁵が議論された。まさに、バーデに該当するものである。彼の場合、すでに1933年の時点で、帝国政府の広報室の若き係官としての当初の月収が390マルクだったのに対し、作家活動からの年収は4,400マルクだった。そして、その後も、この本収入と副収入の関係は、むしろ後者に有利なように変化したのであった。そのような事実に照らせば、『ドイツは目覚める』においてナチスの殉教者アルベルト・レオ・シュラーゲター（Albert Leo Schlageter）に捧られた詩の次のような一節は、まさに皮肉と言わねばならない。

君は賃金や外面的な名誉のために戦うのではない。

暗闇で祖国に奉仕するのだ。¹⁵⁶

なお、バーデの主な著作としては、ナチス突撃隊の苦闘の頌歌である『突撃隊ベルリンを占領す』（Die SA erobert Berlin, 1933年）、第一次世界大戦直後の時代に父親と息子との間に生じた隙間が、ナチス国家の出現によって和解へともたらされる経緯を描く『ティエーレは父を見つける』（Thiele findet seinen Vater, 1934年）、専門的知識に基づいて自動車の発展を描いた『自動車は世界を征服する 自動車の歴史』（Das Auto erobert die Welt. Biographie des Kraftwagens, 1938年）、伝記『ヨーゼフ・ゲッベルス』（Joseoh Goebbels, 1933年）などがある。

真珠湾攻撃を受けてアメリカが第二次世界大戦に参戦した後の1942年に刊行され、1945年までに110万部以上の売り上げを達成した、エドゥアルト・アールスヴェーデの『神自らの国で』は、当時のドイツにおける反アメリカニズムを代表するものである。それは、アメリカ大統領ウイルソンが1918年にヨーロッパの戦後秩序を構想した14箇条を茶化した「アメリカの14箇条」から始まる。例えば、次のようなものである。

1. 彼らは、印刷されたものをすべて信じる。例えば、火星人とドイツの合衆国への攻撃準備といったものも。
2. 彼らはみな同じ考えを持つ。彼らの知識の幾らか濁った泉は、たいていブロードウエーのヘブライ語のヴァリエテの舞台である。
5. 彼らはみなガムをかみ、みな歯の隙間を空けておく。ガムが時折そこで休めるように。

¹⁵⁴ Ebenda.

¹⁵⁵ Ebenda, S. 124

¹⁵⁶ Wilfrid Bade: Schlageter. In: Deutschland erwacht. Hg. von Cigaretten-Bilderdienst Hamburg-Bahrenfeld. Hamburg-Bahrenfeld: Cigaretten-Bilderdienst 1933, S. 86.

10. 彼らはすべての文明を文化と取り違えている。

13. 彼らはみな缶詰だけで生き、それらがファスナーを持たないことに怒っている。¹⁵⁷

このような文章を通じてアールスヴェーデが際立たせるのは、アメリカにおける拝金主義と貧富の差、教養の欠如、人種の混合による「不健全さ」であり、そこには、ユダヤ人の「有害な影響」¹⁵⁸ も欠けてはいない。インディアンや黒人についても軽蔑的に言及される。いわば型にはまったプロパガンダ的な叙述であるが、そこにある種の信用を与えたのは、彼自身のアメリカでの経験であった。アールスヴェーデは、1923年から1932年まで、アメリカで、「若い、だがたいていはすでに消耗した俳優や踊り子」¹⁵⁹ に美容的治療を施す医者として働き、800頁の浩瀚な皮膚病治療の教科書も著わしていた。

『フォス新聞』(Vossische Zeitung)などの幾つかの新聞社で働いた経歴を持ち、1929年には小説『ミヒヤエル・ヴォールマン 日刊新聞におけるある人間の運命』(Michael Voormann. Ein Menschen-schicksal in Tageblättern)も刊行していたヨーゼフ・ゲッベルスにとって、著述という行為は第三帝国の崩壊のときまで途切れることはなかった。中でも最も成功した著作は、今日では第三帝国の歴史の重要な資料である浩瀚な日記『皇室からドイツ帝国宰相官房へ 日記における歴史的叙述』(1934年)である。公共図書館での本の購入数を公表していた雑誌『図書館』(Die Bücherei)によれば、1935年には、本書が404部で1位、『わが闘争』が243部で21位、『二十世紀の神話』が126部で70位であった。(Vgl. A128)

ところで、こうしたナチスの大物による出版活動から見たとき、彼らによってなされた「<時流に便乗した著作>に対する激しい攻撃」(A128)には、自らの著作の売り上げを守るという目的もあったと思われる。つまり、時流に便乗した作家の一人ではなく、時流の先頭に立つナチスの指導者らは、儲けを他人と分かちつもりはなかったのである。実際、「<国家主義的な著作>で金を稼ぐという誘惑」(A128)はとても大きく、1933年以後、多くの作家と出版社が突然自らのナチス的な傾向を発見し、ナチス的な著作が溢れ出して、早くも1933年の夏には、市場は飽和状態にあった。ゲッベルスの最初の伝記を刊行したリューベックのコレマン出版社(Coleman)の社長が、次のように嘆いたほどである。

わが社の出張社員が全員一致して確認するところでは、卸売業者の倉庫も小売店の倉庫も国家的著作で一杯です。目下、ドイツの書籍市場全体に完全な不況が確認されます。それは確かに市況の現象ではあります。というのも、読者は夏の数か月間には本を一冊も買わないのですから。しかし、今年は、いわゆる国家的文学の真の洪水が市場にもたらされた結果、大手の書

¹⁵⁷ E[duard] Ahlswede: In Gottes eingem Land. Ein Blick ins >Doller-Paradies<. Nach eigenen Erlebnissen erzählt. Berlin: 1942, S. 4. Zitiert nach A125.

¹⁵⁸ Ebenda, S. 78. Zitiert nach A125.

¹⁵⁹ Ebenda, S. 89. Zitiert nach A123.

籍販売も小売店も、目下受け入れ能力がないのです。¹⁶⁰

11 血と土の文学

1	Kuni Tremel-Eggert クーニー・トレーメル =エッゲルト	Barb. Der Roman einer deutschen Frau 『バルプ あるドイツ人女性の小説』	1933	75.0
2	Hans Grimm ハンス・グリム	Volk ohne Raum 『土地なき民』	1926	50.5
3	Hans Zöberlein ハンス・ツェーバーラ イン	Befehl des Gewissens 『良心の命令』	1936	48.0
4	Will Vesper ヴィル・フェスパー	Das harte Geschlecht 『厳しい種族』	1931	37.5
5	Karl Aloys Schenzinger カール・アーロイス・ シェンツィンガー	Hitlerjunge Quex 『ヒトラー青年クヴェックス』	1932	32.4
6	Hans Friedrich Blunck ハンス・フリードリ ヒ・ブルンク	König Geiserich 『ガイゼリッヒ王』	1936	32.0
7	Erwin Guido Kolbenheyer エルヴィーン・グイー ド・コルベンハイヤー	Meister Joachim Pausewang 『ヨアヒム・パウゼヴァング親方』	1910	31.5
8	Josefa Berens-Totenohl ヨゼファ・ベーレンス =トーテノール	Der Femhof 『裁きの農家』	1934	25.5
9	Hanns Johst ハンス・ヨースト	Mutter ohne Tod/ Die Begegnung 『不滅の母 出会い』	1933	20.0
10	Hans Friedrich Blunck ハンス・フリードリ	Die große Fahrt 『大航海』	1934	20.0

¹⁶⁰ Schreiben von Otto Fuchs, Verlagsdirektor bei Coleman, an Wilfrid Bade vom 2. 8. 1933, In: Hoover Institution Archives, Wilfrid Bade Collection, Box 2, Correspondence 1933 (A-F). Zitiert nach A128.

ヒ・ブルンク			
--------	--	--	--

民族主義的・国家主義的な文学の典型である「血と土の文学」には、10 作品が含まれる。

クーニー・トレーメル＝エッグルトの『バルブ あるドイツ人女性の小説』（1933 年）の主人公のバルブ・フォームベルクは、旧農民の家系の出身である。彼女は、父親と兄弟姉妹とともにフランケン（バイエルン州南西部の州）の小都市シュレットシュタットに住み、自然との結びつきに満足していて、そこには誰も立ち入らせない。だが、第一次世界大戦中、彼女はビュヒナーと出会い、結婚してミュンヘンに転居する。しかし、バルブにとって大都市に住み慣れるのは容易ではなく、抛りどころを失ったと感じる。息子の誕生にも意味を見出せない彼女は、しばしば牧歌的な田舎に帰省する。けれども、やがて彼女は、夫に従うことと母性の中に人生の意味を見出す。農民の素性を忘れることなしに、都会の中に自己のアイデンティティーを見出した彼女は、物語の結びで、家族とともに町の住まいの窓にハーケンクロイツの旗を掲げる。

1933 年夏に刊行され、ナチス時代に K. A. シェンツィンガーの『アニリン』に次ぐ売れ行きを示したこの小説の著者トレーメル＝エッグルトは、1889 年に、フランケン（バイエルン州南西部の州）の小都市ブルククンシュタット（Burgkunstadt）に靴屋の娘として生まれた。11 歳で母親を亡くし、姉が結婚した 14 歳のときから家族の面倒をみななければならず、父親の死後、25 歳でいわば家長の役割を果たさねばならなかった。そして、第一次世界大戦中の 1915 年に、赤十字の活動の際、野戦病院に入院していた将来の夫と知り合った。『バルブ あるドイツ人女性の小説』には、こうした著者の経歴も活かされている。

物語は、戦争、インフレ、世界恐慌といった時代に、故郷との結びつきを絶たれて、大都市での生活に苦悩する女性であり母親の生を描いているが、そこで際立っているのは、バルブの大地との結びつきである。父親から初めて一人で穀物の種を蒔くことを許されたとき、彼女はまるでほかのことをしたことがないかのごとく、それをたやすくやってのける。

それは血の祝祭であり、彼女の足がはまり込む茶色い大地との内面的な結びつきの儀式である。¹⁶¹

この意味で、本作品はまさに、「血と土」のイデオロギーの文学化と言ってもよいであろう。彼女に一種の陶酔状態をもたらすこの「血」との結びつきは、帝国農政指導者リヒャルト・ヴァルター・ダレの次のような言葉を想起させる。

土地と大地はドイツ民族にとってそれを養うものであると同時に、そのよい血を維持し、増やすための健全な土台でもある。¹⁶²

¹⁶¹ Kuni Tremel-Eggert: Barb. Der Roman einer deutschen Frau. München: 1938 [1934], S. 27. Zitiert nach A272.

¹⁶² Darré: Neuadel aus Blut und Boden, S. 84. Zitiert nach Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: Lexikon nationalsozialistischer Dichter. Biographien – Analysen – Bibliographien. Würzburg: Königshausen & Neumann 1993, S.

実際、本作品はナチスの文芸批評によってきわめて肯定的に受け入れられた。ローゼンベルクの『書籍研究』では、この著者の全作品に対して、「これまでの規模をはるかに超える——国民教育に責任を持つ規範的な文化施設の側からの助成」¹⁶³ がなされるよう求められた。

物語の終わりに、バルブは故郷の牧歌性と大都市での生活を結びつけることに成功し、再び世界と一致するのを感じるが、その際、彼女の自然との結びつきは、「血と土」というナチスの民族主義的な理念にとって代わられる。個人の運命よりも民族の運命を優先し、夫に忠実に従い、民族の子供を生む母親として共同体に従うバルブの姿は、ナチス時代の理想的な女性像であった。とはいえ、トレーメル＝エッゲルトは、1923年に生まれた一人息子を1944年に戦争で亡くし、1945年以後は、自らの作家としてのキャリアも失ってしまった。

カール・アーロイス・シェンツィンガーの『ヒトラー青年クヴェックス』（1932年）はナチスの青少年指導者バルドゥーア・フォン・シーラッハの委託を受けて執筆され、1932年に『フェルキッシャー・ベオーバハター』に連載された後に出版され、「最も成功したナチスの青少年小説の一つ」¹⁶⁴ となった。また、ハンス・シュタインホフ（Hans Steinhoff）によって映画化され、1933年9月16日にヒトラーの出席のもとで封切りされ、「<芸術的に特別な価値に溢れる>」¹⁶⁵ と評価された。

物語は、政権掌握以前のベルリンで、ナチスと共産主義者の街頭での戦いで命を落としたヒトラー・ユージェントの団員ヘルベルト・ノルクスの運命を題材として、15歳の少年ハイニ（ハインリヒ・フェルカー）が、共産主義的な若者から熱狂的なヒトラー青年へと転向し、自らもファシズムの運動に殉じる過程を描いている。

ハイニは、思いやりのある母親と無職の父親とともに、ベルリンの労働者地区モアビートに住んでいる。そこは共産主義組織によって管理されており、ハイニと父親もその組織に属している。だが、父親は酒を飲み、ときに母親に暴力をふるう。ハイニにとって唯一の希望は、共産主義の若者たちとの接触であり、彼らとともに旅行に出かけるが、彼はそこで暴力や盗みや性的欲望を目にし、反感を覚える。彼自身はもともと、警察や国防軍に見られるような秩序と規律に憧れているのである。そして、共産主義の若者らの野蛮な行いに不快になり、こっそり立ち去ろうとしたとき、彼は近くの森の中にキャンプを設けたナチスの青年グループに出くわすが、そこで彼の目に留まったのは、まさに規律と秩序であった。彼は、「運動」や「総統」といった言葉を耳にし、自らのドイツ性を意識する。

これがドイツの大地、ドイツの森だ。これがドイツの若者なのだ。¹⁶⁶

彼は、ヒトラー青年たちと結びつきたいと望み、それに成功する。そして、彼らが階級社会や共産

438.

¹⁶³ Die Bücherkunde 3 (1936), H. 11, S. 351. Zitiert nach A274.

¹⁶⁴ Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 289.

¹⁶⁵ Zitiert nach Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: A. a. O., S. 379.

¹⁶⁶ Karl Aloys Schenzinger: Der Hitlerjunge Quex. Berlin: Zeitgeschichte-Verlag Wilhelm Andrmann, 1932, S. 44f. Zitiert nach Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 88.

主義的な国際社会を望まず、人種の純粋性、規律、および秩序に基づく、すべてのドイツ人の自然で国家的な民族共同体を目指していることを知る。ハイニの父親や共産主義の指導者は、ハイニが敵にまわるのを阻止しようとするが、彼はすでに決意を固めている。そして、共産主義の仲間からヒトラー青年たちへの襲撃が計画されていることを聞いたとき、それを彼らに漏らす。

ハイニの母親はもはや状況に耐えられず、ガス自殺を図るが、ハイニは救われる。母親の死後、ハイニは、ヒトラー・ユーゲントとの、とりわけギムナジウムの生徒フリッツ・デリエスとの結びつきを強める。母親という失われた故郷が変わって、ヒトラー・ユーゲントがハイニの新たな家となるのである。ハイニはデリエスがドイツの未来について語るのを聞き、ヒトラー・ユーゲントの制服を着て誇らしげな気持ちになる。

それは共同体の、仲間意識の、理念の、組み入れの服だ。それはすべての人を等しくし、みんなに同じものを与え、みなから同じものを要求する。そのような制服を着た者は、もはや望むべきではない。従うべきなのだ。¹⁶⁷

実際、ハイニはヒトラー青年としての奉仕を熱心に行う。彼は使い走りを引き受け、迅速かつ几帳面に任務を実行し、そのことが、彼に「クヴェックス（水銀）」というあだ名をもたらす。共産主義の指導者はハイニを取り戻そうと再度試みるが、無駄に終わる。ハイニは、運動のために死んだ最初のヒトラー青年ヘルベルト・ノルクスを模範としてハーケンクロイツの旗の下に留まり、仲間の指導者へと昇進する。だが、共産主義の仲間たちは、彼の裏切りを忘れていない。そしてある日、ハイニは、ピラを配る行動からの帰りに暗い道で襲われて重傷を負い、命を落とす。

このような物語の中には、読者である青少年をナチスの運動へと誘い、主人公と自己同一視させる要素が含まれている。その一つは、共産主義の青年グループとヒトラー・ユーゲントとの対置である。つまり、前者を特徴づけるのが無秩序、無規律、無作法であるのに対し、後者を特徴づけるのは、秩序、規律、清潔さ、ドイツ人らしさ、帰属意識、投入の用意といったものである。もう一つは、ナチスの世界観である。それは、ワイマール共和国における階級区分の批判に始まり、人種主義的な考え方を経て、民族主義的な共同体理念の賛美へと至る。このようにして読者にナチスの運動への共感を抱かせるこの物語は、ハイニの死によってクライマックスを迎えるが、ナチスの運動のための殉教者となることによって、彼は読者である若者たちに、彼らが歩むべき道を示しているのである。

ハンス・ツェーバーラインは、1914年に志願兵となり、第一次世界大戦に歩兵として出征した。1916年にヴェルダン戦で重傷を負うが、回復後復帰して1918年の停戦まで戦い、その軍功に対して第一級鉄十字勲章とバイエルン州の黄金名誉勲章を受けた。戦後は建築の職業教育を受けたが、間もなく中断し、1919年の4月から7月までエップ義勇軍に参加した。1921年にナチス突撃隊に入り、ミュンヘンの突撃隊の百人隊の指導者となり、1923年11月9日にはヒトラーのミュンヘン一揆

¹⁶⁷ Ebenda, S. 164. Zitiert nach ebenda, S. 89.

に参加した。その後、新設されたナチスに入党し、869 番の党員番号を得た。また、1931 年からフリーの作家となった。ナチスの政権獲得後は突撃隊の少尉にまで昇進し、突撃隊の文化グループのメンバーともなった。さらに、血の勲章と黄金ナチ党員バッジの担い手であり、1933 年にミュンヘン市の詩人賞を、1938 年に突撃隊の文化賞を受賞し、自らが受けたバイエルン名誉勲章団体の会長、およびミュンヘン市の市参事会員として文化部門の部長に指名された。

1931 年に出版された『ドイツへの信頼』(後述)では第一次世界大戦を扱い、ドイツの兵士を英雄化し、カリスマ的な指導者によって先導される政治的権力を求めた。ヒトラーはこの作品に序文を寄せ、「<前線の遺産>」¹⁶⁸と讃えた。第一次世界大戦と義勇軍の戦いは、きわめて人種差別的で反ユダヤ主義的な劇映画『1917 年の特別攻撃班』(Stoßtrupp 1917、1934 年)と『人権について』(Um das Menschenrecht、1934 年)でも扱われている。そして、1936 年に刊行された『良心の命令』では、1918 年 11 月から 1923 年 11 月にかけての、最初のナチス革命に至るまでの 5 年間におけるドイツ国内の混乱が取り上げられた。

物語は、靴屋の息子で前線兵士であるハンス・クラフトの情熱的なナチ党員への発展を描く。1918 年、前線から戦後のドイツの混沌の中へ戻ったクラフトは、自らがかつてのドイツ政府の降伏という卑劣な裏切りの犠牲者とみなしている。そして、新しい、よりよいドイツのために尽力するが、それは、いわゆる「システム」の代表者ら、すなわち共産主義的・社会主義的勢力に反対する、と同時に、とりわけクラフトがドイツの不幸の主な原因だと考えるユダヤ人に反対する戦いの中に具体化する。彼の信条によれば、ドイツの未来の運命は、「ユダヤ人問題」と密接に結びついているのである。彼は、結婚して建築家となった後、己の攻撃的・狂信的愛国主義的理念はヒトラーの党の内部でのみ実現が可能だと信じ、突撃隊員となるが、そのために建築家の地位を捨てて、左官とならねばならない。そして、共産主義者に反対する粗暴な市街戦に参加し、ユダヤ人に反対する活動を組織し、ナチスの運動の地歩を固めようと全力で試みる。また、彼は間もなくヒトラーと個人的に知り合いになり、ヒトラーの最も忠実な信奉者の一人となる。物語の結末で、1923 年 11 月のミュンヘン一揆に際して、殉教者として讃えられる 16 人の仲間の射殺も、彼にとっては最後の力を振り絞ってドイツの解放のために尽力するためのさらなる激励でしかない。

ナチス文学の中でも「最悪の反ユダヤ主義的駄作の一つ」¹⁶⁹と呼ばれる本作品では、ヴェルサイユ条約に対する批判とともに、ユダヤ人の人種的劣等性が厳しく弾劾される。例えば、ユダヤ人は「抹殺」されるべき「有害生物」¹⁷⁰にも比される。

これらユダヤ人の豚はわれわれを駄目にする。やつらはわれわれの血をすっかり汚してしまう。¹⁷¹

¹⁶⁸ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 419.

¹⁶⁹ Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: A. a. O., S. 479.

¹⁷⁰ Hans Zöberlein: Der Befehl des Gewissens. Ein Roman von den Wirren der Nachkriegszeit und der ersten Erhebung. München 1937, S. 559f. Zitiert nach Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: A. a. O., S. 482.

¹⁷¹ Ebenda, S. 298ff. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 87.

毒の実をつける木は切り倒し、火にくべねばならぬ。そこに同情はあってはならない。¹⁷²

ここには、ユダヤ人問題の最終解決、すなわちアウシュヴィッツへの道が先取りされていると言えよう。このほかにも、人種的墮落の一例としてユダヤ人の異状な性愛が記述され、「梅毒」が「ユダヤ人のペスト」¹⁷³ と呼ばれる。さらに、ユダヤ人地区の壁にハーケンクロイツの落書きをするなど、1938年11月の「水晶の夜」におけるユダヤ人への蛮行も先取りされている。こうした意味で、本作品自体が一種の「反ユダヤ主義的扇動」¹⁷⁴ なのである。

また、ツェーバーラインにとっては、「左翼のならず者たち」¹⁷⁵ も根絶の対象である。左翼の革命評議会は、勤勉な者と怠け者、正直な者と詐欺師、利口な者と愚か者の平等主義を支持する。彼らは略奪し、殺害し、冒流し、彼らを性病にする自由恋愛を実践する。また、彼らは臆病で、退廃しており、高級娼婦とともに闇商人の酒場をうろつきまわる。国民の利益のために行動すると称する左翼の指導者は、むしろ自己の利益になるなら仲間を裏切るユダヤ人である。彼らの目標は、「美しく、よく、崇高な一切のものの破壊」¹⁷⁶ である。

こうして、ドイツはユダヤ人や左翼によって脅かされているが、希望がないわけではない。ハンスによれば、「よい健全な血」¹⁷⁷ は古い戦争の僚友の中に循環しており、彼らは彼らの妻とともに新しいドイツの人間を生む。

新しいドイツの人間は、われわれ兵隊を通じて、われわれの妻から成長する。ある世代において、ドイツ民族は以前よりもより美しく、より偉大に、より素晴らしくなる。¹⁷⁸

つまり、新しい時代は、理性に基づいてではなく、非合理的な「魂の深みから」¹⁷⁹、血から成長するのである。そして、指導するならず者であるユダヤ人ラーテナウが1922年6月24日に右翼のテロリストによって殺害されたとき、ハンスは、ヒトラーの中に彼が求めていたものを、「有権者ではなく男」¹⁸⁰ を見出す。彼にとって、ドイツの苦境を脱する最短の道は、「強い男による独裁」¹⁸¹ である。たとえ1923年の一揆が挫折しようとも、ドイツのための戦いは続くのであり、「ヒトラーが君たちを導く」¹⁸² ことに変わりはない。

¹⁷² Ebenda, S. 515. Zitiert nach ebenda, S. 87f.

¹⁷³ Ebenda, S. 491. Zitiert nach Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: A. a. O., S. 482.

¹⁷⁴ Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: A. a. O., S. 483.

¹⁷⁵ Hans Zöberlein: Der Befehl des Gewissens. München: Zentralverlag der NSDAP, Frz. Eher Nachf., 1942 (38. Aufl., 551.-590. Tausend), S. 185. Zitiert nach Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 85.

¹⁷⁶ Ebenda, S. 220. Zitiert nach ebenda, S. 85.

¹⁷⁷ Ebenda, S. 247. Zitiert nach ebenda.

¹⁷⁸ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

¹⁷⁹ Ebenda, S. 263. Zitiert nach ebenda.

¹⁸⁰ Ebenda, S. 660. Zitiert nach ebenda, S. 87.

¹⁸¹ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

¹⁸² Ebenda, S. 990. Zitiert nach ebenda.

1926年に刊行されたハンス・グリムの浩瀚な小説『土地なき民』は、農民の息子コルネリウス・フリーボットの人生を描き、ドイツ人が生きるためにより多くの空間を必要とするという問題が中心的なテーマとなっている。4つの部分に分けて語られるフリーボットの人生は、1880年代の青春時代から、ルールでの戦いの活動との関連で命を落とす1923年にまで至る。

「故郷と狭さ」と名づけられた第一部において、ヴェーザーの谷の僻村の農民の一人息子コルネリウスは、彼の民族の空間的な狭さを意識する。ヴィルヘルム二世の治世下で、ドイツが国運を謳歌しようとする反面、国土の狭隘さが数千万の国民の生活を脅かしている。土地を持ってない農民は都会に集中し、都会の生活はいきおい不健康になってゆく。ドイツは植民地を持ち、国土を拡張しなければならぬ。

コルネリウスは海軍で兵役を終えるが、そこで社会主義者マルティン・ヴェッセルと親しくなり、政治的な影響を受ける。また、沿岸警備のために初めてアフリカへ赴き、土地の広さに圧倒される。ドイツへ戻ってからは、彼はある採石場に職を得、後にボーフムの鉱山で働く。しかし彼は、生活に満足できないことに加えて、社会主義的な演説によって雇用者から疎まれる。結局、反逆者として短期間拘束され、仕事を解雇される。工業的な労働世界でのこの不愉快な経験と田舎の農村の狭さという認識が、彼に南アフリカへの移住を決意させる。

第二部「よその空間と思い違い」において、コルネリウスは、南アフリカへ赴く。彼が到着したとき、アフリカではブーア戦争がたけなわである。コルネリウスは志願してブーア側の義勇軍に加わるが、敗北し、イギリス軍の捕虜としてセント・ヘレナ島へ流される。だが、再び南アフリカへ密入国し、その後、ドイツ領南西アフリカの開発に乗り出す。やがて、友人のヴェッセルも南アフリカを訪れ、二人は手工業者として生計をたてようとするが、ホッテントットの酋長ズイーモン・コパーと南アフリカのドイツ人との間の争いに参加し、ドイツ人の要求を擁護する。

この突発事件が成功裏に終わった後、第三部「ドイツ人の空間」において、コルネリウスは、ダイヤモンドを探して販売するという新たな仕事に着手する。この企ては失敗するが、彼は自らの源泉を思い出し、従弟のゲオルゲとともに農場を購入する。ゲオルゲが近隣の農場の娘ゲルタ・ボルンと家族を築くのに対し、コルネリウスはドイツへ赴くことを決意する。

第四部「土地なき民」では、故郷に帰ったコルネリウスに、ドイツの土地の狭隘さという問題が改めて立ち上がる。彼には、経済的に収益が多い外国の生活空間への要求を否定する社会民主主義者の立場が理解できない。彼は、自らのアフリカでの経験に照らして、自然に条件づけられた古い生活空間の限界の中に留まることよりも、新しい生活空間を要求することを望む。

相手が青年時代に好きだったメルゼーネの非摘出の娘だと知らぬまま、若い娘に恋をした後、コルネリウスは南アフリカへ戻るが、第一次世界大戦の勃発が、遠いアフリカでのコルネリウスの生活にも影響をおよぼす。彼の農場はイギリス人に占領され、彼自身も捕えられる。戦争末期に、彼はポルトガルのアンゴラへ逃亡することに成功し、そこから最後の旅を始め、最終的にドイツへ戻る。

彼はメルゼーネの娘と結婚し、落ち着かない生活を送る。そして、いわゆる巡回説教師として国を回り、空間なき民族というドイツの問題の解決策について、自らの考えを説教する。だが、1923年

11月9日のミュンヘン一揆の少し前に、ザクセンのある町の広場で熱弁をふるっていたとき、社会主義の労働者の投石によって命を落とす。

ハンス・グリムは、1897年から1908年まで、商人として南アフリカで働き、新聞雑誌の通信員として南西アフリカを旅行した。また、1911年から1915年まで、ミュンヘン大学で国家学を学び、その後、ハンブルクの植民地研究所で研究に携わった。第一次世界大戦には砲兵として参加し、最上級軍司令部の国外担当部で活動した。終戦後はリップolzベルクに定住し、1918年にフリーの作家となった。1926年に刊行された『土地なき民』は、ナチスの権力者らに領土拡張政策にふさわしいスローガンを提供し、「血と土の文学」の代表作品となった。シカゴで開催された万国博覧会で、この作品がドイツの作家の唯一の作品として紹介されたという事実は、第三帝国におけるグリムの意味を証明している。

だが、グリムとナチスの関係は、それほど簡単ではない。確かに、グリムがナチスの政策とその狂信的愛国的・人種差別的な世界観を支持していたことは、『土地なき民』のような作品にも如実に表れている。ハインリヒ・ヒムラーは、1927年にこの小説を読み、それが「歴史的な価値のある本」¹⁸³であることを認めた。また、ゲッベルスは、1931年に昼食をともにし、「ヒトラーに対してとても好意的で心腹している」グリムと「友人」¹⁸⁴となった。闘争時代のナチスにとって、著名な作家を盟友とし、その人気を利用できることは重要だったのである。

こうして、ナチスの政権獲得後、グリムはプロイセン芸術アカデミーの文芸部門の評議員に選出され、帝国著作院の5人の人事委員に招聘された。しかし、他方で、彼はナチスに入党せず、また必ずしも統制に従わず、1934年からリップolzベルクで詩人会議を開催するなど、独自の活動を行った。この会議は、民族主義的文学の保護を目的としており、招待されたのも、ルードルフ・G・ビンディング、フリードリヒ・ビショッフ (Friedrich Bischoff)、ヘルマン・クラウディウス (Hermann Claudius)、エルンスト・フォン・ザローモン (Ernst von Salomon)、ハンス・カロッサ、エルヴィン・グイード・コルベンハイヤー、ヴェルナー・ボイメルブルク (Werner Beumelburg) といった国家的・保守的陣営の作家であった。だが、ナチスの文化政策の外部でなされるこうした活動は、決して体制に容認されるものではなかった。そのため、グリムは強制収容所送りになるとの脅迫を受け、1939年には詩人会議を中止した。こうした意味では、彼はナチスにとって必ずしも好ましい作家ではなかったのである。

しかし、それにもかかわらず、「新独逸民族の聖典」¹⁸⁵とも呼ばれる『土地なき民』が、ナチス時代を通してスタンダードな文学であり続けたのは、その作品が、1920年代以来のドイツの重要な政治的問題の解決を約束するものと思われたからであろう。本書において、グリムは、市民的・議会主義的社会モデルと共産主義的社会モデルに国家主義的・民族主義的なビジョンを対置し、その際、ド

¹⁸³ Lektüre. [Himmlers Leseliste]. In: Nachlass Himmler. BAArch N 1126/9, Bl. 62. Zitiert nach A282.

¹⁸⁴ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 15. 2. 1931. Zitiert nach A282.

¹⁸⁵ 星野慎一：ハンス・グリム『『独逸文学』第五年・第一輯、1941年、49～73頁所収）、70頁。

イツ民族を、窮余の解決策として工業化を推し進めてきた「<永遠の農耕民族>」¹⁸⁶ とみなす。すなわち、「土地の不足が、ドイツで財産のない連中が今日圧倒的多数を占めている原因」¹⁸⁷ だとするのである。

この問題は大地所有の社会化によって解決されるとする共産主義の議論の誤りを、彼は簡単な算術の例題によって証明する。すなわち、たとえすべての財産を分割しても、1平方キロの土地を所有できる人は、ドイツには132人しかないのである。その意味で、階級対立は土地の不足の結果なのであり、それゆえ、社会主義的の革命や生産手段の再配分は解決とはならない。というのも、そうしたところで集団的窮乏化を招くに過ぎないからである。問題は、ただ帝国主義的な領土の拡大によるのみ解決されるのである。したがって、グリムが念頭に描いた国家主義の本領は、「財産のない連中」に植民地で入植地をあてがうことにあった。それによってのみ、各人に自己の土地を取得する可能性が生まれるというのである。そして、まさにこの意味で、『土地なき民』は「ドイツ民族共通の運命を描いたもの」¹⁸⁸ となる。

それとも、私たちの民族の究極の運命の問題よりもっと重要なことがこの世と天空におありだと思いませんか。(中略) 病み衰えた者も、泥棒も、娼婦も、ただ食べるだけの虫けらも生きています。しかし、ドイツ人は、よく美しくなるために、自分のまわりに空間を、自分の上に太陽を、自分の中に自由を必要とするのです。あなたのまわりを、あなたの前をご覧ください。孫や新たに生まれる者たちのことをお考えなさい。あるのは狭隘という奴隷的困窮のみで、そこから自由な体や魂は決して育ちません。友よ、しかし私は、私の子供と私の種族とドイツ民族が同じであり、一つの運命を担わねばならないことを知っているのです。¹⁸⁹

本小説は、序文で読者に呼びかけられたこの言葉の通り、全ドイツ民族がその運命の前に一丸とならねばならないことを示唆し、ナチズムのイデオロギー的な基礎を築いたのであった。

『厳しい種族』(1931年)の著者ヴィル・フェスパーは、1910年代から1920年代にかけて、『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde)や『ニーベルンゲン伝説』(Nibelungensage)といった古い文学的素材の翻訳や翻案で有名になった。特に持続的な成功を収めたのは、詩集『収穫 8世紀にわたるドイツ抒情詩から』(Die Ernte. Aus acht Jahrhunderten deutscher Lyrik, 1906年)であった。第一次世界大戦には当初は歩兵として参戦し、後に参謀本部の見習いとなった。戦後は、『ドイツ一般新聞』の文化部門を二年間指揮した後、1923年から雑誌『文芸』(Die Schöne Literatur)を、1931年からは

¹⁸⁶ Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 380. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他(山本尤他訳)、前掲書、641頁を参考にした。

¹⁸⁷ Hans Grimm: Volk ohne Raum, S. 1321. Zitiert nach Jan Berg u. a.: A. a. O., S. 381. 訳出にあたっては、ヤン・ベルク、他(山本尤他訳)、前掲書、641頁を参考にした。

¹⁸⁸ ハンス・グリム(星野慎一訳)『土地なき民』(第一巻)(鱒書房)1940年、7頁。

¹⁸⁹ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 194. 引用にあたり、ハンス・グリム(星野慎一訳)『土地なき民』(第一巻)、上掲書、8~9頁を参考にした。

『新文学』（Die Neue Literatur）に名称を変えて、1943年まで刊行した。

狂信的愛国主義的・反ユダヤ主義的な立場のフェスパーは、すでに1931年にナチスに入党して、熱心に宣伝的活動を行った。ナチスの政権獲得後は、ドイツ詩人アカデミーに招聘され、ドレスデンでの焚書には演説者として登場し、ヒトラーへの忠誠の讃歌を多数執筆した。また、1933年、ドイツ作家のナチス帝国同盟の大管区理事長となり、ヨーストとともに帝国著作院の議長職も務めた。彼の雑誌『新文学』は、「第三帝国における指導的文芸雑誌」¹⁹⁰として、大きな文化政策的影響をおよぼした。やがて、そのような活動が友人よりも多くの敵を作ったことを知り、1938年以降、自らが農場主となったトリアンゲルの大農場に引きこもったものの、雑誌の刊行は1943年まで継続した。

このようなフェスパーの民族主義的に根拠づけられた文学観は、例えば1937年2月の『新文学』に見られるような、1930年代までのドイツの出版業界の特徴に対する攻撃によく表れている。フェスパーによれば、確かに「ドイツにおけるユダヤ的な文学支配」は排除されたが、それでもなお、目下、「ドイツ国外のユダヤ的出版社の文学によるドイツの書籍市場の過剰」¹⁹¹が確認される。そこから彼は、過激な結論を導く。

もしドイツの娘がユダヤ人と関係を持てば、両者は種の恥辱のために正当に有罪判決を下される。もしドイツの作家とドイツの書籍販売がユダヤ的出版社と関係を持てば、——それははるかに危険な、悪しき種の恥辱ではないか？¹⁹²

続いて彼は、ファイドン出版社（Phaidon Verlag）や、亡命したベルマン・フィッシャー出版社（Bermann-Fischer-Verlag）のようなユダヤ系の出版社を「搾取者の出版社」と呼び、そうした「出版上の種の恥辱」¹⁹³の絶滅を訴える。

そういった個々のネズミを捉えて追放するだけでは、決して十分ではない。これらの出版社の本は、はっきりとした目印を担わねばならない。例えば、ユダヤの星のような。もしそれらが暗闇で恥辱や有害を隠蔽するべきでないならば、誰がそれに反対したり嘆いたりするだろう？¹⁹⁴

こうして、フェスパーは、彼の雑誌において、人種的に根拠づけられた文学のイメージを繰り返し構想し、文学にも民族の人種法にとつてと同じような規則が適用されることを望んだのであった。

このようなフェスパーの『厳しい種族』は、10世紀の異教のアイスランドで演じられ、伝説的な国民指導者レフのヴァイキングの航海を語っている。時代的には非常に隔たったこの物語は、語り手

¹⁹⁰ Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 292.

¹⁹¹ Die Neue Literatur, Februar 1937, S. 103-104. Zitiert nach: Joseph Wulf: Literatur und Dichtung im Dritten Reich. Eine Dokumentation. Gütersloh: 1963, S. 278f. Zitiert nach A287.

¹⁹² Ebenda. Zitiert nach A236.

¹⁹³ Ebenda. Zitiert nach A286.

¹⁹⁴ Ebenda. Zitiert nach ebenda.

が保証するところでは、実際には第三帝国時代ととても近い。

血が、尽きることのない流れが、太古の時代から私たちに向かって流れる。そして、きわめて遠く隔たった父親たちの種族の中に、すでに私たちも生きている。私たちは、永遠の血の流れが噴き出す川床のようなものでしかないのだ。¹⁹⁵

ランゲンブーハーは、この歴史的叙事詩を、「私たちの時代の価値溢れるドイツの歴史小説」¹⁹⁶と讃えた。

ハンス・フリードリヒ・ブルクは、1933年6月、「ドイツ詩人アカデミー」と改称され、根本的に「肅清」されたプロイセン芸術アカデミー文芸部門の副院長に選ばれ、11月には、新たに創設された帝国著作院の院長に招聘された。1935年10月には、その地位をハンス・ヨーストに譲り、名誉院長となったが、ナチズムに対する彼の立場に変わりはなく、1937年にはヒトラーを賛美する詩を書き、フランス進軍を称賛し、反ユダヤ主義的な意見を表明した。1938年にはゲーテ・メダル、ドイツ言語連合の名誉リング、ヴァルトブルク詩人薔薇賞を受賞した。

ナチズムは、北方の源に立ち返ることによるドイツ民族の再生を期待したが、北方的な有史以前の時代やドイツ史の理想化に対するブルクの傾向は、すでにワイマール共和国時代に、彼を民族主義的・国家的文学といわゆる「<北方ルネサンス>」¹⁹⁷の重要な代表者の一人としていた。例えば、北方の人々の神話的源泉を追求した三部作『祖先のサガ』(Die Urvätersaga、1926～28年)は、その代表作品である。

一方、長編小説『大航海』(1934年)は、ドイツ人の海外への憧れを描いた典型的な小説の一つである。この作品は、コロンブス以前にアメリカ大陸発見に出かけたというあるドイツの航海者の物語であり、ブルク自身が明らかにしているごとく、コペンハーゲンの国立図書館長ゾフス・ラルセン(Sofus Larsen)の『コロンブス以前の20年間におけるアメリカの発見』(The Discovery of North America twenty years before Columbus、1925年)という記録に基づいて書かれた。物語は、デンマーク王下のアイスランド総督ディデリク・ピニングが、グリーンランド発見に航海しようとして悲劇的結末を体験するまでの数奇な運命を取り扱ったものである。そこでは、ピニングを取り巻く歴史の流れ、その子ディールクによって示される旧教から新教への発展過程、およびピニングとその妻ディケとグレティルの三角関係によって示される人間的宿命などを通じて、筋が織りなされる。

同じ著者の『ガイゼリヒ王』(1936年)は、主人公であるガイゼリヒ王のローマ人に対する戦いを、ナチス的に解釈したものである。

ガイゼリヒはカルタゴの彼の山で、息子と友人の腕の中で死ぬ。彼の道は超人間的な行為、

¹⁹⁵ Will Vesper: Das starke Geschlecht. Roman, Gütersloh 1941, S. 5. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 88.

¹⁹⁶ Hellmuth Langenbacher: Volkhafte Dichtung der Zeit. 3. Auflage. Völlige Neufassung. Berlin: 1937, S. 311. Zitiert nach A286.

¹⁹⁷ Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 271.

義務、犠牲であり、偉大な人物の孤独であった。彼は神の叫びを聞き、彼の貧しい民族の叫びを聞いた。彼は、彼の国の自由と権力に影響をおよぼした。それによって、彼は、そのほかの人々の人生を明るく貴重なものとする者を失った。だが、ある人物について、それ以上よいことを報告できるだろうか？¹⁹⁸

国力を高めようとする「指導者」ガイゼリヒは、まさにナチスのイデオロギーとナチスの方法を実践し、帝国世襲農地法の模範に倣って国土の改革を実行し、組織的な人種栽培を計画するのである。

このようなブルクの文学は、民族主義的な文学の潮流の一部として評価されたが、その成功は、ハンザ同盟出版社のマーケティングの力に負うところも大きかった。というのも、「受容の高まりが提供された商品の魅力と関連し得ないことは、＜ハンザ同盟出版社の人々＞にはブルクの場合確実だとみなされた」¹⁹⁹ からである。しかし、成功は、出版社の内部での強い立場と輝かしい契約条件を彼にもたらした。彼の作品の全集版の刊行にあたり、彼には 58,000 マルクが前貸しされ、彼はそれを世襲の納屋の改築に充てたのであった。

エルヴィーン・グイード・コルベンハイヤーは、政治的作家を自認しており、すでに 1931 年に、国家的・保守的な立場からプロイセン文芸アカデミーの文芸部門の改革を試みて失敗し、退会していた。また『彼を追う——ひとりの人間』（Jagt ihn — ein Mensch, 1931 年）のような民族主義的な扇動的文書によって、ナチズムの運動を支持していた。もっとも、彼の作品は複雑で、広く大衆に理解されにくいという側面もあり、オスカー・レルケからは、「危険を孕んだ、うぬぼれた、曖昧な無」（1933 年 6 月 9 日の日記）²⁰⁰ と評された。

それでも、コルベンハイヤーは、1933 年以後、「ドイツの精神性」を体現すべき「＜詩人＞」であり「＜哲学者＞」²⁰¹ という役割を割り当てられた。彼は、「＜新たに秩序づけられた＞」²⁰² 詩人アカデミーに堂々と帰還し、ナチスへの奉仕のための出版活動を、新たな権力者の政治を厳しく攻撃したロマン・ロランへの公開書簡で始め、このフランスの作家が「民族生物学的な、つまり自然な運動の基礎、国家的革命の前代未聞の原理、およびヨーロッパにとってのその進化的な意味を考慮する能力も意思もない」（『新しいドイツへの 6 つの支持表明』[Sechs Bekenntnisse zum neuen Deutschland]、1933 年）²⁰³ ことを非難した。その後、彼は数多くの論説や総統に捧げる 2 編の詩を執筆した。1934 年には戯曲『グレゴールとハインリヒ』（Gregor und Heinrich）を刊行したが、そこでは、ハインリヒ 4 世のカノッサ詣でが、教皇グレゴール七世に対するゲルマン人皇帝の勝利へと解釈変更された。1938 年の『神に誓った心』（Das gottgelobte Herz）も同じ傾向の作品である。

¹⁹⁸ Hans Friedrich Blunck: König Geiserich. Eine Erzählung von Geiserich und dem Zug der Wandalen. Hamburg: 1936, S. 399. Zitiert nach A285.

¹⁹⁹ Siegfried Lokatis: Hanseatische Verlagsanstalt. Politisches Buchmarketing im >Dritten Reich<. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH 1992, S. 100.

²⁰⁰ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 270.

²⁰¹ Ebenda.

²⁰² Ebenda.

²⁰³ Zitiert nach ebenda.

ナチ党员でもあったコルベンハイヤーが、第三帝国において、国家的右翼の文学的代表者として受けた荣誉と表彰は数知れない。例えば、ブレーメン市のゲーテ賞（1935年）、ミュンヘン市の文学賞（1936年）、フランクフルト市のゲーテ賞（1937年）、ドイツ帝国アードラーシルト（鷲の紋章つき盾形文化功労牌、1938年）、ケーニヒスベルク市のカント賞（1941年）、チュービンゲン大学名誉医学博士（1941年）、フィラハ（Villach）市のパラツェルズス賞（1942年）、ウィーン市のグリルパルツァー賞（1944年）などである。また、カールスバート市は、1943年、賞金10,000マルクのコルベンハイヤー賞を設立した。さらに、彼は、ナチス時代、文学部門で最高の稼ぎ手に属し、1943年だけでも15万マルク以上の収入があった。

このようなコルベンハイヤーの『ヨアヒム・パウゼヴァング親方』（1910年）は、たとえ刊行されたのが1910年だとしても、ある靴職人の人生を民族主義的・国家主義的に語っており、歴史的ナチス小説とみなされる。そこで特に際立っているのは、父親が子供の教育に寄せる生物学的な関心である。この作品では、父子相克という一般的な世代間の敵対関係に対して、生物学的に基礎づけられた父子関係というテーマが取り上げられる。すなわち、息子ヨアヒムは、英雄的・天才的な父親の愛情と尊敬と好意を得んと努力するが、父親は不親切で無慈悲と思われる態度をとるのである。それは、息子があまりにも母親に似すぎていることを、父親が自らの活発な性質の減退と感じていることを知らねば、理解し難いものである。

ヨゼファ・ベーレンス＝トーテノールの『裁きの農家』（1934年）は、依怙地な豪農が娘と娘の命を助けた農奴との結婚に反対し、農奴を秘密の裁判にかけて死刑にしようという物語である。

14世紀半ばのザウアーラントのレネ河畔では、ヴルフ家の人々が代々農場を受け継いでいるが、ヴルフスバウアーには、マグダレーネという一人娘しかいない。そこで、ヴルフスバウアーは、マグダレーネをシュターデラーホーフのエリクと結婚させようとする。しかし、彼女は父親の意に反して、嵐の夜にレネ川の洪水から彼女を救い、それ以来ヴルフの農場に住んでいる農奴ウルリヒとの結婚を望む。ウルリヒは、ヴェストファーレンに農場を所有していたが、ヴェーザー河畔ブラケラーホルツの厚かましいユンカーをやむなく打ち殺した後に失ったのであった。

ある晩、ヴルフスバウアーは、森で出会ったウルリヒを殺そうとするが、失敗する。ウルリヒは農場を離れるが、不在中にヴルフスバウアーによって秘密の裁判にかけられる。その後、ヴルフスバウアーはウルリヒを山中で探し出し、殺害する。

後日談を語る続編『マグダネーレ夫人』（Frau Magdalene, 1935年）では、マグダレーネは、処刑されたウルリヒとの間に出来た私生児の息子のために、迷信、煽動、ペスト、および死と闘い、あらゆる過酷な試練に打ち克ち、息子に「裁きの農家」を相続せしめ、息子はその農家を繁栄させる。

ベーレンス＝トーテノールは農民の出で、師範学校を卒業した後、画家を目指したが、作家リヒャルト・オイリンガーとの出会いをきっかけに、文学に転じた。物語において、ヴルフスバウアーによって代表される「反抗的な、自由な、激しい、ほとんど故郷の大地に根差した農民性」²⁰⁴と、「彼女

²⁰⁴ Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 103.

自身が没落しようとも、部族と農場の掟を満たす悲劇的な女性」²⁰⁵を描く二つの小説は、「血と土の文学の傑出した例」²⁰⁶として称賛された。『書籍研究』は、ベーレンス＝トータノールの作品は「あらゆる手段で振興されねばならない」²⁰⁷と評価し、ローゼンベルクの著作局は、それらを「昨年のもっとも価値のある文学的著作」²⁰⁸に数え、ドイツの著作振興のための帝国部署は47歳の誕生日に総統に贈るプレゼントに選び、帝国著作院は、1935年3月に「今月の本」に選出した。また、両作品によって、ベーレンス＝トータノールは、1936年にヴェストファーレン文学賞を受賞した。また、彼女は、講演「民族性の創造者および保持者としての婦人」(Die Frau als Schöpferin und Erhalterin des Volkstums, 1938年)などでも、ナチス的な女性像を説いている。

ところで、物語では、ロッパと呼ばれる一人の怪しげな太った商人が大きな役割を果たしている。彼は、ヴルフスバウアーが若い頃に犯した罪、つまりジブシーの女との間に子供をつくったことを知っており、彼を恐喝するのである。だが、ここでは、罪はヴルフスバウアーではなく、ドイツの農民の血を汚そうとした自堕落なジブシーの女にあるとされる。と同時に、搾取的なジブシーの商人の「落ち着かない、おべっか使いの、信頼できない、あちこちさまよう、奇妙な」²⁰⁹性質が非難される。ユダヤ人という言葉は使われていないものの、これらの人物はドイツ人の農民性とは対極にある。すなわち、「土地に根を張っていない者は悪人」²¹⁰なのである。

1933年4月20日のヒトラーの誕生日にベルリンの国立劇場で初演された戯曲『シュラーゲター』は、ハンス・ヨーストの文学の頂点をなす。この「正真正銘のナチスの戯曲」²¹¹では、1923年のルール占領の際にフランス人が処刑した若きナチス、アルベルト・レオ・シュラーゲターの人生が描かれる。

われら若者はシュラーゲターの肩を持つ。それは彼が世界戦争の最後の兵士だからではなく、彼が第三帝国の最初の兵士だからだ！²¹²

ヨーストは、ナチス国家の文芸政策にかかわる幹部としても知られる。すでに1932年にナチスに入党していた彼は、ヒトラーの政権獲得後、数々の重要な地位に就いた。すなわち、プロイセン枢密顧問官、ドイツ詩人アカデミー院長(1933年)、国家的作家同盟会長、帝国著作院院長(1935年)、帝国文化評議員、ドイツ文化のための闘争同盟の著作部門会長、親衛隊グループ長などである。1935年にはナチス芸術賞を、1940年にはゲーテ・メダルを受賞した。こうして、ナチズムを情熱的に信じ、その中で守られていると感じ、そのために人生を捧げたヨーストの文学における民族主義を、ラ

²⁰⁵ Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 88.

²⁰⁶ Ebenda, S. 87.

²⁰⁷ Zitiert nach A290.

²⁰⁸ Zitiert nach ebenda.

²⁰⁹ Karl-Heinz Joachim Schoeps: A. a. O., S. 103.

²¹⁰ Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 87.

²¹¹ Ebenda, S. 230.

²¹² Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 231.

ンゲンブーハーは次のように評した。

私たちがヨーストのこの文学的心情の告白をその一切の深みで理解するとき、私たちはまた、ヨーストがたどった人類的に方向づけられたヨーロッパ人から意識的なドイツ人への発展と、彼が今日民族の文学的な生活の中で占めている指導的立場を理解する。²¹³

1933年にランゲン=ミュラー出版社のポケットブックで刊行された二つの物語『不滅の母』と『出会い』は、刊行数20万部に達した。『不滅の母』で語られた、ちょうどやもめになった父親を尋ね、いたるところで母親の痕跡に出会う息子についてのセンチメンタルな物語は、ナチスの母親像を広めるものであった。

私の前に涙のヴェールの中に安らって死せる人は、母らしい親しさからはおよそかけ離れたものである。彼女はすべての母親の力強い、不死の比喩となった。

……われらの母、われらの母。²¹⁴

また、その本は特にプレゼントに適しており、それを贈る人は、それによって体制に対する自らの立場を表すことができた。

12 戦争文学

1	Günther Prien ギュンター・プリー ン	Mein Weg nach Scapa Flow 『スカパ・フローへの道』	1940	89.0
2	Hans Zöberlein ハンス・ツェーバー ライン	Der Glaube an Deutschland. Ein Kriegserleben von Verdun bis zum Umsturz 『ドイツへの信頼 ヴェルダンから転覆までの戦争 体験』	1931	>74.0
3	Fritz Otto Busch フリッツ・オットー・ ブッシュ	Narvik. Vom Heldenkampf deutscher Zerstörer 『ナルヴィク ドイツの駆逐艦の壮絶な戦いにつ いて』	1940	61.5
4	Paul Coelestin Ettighofer パウル・ケーレスティ イ	Nacht über Sibilien 『シベリアの上の夜』	1937	49.5

²¹³ Hellmuth Langenbuecher: Volkhafte Dichtung der Zeit. 3. Auflage. Völlige Neufassung. Berlin: 1937, S. 447. Zitiert nach A283.

²¹⁴ Hans Johst: Mutter ohne Tod/Die Begegnung. Zwei Erzählungen. München: 1933, S. 28. Zitiert nach A284. 訳出にあたり、ハンス・ヨースト（瀧崎安之助訳）『不滅の母』（『獨逸文學』第一年第三輯、1937年、395～424頁所収）、419頁を参考にした。

	ン・エッティヒホーフ アー			
5	Paul Coelestin Ettighofer パウル・ケーレスティ ン・エッティヒホーフ アー	Verdun. Das große Gericht 『大法廷ヴェルダン』	1936	39.4
6	Werner Beumelburg ヴェルナー・ボイメル ブルク	Sperrfeuer um Deutschland 『ドイツを取り巻く弾幕』	1929	36.3
7	Paul Coelestin Ettighofer パウル・ケーレスティ ン・エッティヒホーフ アー	Gespenster am toten Mann 『トーター・マン付近の幽霊』	1931	33.8
8	Thor Goote トーア・ゴータ	Wir fahren den Tod 『われらは死に向かって進む』	1930	30.5
9	Werner Beumelburg ヴェルナー・ボイメル ブルク	Gruppe Bosemueller 『ボーゼミュラー分隊』	1930	16.4

戦争を美化し、若者を戦争へと駆り立てた戦争文学には9作品が含まれ、大きく第一次世界大戦に関する戦争小説や戦争体験と、第二次世界大戦での戦功の描写に分けられる。

パウル・ケーレスティン・エッティヒホーフアーは、1914年に18歳で志願兵として第一次世界大戦に従軍し、フランスの前線に投入されて、幾度も表彰を受けたが、1918年に重傷を負い、フランスの捕虜となった。戦後は、ジャーナリストおよびフリーの作家として活動し、主に西部戦線での戦争を描いた。前線への投入を「男らしさの証明の最高の形式」²¹⁵として賛美する彼の作品は、ワイマール共和国の民主主義に対抗するものである。最初の戦争物語である『トーター・マン付近の幽霊』(1931)において、彼は、レマルクの『西部戦線異状なし』に対する右派からの文学的回答として、ヴェルダン前面で修羅場を出現させた物質戦の惨状を描き、あらゆる残虐行為にもかかわらず、戦争は英雄的な出来事であり、数百万人の死者は単に「自己犠牲と豪勇の総和」²¹⁶に過ぎないとした。

ところで、第一次世界大戦中、1916年2月21日から12月19日にかけて、ドイツ帝国は、膠着し

²¹⁵ Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 154.

²¹⁶ P. C. Ettighoffer: Gespenster am Toten Mann, Gütersloh 161. – 190. Tausend o. J. [1938], S. 185. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 89.

た戦況を挽回するために、パリへと続く街道にあるヴェルダンに目標を定め、そこで大きな打撃を与えることによって、フランスの戦争継続を阻止しようとした。この作戦は、当初は成功をおさめたが、やがて消耗戦となり、両軍とも泥沼的に戦力を投入して多大な損害を出した。また、この戦いの最中に、東部戦線でのロシア軍の攻勢やイギリス軍による攻勢が開始されたため、ドイツ軍はそちらに戦力を回さざるを得なくなり、結局、作戦は中止された。最終的に、両軍あわせて 70 万人以上の死傷者を出したこの戦いを描いたエッティヒホーファーの『大法廷ヴェルダン』(1936 年)は、第一次世界大戦を描いて最も成功した作品の一つである。その際、この作家に大きな成功をもたらしたと同時に、ベルテルスマン出版社にも、その後の成長の出発点となる大きな成功をもたらしたこの作品の成功には、それがその戦いの 20 周年という節目の年に刊行されたことも役立った。実際、物語のエピローグでは、かつて敵であったすべての国々がともに集うヴェルダン戦 20 周年の追悼式について報告され、次のように述べられている。

ここに出席した前線の闘士の言葉で、数千人が、死者の遺骨の前で、世界の平和を保ち、護ることを誓う。そして、ヨーロッパのすべての言葉で、引き続き連続して、夜通し声が響く。
<われらはそれを誓う！>²¹⁷

だが、この誓いも、わずか 3 年後にヨーロッパで再び戦争が起きるのを阻止することはできなかった。エッティヒホーファー自身、再び制服を、今回は国防軍の制服を身につけ、宣伝部隊の中隊長代理として、ジャーナリスティックな能力を軍務に役立てることになったが、彼にとっては、第二次世界大戦は第一次世界大戦を受け継ぎ、その屈辱を晴らすべきものであった。

私たち兵士は、ドイツの勝利を信じる！ 私たちはみな岩のごとく堅固に、神と総統の使命を信じる。(中略) 私たちは、私たちの勝利を、私たちの力と私たちのよき意思を信じる。私たちの勝利は、1918 年 11 月から 1939 年 8 月までの長い停戦の間に私たちに加えられた恥辱と同様に偉大である。私たちは総統とドイツと勝利を信じる。私たち 1914 年から 1940 年までの兵士は！ 私たちは信じる！ そうあるべし！²¹⁸

このようなエッティヒホーファーの兵隊的なナショナリズムがナチスによって推奨され、プロパガンダとしての役割を果たしたことは、言うまでもあるまい。と同時に、この時期、彼は娯楽文学のトップの稼ぎ手となっており、その収入は、1942 年には 10 万マルクに達していた。また同年、彼は、ゲーテ財団のエルヴィーン・フォン・シュタインバッハ賞を受賞した。

なお、1937 年の『シベリアの上の夜』では、1914 年にザンクト・ペテルブルクで戦争勃発に見舞われ、スパイとしてシベリアへ追放されたドイツ人商人が、タイガとアジアを横切って逃亡する様が

²¹⁷ Paul Coelestin Ettighoffer: Verdun. Das große Gericht. Gütersloh: 1936, S. 302f. Zitiert nach A139.

²¹⁸ Großdeutsches Leihbüchereiblatt 3 (1941), H. 21, S. 326. Zitiert nach A140.

描かれる。その中で、エッティヒホーファーは、明らかに人種主義的な音を響かせ、ロシアをドイツ人の力と徳によってのみ打ち破られる「人間を食らうおぞましい動物」²¹⁹として描いている。

エッティヒホーファーに次いで成功した「<兵隊ナショナリスト>」²²⁰は、トーア・ゴータである。彼は、17歳で第一次世界大戦に志願し、弾薬補給部隊の士官候補生として西部戦線に投入された。終戦後は、工学を学んで学位を得、パイロットの職業教育も受けた。また、早い時期にナチス突撃隊に加わり、ラインおよびルール地方の占領に際しては志願兵として身を投じ、ナチスの権力掌握の後、カールスルーエ工科大学の教授となった。

このような経歴を持つゴータは、グライダーと軽飛行機に関する航空学の研究書を著わし、『航空年鑑』(Jahrbuch der Luftfahrt)と『航空ハンドブック』(Handbuch der Luftfahrt)の刊行にも携わった。と同時に、第一次世界大戦での自らの体験に基づく小説や物語を執筆し、とりわけ三部作『われらは死に向かって進む』(1930年)、『われらは生命を担う』(Wir tragen das Leben、1932年)、『旗を高く』(Die Fahne hoch!、1933年)において、前線の僚友関係から義勇軍の戦いを経てナチスとその目標のための無条件の尽力へと至る志願兵の道を描いた。このうち、第一部は、第一次世界大戦における弾薬部隊の日常的な英雄性を描き、砲火に囲まれた補給部隊の英雄的行為を描き出すと同時に、損失の多い補給の恐ろしさを追体験させようと試みている。第二部と第三部は、出征将校の1918年以後の生活を描いているが、とりわけ第三部は、粗野で煽動的な反ユダヤ主義的言い回しに貫かれている。それによれば、「ヒトラーの綱領であるものが常に前線兵士の意見」²²¹なのである。

こうした第一次世界大戦とナチスの闘争時代を扱った著作に対して、1929年にはヘッセン・ナッサウ地区の文化賞が与えられ、その後、彼はナチスの文化委員に招聘された。だが、ゴータは、第二次世界大戦中、北海の偵察機のパイロットとして命を落とした。

「血と土の文学」において『良心の命令』を取り上げた際にも触れたように、ハンス・ツェーバーラインは、最も影響力の大きい狂信的愛国主義者の一人であった。1931年にエーア出版社で初版が刊行された『ドイツへの信頼 ヴェルダンから転覆までの戦争体験』(1931年)は、第三帝国の間に74万部以上が販売された。

ところで、ツェーバーラインは、多くの人々が戦争はもうとっくに終わったと思っていた1945年4月末に起きたある事件でも有名である。かつての前線の闘士であり、1923年11月9日にはナチスの一揆に参加し、後にドイツ義勇軍の闘士ともなった彼は、「ペンツベルク殺戮の夜」(Penzberger Mordnacht)として知られる犯罪に、「人狼部隊」(Werwolf)司令部の指導者として関与した。彼らは、連合軍の接近を前にしてナチスの市長を解任したオーバーバイエルンのペンツベルクの市民の男女を殺害したのである。これにより、ツェーバーラインは、1948年に死刑の判決を受けたが、後に無期懲役に減刑された。しかし、1958年に健康上の理由で釈放された後にもなお、確信を持ったナチであり反ユダヤ主義者を自認した。

²¹⁹ P. C. Ettighoffer: Nacht über Sibirien. Ein Deutscher entrinnt dem Geheimdienst des Zaren, Gütersloh, 12. Auflage o. J. [1940], S. 297. Zitiert nach Tobias Schneider: A. a. O., S. 89.

²²⁰ Tobias Schneider: A. a. O., S. 89.

²²¹ Zitiert nach Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: A. a. O., S. 191.

また、ツェーバーラインは、レマルクの『西部戦線異状なし』に対して捏造であるとの批判を向けたことでも知られる。彼によれば、レマルクは前線の闘士などではなく、したがって、第一次世界大戦を扱う権利などないというのである。その真偽はさだかではないが、これによって、その後は、戦争文学の信憑性にとって、著者自身の戦線体験が必須の構成要素となった。むろん、ツェーバーライン自身は、軍事身分証明書に2頁にわたって記録された戦いをあげることができ、その経験に基づいて、900頁にもおよぶ浩瀚な物語の中で、兵隊であることは清潔な手仕事ではなく、男同士の戦いの中には怪我や切断や死も常にあることを、あからさまに描いたのである。

とはいえ、ツェーバーラインの文学的成功にとって何よりも重要であったのは、総統による保護であった。ヒトラーは『ドイツへの信頼』に、「前線の心臓が、私たちの不滅の勝利をもたらす力の源が打つのが聞こえる。本書は、今日の若者に対する前線世代の遺産である」²²²との序文を寄せた。それによって、この作品は第一次世界大戦に関する必読書としてすべての図書推薦リストに登場し、卓越した前線の闘士は、ナチスの運動の最も成功した作家の一人となったのであった。

第一次世界大戦において将校として西部戦線に投入されたヴェルナー・ボイメルブルクは、戦後、ジャーナリストとなり、とりわけベルリンの『ドイツ一般新聞』で活躍した後、1926年よりフリーの作家となった。また、帝国文書館の委託により、第一次世界大戦の会戦に関する様々な本を執筆したが、それは、彼の最も成功した2つの作品である『ドイツを取り巻く弾幕』（1929年）と『ボーゼミュラー分隊』（1930年）のための事前作業ともなった。

ナチス国民運動の開拓者ともみなされるボイメルブルクは、ヒトラーの権力掌握後、ドイツ文芸院の会員となり、1936年にはベルリン市の文学賞を、翌年には、ドイツ・ヴェストマルク芸術賞を受賞した。その後、スペイン内戦に派遣されたコンドル軍団に参加し、第二次世界大戦中には空軍少佐として戦った。

1929年の『ドイツを取り巻く弾幕』の刊行にあたり、シュタリング出版社（Stalling）は、書店のショーウィンドーの特別な装飾を提供するなど、「稀に見る大量の宣伝措置」を実施し、その本は「秋とクリスマスの販売のベストセラーとなるだろう」²²³と予言した。実際、作品の刊行数は、刊行後3か月もしないうちに7万部となり、1930年9月には10万部に、1931年1月には13万部に達した。

本作品は、サラエボでの発砲から1918年11月の敗戦にまで至る、第一次世界大戦の年代記である。だが、その記述は決して中立的なものではない。そこでは、第一次世界大戦後のドイツの窮状の責任はヴェルサイユ条約にあるとされ、第一次世界大戦の前線における塹壕での死者たちは、それを克服するための犠牲と位置づけられた。

死者の骨から、彼らと同じように忠実で、勇敢で、男らしい世代が目覚めること、——それ

²²² Adolf Hitler: Auf den Weg! Vorwort zu Hans Zöberlein: Der Glaube an Deutschland. Ein Kriegserleben von Verdun bis zum Umsturz. München: 1938 [1931], S. 7. Zitiert nach A144.

²²³ Anz. BBl Jg. 96, Nr. 215 (1929) S. 6788. Zitiert nach Kornelia Vogt-Praclik: A. a. O., S. 60, 62.

が私たちの祈りなのだ。²²⁴

だが、注目すべきことに、今日のみからすれば右翼的な傾向についてまったく議論の余地がないこの作品は、当時の文芸批評において、むしろその中立性ゆえに称賛された。例えば、保守的＝国家主義的傾向とは無縁な雑誌『文学世界』（Literarische Welt）でも、次のように言われている。

著者は右翼の出身である。（中略）だが、全体として、彼の叙述に対して何も異議は唱えられない。彼は真実への情熱的な衝動に満たされている。（中略）この本は、年代記以上のもの、歴史以上のもの、小説以上のものである。それは、真実を語る英雄の歌である。²²⁵

本作品に関しては、シュタリング出版社の宣伝においても、「あらゆる傾向から自由」であり、「民族全体の幸福のために、戦争の出来事をめぐる異なる意見の争いに一つの平穏な場所を対置する」²²⁶とされている。その意味で、この小説の成功は、大量のデータと事実の加工によって喚起された、中立性という見せかけの印象にも帰されよう。

一方、『ボーゼミュラー分隊』（1930年）は、下士官パウル・ボーゼミュラーが率いる分隊のヴェルダン戦での活躍を描くものである。統一的な筋はなく、様々なエピソードが散りばめられるこの小説の中で、ボーゼミュラー分隊は、個人の体験や運命を二次的なものとみなし、すべての兵隊が一つの共同体をなすという考え方の例として、1933年以降のナチスの共同体理念と関連づけられる。そうした常に共同体への奉仕に義務づけられるという在り方を顕著に示すのは、ボーゼミュラーの休暇の描写である。少し前に父親となったボーゼミュラーは、一等兵ヴァムシュから14日間の休暇を譲られ、家に帰る。だが、内面的に戦場での出来事から距離を置くことができないため、彼には慣れ親しんだ故郷がよそよそしく感じられ、妻との関係も損なわれてしまう。結局、彼は予定より早く部隊に戻り、ヴァムシュが休暇を取れるように計らう。ここで重要なことは、この場面が決して戦争の否定的な影響を批判的に描いているのではなく、彼が故郷と家庭で感じた孤独や疎外感が、部隊での僚友関係によって埋め合わされるという点である。つまり、ボーゼミュラーにとっては、故郷の家族よりも、過酷な状況で共に戦い、助け合う部隊の仲間こそが家族なのである。このような形で、本作品においては、個人や家族といった私的な存在よりも、すべてを包摂するより大きな共同体というものが美化され、理想化され、戦争は偉大な共同体体験として賛美されるのである。

続いて、第二次世界大戦を描いた作品に目を向けたい。まず、ギュンター・ブリーンの『スカパ・フローへの道』（1940年）である。1908年生まれのブリーンは、商船の教育を受けた後、1931年に船長免許証を取得し、経済危機の時代を労働奉仕で切り抜け、1933年1月に海軍に入隊すると、U

²²⁴ Werner Beumelburg: Sperrfeuer um Deutschland. Mit einer Widmung des Reichspräsidenten von Hindenburg. Oldenburg: 1929, S. 542. Zitiert nach A141.

²²⁵ Friedrich Sternthal: Ein neuartiges Kriegsbuch. In: LW Jg. 6, Nr. 3 (1930) S. 5. Zitiert nach Kornelia Vogt-Praclik: A. a. O., S. 62.

²²⁶ Anz. BBl Jg. 97, Nr. 13 (1930) S. 328. Zitiert nach ebenda, S. 60.

ボートの指揮官にまで昇進した。そして、1939年10月、U47でイギリス艦隊の母港スカパ・フロー湾への急襲作戦を行い、戦艦ロイヤル・オークを撃沈した。この勝利によって彼はスターとなり、Uボートへの志願兵が殺到した。ゲッベルスも、「彼は素晴らしい男であり、本当の民族の英雄だ」²²⁷と日記に記している。その後、プリーンは、生い立ちから、ナチス体制下で艦長となり、さらにスターへと昇り詰める過程を描いた自伝『スカパ・フローへの道』を著した。もちろん、その頂点をなすのは、スカパ・フローの奇襲と、それに続く帝国宰相官房の訪問である。『大ドイツ貸出図書館新聞』の寸評の著者は、本書を次のように讃えた。

数十万人の人々がこの本を待ち、海軍の最初の騎士十字勲章受賞者がその人生を語ることを望んだ。今、彼はそれをなした。そして、数十万人の人々がそれを読もうとするだろう！²²⁸

第三帝国時代におよそ90万部の刊行数を数えた本書では、第一次世界大戦に関する文学とは異なり、敵味方を越えた僚友関係はもはや問題とならず、逆に戦争相手に対する深い嫌悪が語られる。

われわれは、教科書に見られるような、互いに丁寧な、騎士のような敵である。だが、その丁寧さの背後には、氷のように冷たい、非情な嫌悪がある。この世での存在か非存在かをかけて最後の決定的な歩みへと立ち向かう、二つの民族の嫌悪が。²²⁹

また、本書では、第一次世界大戦に関する文学において以上に、戦争が美化されている。それはまるで、「きちんとした的確な攻撃」(A151)があるかのようであり、他方で、犠牲や苦しみは描かれない。

『スカパ・フローへの道』は、アーリア化されて、社名をドイツ出版社へと変更されたウルシュタイン出版社の最も成功した出版物となった。初版の12万部は、1940年10月までに売り切れとなった。刊行から一年後には、ドイツ出版社の売り上げは、前年の同じ月よりも50パーセント増加した。戦争3年目には、軍務に召集された職員の代わりとして、145人のヒトラー青年がドイツ出版社の支店で新聞と雑誌の配布を手伝った。3か月後に業務を終えたとき、彼らは、出版社からの感謝のしるしとして海軍大尉プリーンの本を贈呈されたが、そこには彼らがドイツ出版社で働いたことを示す証書が貼りつけられていた。——だが、そのとき、プリーンはすでに北太平洋で戦死していた。武功に輝く英雄の戦死は、士気の低下を防ぐため、2か月以上も秘匿されたのであった。

1940年に刊行されたフリッツ・オットー・ブッシュの『ナルヴィク ドイツの駆逐艦の壮絶な戦いについて』(以下、『ナルヴィク』と略記する)もまた、早くも1941年の1月までに20万部が販売された。ナルヴィクの戦いとは、1940年4月9日から6月8日まで、ノルウェーで行なわれた作戦

²²⁷ Tagebuch von Joseph Goebbels vom 1. 11. 1940. Zitiert nach A150.

²²⁸ Großdeutsche Leihbüchereiblatt 2 (1940), H. 12, S. 211. Zitiert nach A150f.

²²⁹ Günther Prien: Mein Weg nach Scapa Flow. Berlin: 1940, S. 142. Zitiert nach A151.

の一部である。ナルヴィクは、スウェーデンから鉄鉱石を輸送する際の北大西洋の不凍港であり、ドイツ軍からも連合軍からも重要視されていた。戦いは、オフトフィヨルドでの海戦と、ノルウェー北部の町ナルヴィクを囲む山々で行われた陸戦を含み、ドイツ軍は海戦では敗れたものの、陸戦で勝利を収め、ノルウェーでの足場を強化したのであった。ブッシュの『ナルヴィク』は、記録とルポルタージュとフィクションから成り、とりわけヒトラー・ユーゲント世代の若者たちの間で人気となった。

1930年代に海洋雑誌『帝国海軍』(Die Reichsmarine)と『ドイツ海軍新聞』(Deutsche Marine-Zeitung)の作家兼主任編集者であったブッシュにとって、『ナルヴィク』のような作品の題材には事欠かなかった。その成功によって、1941年には作家活動からおおよそ24万マルクの報酬を得て、彼は業界トップの稼ぎ手となった。それが実際にどれほど高額であったかは、当時の一般的な労働者やサラリーマンの月収が150~200マルクであったことを考慮すれば明らかであろう。

こうして、ブッシュの本は、著者に傑出した経済的成功をもたらすと同時に、プロパガンダ的な効果をおよぼし、若者を無意味な戦争へと熱狂させた。というのも、プリーンの場合と同じように、ここでもまた、もっぱら軍司令官の立場から見た「むしろくきちんとした>戦争」(A154)が描かれ、死や苦しきはフェードアウトされるからである。だが、それと同時に、第一次世界大戦に関する文学で見られるような僚友関係は消え、難破した無防備なドイツ兵に対するイギリス人の残虐な行為が繰り返し描かれている。

1920年代から海軍の文書係として活動した彼は、ナチス時代の初期には、ナチスの著作政策にかかわり、ドイツ文化のための闘争同盟の提案で、統制されたドイツ・ペンクラブに受け入れられた。そして、1933年5月にイタリアのラグーザで開催された国際ペンクラブの会議に、ドイツ代表団のメンバーとして参加し、演説を行う予定であった。その演説は、ユダヤ人問題が議題に上るなど、「新しいドイツ」の代表者らに多くの批判が向けられたことに抗議してドイツ代表団が帰国したために実現しなかったが、後にドイツの新聞に公表された。ブッシュはそこで、例えば次のように述べた。

私たちの独自の民族的な著作は、14年間にわたって圧迫されました。(中略)それは今ようやく、ついに自由に展開することができます。本質的なことは、国家の最良のもののための自由を持たねばならないことです。本質的でないもの、永遠に否定するもの、卑小な汚れたものではありません。²³⁰

帝国文化院の支配人であったハンス・ヒンケル(Hans Hinkel)は、こうしたブッシュの政治的態度を讃えて、次のように述べている。

²³⁰ Fritz Otto Busch: Der freie Schriftsteller und die Presse. [Redemanuskript] Abgedruckt in: Deutsche Kultur-Wacht (1933), H. 11, S. 13, zitiert nach Joseph Wulf: Literatur und Dichtung im dritten Reich. Eine Dokumentation. Gütersloh: 1963, S. 93. Zitiert nach A155.

私があなたを、保証された信頼できる党员として、私たちの運動の意味で長年戦っている編集者として知っているということを、私は彼らの願いに応じて、喜んであなたに保証します。²³¹

ブッシュに対しては、他方で、ナチス親衛隊に近い新聞雑誌、とりわけ作家のクルト・エッグース (Kurt Eggers) から、直接的な経験から書かれていないことや、神学的な要素に対して批判も向けられており、そこにはベルテルスマン出版社への批判も込められていたと思われる。(Vgl. A156) しかし、それにもかかわらず、最終的に 65 万部に達した『ナルヴィク』は、第二次世界大戦中、同出版社の作品の中で最高の純利益をあげ、ブッシュは戦争の利得者となったのであった。

おわりに

著作物には様々な側面があり、その分類は一つのカテゴリーのみに限定されるものではない。したがって、はじめに述べたように、本稿におけるベストセラーの分類には、個々の作品のより詳しい分析を通じて見直しながされる可能性もある。また、ベストセラーの上位 100 タイトル自体についても、今後の刊行数等の調査によって変更が生じる可能性を否定できない。だが、本の売れ行きを主な指標としてナチス時代の文学の特色を明らかにするという試みの端緒にはなり得るであろう。では、そこから見えてくるナチス時代の文学空間には、どのような特色があるのだろうか。

まず言えることは、おおむね 4 分の 3 が非イデオロギー的な著作に分類され得ることから明らかのように、当時の文学を特徴づけるのが、必ずしも民族主義的・国家主義的な著作ではないということである。ナチス時代のドイツには、必ずしもナチズムにとらわれない非イデオロギー的な文学の空間があり、少なくとも本の売れ行きという観点から見た場合、そこで刊行された著作物こそが、ナチス時代の文学の典型をなしたのである。

では、そのような非イデオロギー的なベストセラーの特色は何かと問うなら、その答えは、第一に多くが娯楽的な著作であること、そして第二に文学のカノンに残るような作品がごく一部しか含まれていないということであろう。その意味するところは、ナチス時代のドイツにおいて、時代を越えて読み継がれるような優れた文学作品は生まれなかったということである。ナチスは、政権獲得後間もなく、文学の領域においても、禁止と排除には確かに成功した。だが、ほぼすべての有能な作家が亡命か沈黙を余儀なくされた後、その隙間を埋めることができたのは、二流の作家でしかなかった。また他方で、ナチズムに忠実な作家の多くは、ナチス時代にはすでにその全盛期を過ぎていた。そうした意味では、ナチス時代の文学の多様性は、質的な貧困さと表裏一体である。

ところで、ナチズムのキーワードの一つである「統制」(Gleichschaltung)という言葉からはにわかには想像できないことであるが、第三帝国において活動が許された作家や出版社の多くは、それぞれの利益の追求に邁進した。つまり、作家は巨額の報酬を得ることを、出版社も巨額の利益を達成するこ

²³¹ Schreiben Hans Hinkel an Busch vom 9. 11. 1934. In: BArch (ehem. BDC), RK, Busch, Fritz Otto, 30. 12. 1890. Zitiert nach A155.

とを目指したのである。その先頭に立つのがヒトラーであったという意味で、この点については、作品の傾向はまったく関係ない。ここからは、国家による文学の管理にもかかわらず、書籍市場には依然として私経済的なメカニズムが存続していたことが見て取れるのである。

このような不徹底が生じた理由として、第一にあげられるのは、ナチスの権力機構についてしばしば指摘される「多頭制」(Oligarchie)、すなわち指導的役割をめぐる争いであろう。文学の領域では、それは主に、イデオロギーを重視するローゼンベルクと娯楽的著作に対して寛容なゲッベルスの対立に帰せられる。

こうした対立は、第二次世界大戦の勃発によって生じた逃避的な読書の需要の増大によって、ゲッベルスの側に有利なものとなった。それは、非イデオロギー的な著作の増大という意味では、確かにナチズムにとって後退である。だが、兵士や銃後の国民が気分転換を図り、民族の存亡を賭けた戦いへの英気を養うことが出来たという意味では、そうした非政治的な、軽い、娯楽的な読み物は、戦時下という特殊な状況において、政治的な闘争を呼びかける著作よりも大きな役割を果たしたとも言えるのである。

しかし他方で、そのような娯楽的著作の一部に体制批判的な傾向が見られることも、指摘しておかなければならない。例えば、ユーモア文学の作家エーム・ヴェルクは、ゲッベルスを批判し、短期間ではあるが強制収容所に入れられた。また、ハインリヒ・シュペールの作品には、体制を転覆させる衝動が認められる。

そしてまた、その一方で、バストセラーという観点から新たに見いだされた作品や作家の中に、ナチズムとの親和性が指摘される事例が少なからず存在することにも、留意が必要であろう。例えば、従来は「科学小説」として片付けられていたシェンツィンガーの『アニリン』において、ナチスの「四か年計画」や戦争遂行に対するドイツ人化学者と化学企業の積極的な貢献が語られることは、その典型である。

すでに拙論でも述べたことではあるが²³²、以上のように見たとき、「血と土の文学」や戦争文学を中心に、主にイデオロギー的な観点からなされてきたナチス時代の文学に関する研究が、当時の文学の実態を捉えるには不十分であったことが、改めて浮き彫りとなる。つまり、従来の研究は、多数の非イデオロギー的な著作を見落としてきたと同時に、それらの中に潜む、一見そうとは見えないナチス文学をも見落としてきたのである。そのような意味で、第三帝国時代の文学の実態を解明すべく、よりいっそう詳しい考察が求められよう。

参考文献

1. 一次文献

Wilfrid Bade: Das Auto erobert die Welt. Biographie des Kraftwagens. Berlin: Zeitgeschichte-Verlag Wilhelm

232 詳細は、竹岡健一:ナチス時代の科学小説における科学技術の濫用について——K. A. シェンツィンガーの『アニリン』を例として(前掲論文)、54~55頁を参照。

- Andermann 1938.
- Cigaretten-Bilderdienst Hamburg-Bahrenfeld (Hg.): Deutschland erwacht. Hamburg-Bahrenfeld: Cigaretten-Bilderdienst 1933.
- Cigaretten-Bilderdienst (Hg.): Adolf Hitler. Bilder aus dem Leben des Führers. Hamburg-Bahrenfeld: Cigaretten-Bilderdienst 1936.
- Johannes Banzhaf: Lustiges Volk. Feldausgabe. Gütersloh: C. Bertelsmann Verlag 1942.
- Waldemar Bonsels: Die Biene Maja und ihre Abenteuer. Berlin/Leipzig: Schuster & Loeffler 1918.
- P. C. Ettighoffer: Nacht über Sibirien. Feldausgabe. Gütersloh: C. Bertelsmann Verlag 1941.
- Hans Fallada: Kleiner Mann — was nun? Berlin: Aufbau Verlag 2016.
- Walter Flex: Der Wanderer zwischen beiden Welten. München: bge-verlag GmbH 2014.
- Horst Wolfram Geißler: Der liebe Augustin. Soldatenbücherei des Oberkommandos der Wehrmacht Abt. Inland Band 17. [o. J.].
- Heinz Goedecke/Wilhelm Krug: Wir beginnen das Wunschkonzert für die Wehrmacht. Mit einem Geleitwort von Ministerialdirigent Alfred-Ingemar Berndt. Berlin/Leipzig: Nibelungen-Verlag 1941.
- Knut Hamsun: Romane I. Hunger/Kinder ihrer Zeit/Segen der Erde. München: List Verlag 1974.
- Sebastian Kneipp: Meine Wasser-Kur. Hamburg: Severus Verlag 2016.
- Fritz Müller-Partenkirchen: Kramer & Friemann. Feldausgabe. Gütersloh: C. Bertelsmann Verlag 1942.
- Erich Maria Remarque: Im Westen nichts Neues. Köln: Kiepenheuer & Witsch 2019.
- Rainer Maria Rilke: Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke. Feldpostausgabe. Leipzig: Im Insel-Verlag 1942.
- Karl Aloys Schenzinger: Anilin. Berlin: Zeitgeschichte-Verlag 1937.
- Karl Aloys Schenzinger: Metall. Berlin: Zeitgeschichte-Verlag 1939.
- Gustav Schröer: Um Mannesehre. Feldausgabe. Gütersloh: C. Bertelsmann Verlag 1942.
- Alfred Rosenberg: Der Mythos des 20. Jahrhunderts. Eine Wertung der seelisch-geistigen Gestaltenkämpfe unserer Zeit. München: Hoheneichen-Verlag 1934.
- Heinrich Spoerl: Der Gasmann. Berlin: Paul Neff Verlag 1940.
- Hans Surén: Mensch und die Sonne. Arisch-olympischer Geist. Berlin: Verlag Scherl 1936.
- Will Vesper: Das harte Geschlecht. Einmalige, gekürzte Feldausgabe. Gütersloh: C. Bertelsmann Verlag [o. J.].
- VB-Feldpost: Darüber lache ich heute noch. Soldaten erzählen heitere Erlebnisse. Berlin: Zentralverlag der NSDAP, Franz Eher Nachf. GmbH, 1943.
- ハーヴェイ・アレン [大久保康雄訳] 『アントニオ・アドヴァース』 (第一～第五冊) (三笠書房) 1939～1941年。
- ヴィル・ヴェスペル (齋藤久雄譯) 『不屈の種族』 (白水社) 1932年。
- ヘルムート・ウンガー (宮島幹之助/石川鍊次譯) 『ローベルト・コッホ 偉大なる生涯の物語』 (富山房) 1933年。

ベチナ・エウエルベック（江崎徹譯）『絶望との闘い』（中央公論社）1956年。
カロッサ（手塚富雄訳）『美しき惑いの年』（岩波文庫）1954年。
ハンス・グリム（星野慎一訳）『土地なき民』（第一～第四巻）（鱒書房）1940～1941年。
エーリヒ・ケストナー/ハインリヒ・シュペール（小松太郎訳）『雪の中の三人男 ガス屋クニッテル』（筑摩書房）1971年。
ゲッベルス（佐々木能理男譯）『勝利の日記』（第一書房）1941年。
イナ・ザイデル（伊藤鏝太郎訳）『希はしき子供』（上巻）（刀江書院）1940年。
K・A・シェンチンガア（藤田五郎譯）『金属』（上・下巻）（天然社）1933年。
K.A. シェンチンガー（藤田五郎訳）『アニリン——科学小説』（法政大学出版局）1971年。
アルベルト・ジクストゥス文/フリッツ・コッホ＝ゴータ絵（はたさわゆうこ訳）『うさぎ小学校』（徳間書店）2007年。
シュペール（植田敏郎訳）『小都会の悪童たち』（『世界少年少女文学全集』第二部 8 ドイツ編 2〔創元社〕1958年、201～296頁所収）。
ヨハンナ・スピリ（池田佳代子訳/いわさきちひろ絵）『アルプスの少女ハイジ』（講談社）2005年。
クヌート・ハムスン（富原眞弓訳）『ヴィクトリア』（岩波書店）2015年。
クヌウト・ハムスン（宮原晃一訳）『土の恵み』（上・下巻）（三笠書房）1940年。
ハンス・ファラダ（赤坂桃子訳）『ピネベルク、明日はどうする!?!』（みすず書房）2017年。
フリードリッヒ・ブルンク（石中象治譯）『大航海』（実業之日本社）1941年。
W・ボンゼルス（生野幸吉訳）『みつばちマーヤの冒険』（『少年少女世界の文学 19 アルプスの山の少女 みつばちマーヤの冒険』〔河出書房新社〕1967年、237～329頁所収）。
ワルデマル・ボンゼルス（高橋健二訳）『みつばちマーヤの冒険』（国土社）2004年。
カール・マイ（山口四郎訳）『アパッチの酋長ヴィネトウー 1』（エンデルレ書店）1978年。
マーガレット・ミッチェル（荒このみ訳）『風と共に去りぬ』（一～六）（岩波書店）2015～2016年。
アクセル・ムンテ（久保文訳）『サン・ミケーレ物語』（紀伊國屋書店）1965年。
W・メッレンドルフ伯爵夫人ファンニィ（小堀甚二譯）『ゲーリング夫人』（アルス）1931年。
ハンス・ヨースト（青木重孝譯）『愛國者シュラーゲター』（三學書房）1942年。
ハンス・ヨースト（瀧崎安之助訳）『不滅の母』（『獨逸文學』第一年第三輯、1937年、395～424頁所収）。
リルケ（塚越敏訳）『旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌』（『リルケ全集』〔第2巻〕〔河出書房新社〕1990年、5～53頁所収）。
エリッヒ・マリア・レマルク（秦豊吉・山西英一譯）『西部戦線異状なし 凱旋門』（河出書房）1954年。
レマルク（秦豊吉訳）『西部戦線異状なし』（新潮社）2021年。
アルフレット・ローゼンベルク（吹田順助・上村清延訳）『二十世紀の神話』（中央公論社）1939年。

2. 二次文献

- Christian Adam: Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich. Berlin: Verlag Galiani 2010.
- Jan Berg u. a.: Sozialgeschichte der deutschen Literatur von 1918 bis zur Gegenwart. Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag GmbH 1981.
- Friedrich Dickmann: Die gefesselte Jugend. Rilkes „Cornet“ als Opfer einer Vision. In: Wiener Beiträge. 32 (1986) H. 6, S. 1028-1032.
- Saul Friedländer u. a.: Bertelsmann im Dritten Reich. München: C. Bertelsmann Verlag 2002.
- Jürgen Hillesheim/Elisabeth Michael: Lexikon nationalsozialistischer Dichter. Biographien – Analysen – Bibliographien. Würzburg: Königshausen & Neumann 1993.
- Sebastian Graeb-Könneker: Autochthone Modernität. Eine Untersuchung der vom Nationalsozialismus geförderten Literatur. Opladen (Westdeutscher Verlag) 1996.
- Michael Kilian: Die Rechtsanwälte und Humoristen Ludwig Thoma und Heinrich Spoerl im Vergleich. In: Jenseits von Bologna — Jurisprudentia literarisch. Von Woyzeck bis Weimar, von Hoffmann bis Luhmann. Hg. von Michael Kilian. Berlin: BWV • Berliner Wissenschafts-Verlag 2006, S. 191-220.
- Christian Klein: Kultbücher. Theoretische Zugänge und exemplarische Analysen. Göttingen: Wallstein Verlag 2014.
- Werner Liersch: Kleiner Mann — Was mit Dir tun? In: Hans Fallada und die literarische Moderne. Mit 23 Abbildungen. Hg. von Carsten Cansel und Werner Liersch. Göttingen: V & R unipress 2009, S. 67-77.
- Irmela von der Lühe: Der Wanderer zwischen beiden Welten von Walter Flex. In: Wehrwolf und Biene Maja. Der deutsche Bücherschrank zwischen den Kriegen. Hg. von Marianne Weil. Berlin: Verlag Ästhetik und Kommunikation 1986, S. 107-125.
- George L. Mosse: Was die Deutschen wirklich lasen. Marlitt, May, Ganghofer. In: Reinhold Grimm/Jost Hermand (Hg.): Popularität und Trivialität. Fourth Wisconsin Workshop. Frankfurt am Main: Athenäum Verlag 1974, S. 101-120.
- Christian Härtel: Stromlinien. Wilfrid Bade — Eine Karriere im Dritten Reich. Berlin-Brandenburg: be.bra wissenschaft verlag 2004.
- Bettina Krüger: Die Weise von Liebe und Tod des Cornets Christoph Rilke. Buchkult und Kultbuch in den Weltkriegen. In: *paraplue*. (winter 1997/1998) no. 3, S. 1-8.
- Siegfried Lokatis: Hanseatische Verlagsanstalt. Politisches Buchmarketing im >Dritten Reich<. Frankfurt am Main: Buchhändler-Vereinigung GmbH 1992.
- Gunnar Och: Der Cornet im Tornister — zur Rezeption literarischer Kultbücher. In: Kultbücher. Hg. von Rudolf Freiburg, Markus May und Roland Spiller. Würzburg: Königshausen & Neumann 2004, S. 31-44.
- Hans Sarkowicz/Alf Mentzer: Literatur in Nazi-Deutschland. Ein biografisches Lexikon. Erweiterte Neuauflage. Hamburg/Wien: Europa Verlag 2002.
- Peter Schneider: Gerechtigkeit und Recht im Werk von Ludwig Ganghofer. In: Jenseits von Bologna —

- Jurisprudentia literarisch. Von Woyzeck bis Weimar, von Hoffmann bis Luhmann. A. a. O., S. 149-188.
- Thomas F. Schneider: „Der Krieg hat uns für alles verdorben“ Erich Maria Remarques „Im Westen nichts Neues“ und die Diskussion um den Ersten Weltkrieg in der Weimarer Republik. In: Schock, Trauma, Glorifizierung. Literarische Positionen zwischen den Weltkriegen. Hg. von Gernot Meier und Hansgeorg Schmidt-Bergmann. Baden/Karlsruhe: Evangelische Akademie 2016, S. 85-103.
- Tobias Schneider: Bestseller im Dritten Reich. Ermittlung und Analyse der meistverkauften Romane in Deutschland 1933-1944. In: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 52 (2004) H. 1, S. 77-97.
- Karl-Heinz Joachim Schoeps: Literatur im Dritten Reich (1933-1945). 2., überarbeitete und ergänzte Auflage. Berlin: Weidler Buchverlag 2000.
- Kornelia Vogt-Praclik: Bestseller in der Weimarer Republik 1925-1930. Eine Untersuchung. Herzberg: Verlag Traugott Bautz 1987.
- Martine Wagner-Egelhaaf: Kultbuch und Buchkultur. Die Ästhetik des Ichs in Rilkes „*Cornet*“. In: Zeitschrift für Deutsche Philologie. 107 (1988) H. 4, S. 541-556.
- Peter Walther: <Wie ein Fähnrich zum Feldwebel wird>. Grenzen der Offenheit in Rilkes <Cornet>. In: Weimarer Beiträge. 37 (1991) H. 1, S.130-136.
- 池田浩士: ファシズムとつきあう方法——ハンス・ファラダの抵抗と破滅 (『展望』第7号、1977年、132～150頁所収)。
- 五十嵐有美子: クナイプ療法の成立と社会的意味——ドイツにおける自然療法の発展を見る (『社会福祉研究』第7号、2007年、59～79頁所収)。
- 上原巖: 自然散策が医療・保養に取り込まれているドイツのクナイプ療法 (『森林科学』第19号、1997年、84～87頁所収)。
- 碓井信二: ある政治的枠組みの破壊——ハンス・カロッサの「西欧哀歌」(1943)の時代考 (大阪薬科大学教養論叢委員会『ばいであ: 教養論叢』第4号、1980年、113～129頁所収)。
- 大久保康雄: 序 (ハーヴェイ・アレン [大久保康雄訳]『アントニイ・アドヴァース』[三笠書房]1939年、頁数なし)。
- 金子佐一郎 (編)『裸體運動』(J・C・C)1932年。
- 近藤駿四郎: 日本語版への言葉 (アクセル・ムンテ [久保文訳]『サン・ミケーレ物語』[紀伊國屋書店]1965年、i～ii頁)。
- 斎藤昌人: 美しい身体——1930年前後の日本における裸體運動観 (高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科『国際社会文化研究』第12号、2011年、83～95頁所収)。
- 酒井謙一: ナチ統治下でよく読まれた作家——クヌート・ハムスンの場合 (『京都工芸繊維大学繊維学部学術報告』第15号、1915年、121～132頁所収)。
- ヘルマン・シェーファー (稲木勝彦訳)『現代のドイツ文學 (作家と作品)』(東京開成館)1944年。
- 関口なほ子: 母性のゆくえ——イナ・ザイデルとイルゼ・ラングナーの作品を例に (日本大学文理学部人文科学研究所『研究紀要』第92号、2016年、37～58頁所収)。

- 園田尚弘：レオ・レーヴェンタールの『クヌート・ハムスン論』について（『長崎大学教養部紀要』（人文科学篇）第37巻、第2号、1996年、215～233頁所収）。
- 竹岡健一：Christian Adam: Lesen unter Hitler. Autoren, Bestseller, Leser im Dritten Reich.（日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第144号、2012年、218～223頁）。
- 竹岡健一：第二次世界大戦中のドイツ軍兵士の読書について——ナチスの文芸政策と娯楽的著作のかかわりに関する一考察（かいろすの会『かいろす』第33号、2019年、59～78頁所収）。
- 竹岡健一：『ミツパチ・マーヤの冒険』における「ミツパチとスズメバチの戦い」について——戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察（かいろすの会『かいろす』第59号、2021年、1～8頁所収）。
- 竹岡健一：ナチス時代の科学小説における科学技術の濫用について——K. A. シェンツィンガーの『アニリン』を例として（日本独文学会『ドイツ文学』第164号、2022年、41～57頁）。
- 竹岡健一：ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について——メディアによる「民族共同体」の形成（かいろすの会『かいろす』第60号、2022年、45～70頁所収）。
- 竹岡 健一：コレクタブルカードとナショナリズム——『アードルフ・ヒトラー 総統の人生の写真』を例として（かいろすの会『かいろす』第60号、2022年、15～57頁）。
- ヤン・ベルク，他（山本尤他訳）『ドイツ文学の社会史』（上）（法政大学出版局）1989年。
- 星野慎一：ハンス・グリム（『独逸文学』第五年・第一輯、1941年、49～73頁所収）。
- ザビーネ・ボーデ（齋藤尚子・茂幾保代訳）『ドイツの忘れられた世代 戦争の子どもたちが沈黙をやぶる』（三元社）2017年。
- エレン・F・ブラウン/ジョン・ワイリー二世（近江美佐訳）『世紀の名作はこうしてつくられた』（一灯社）2013年。
- 宮内俊至『評伝 ハンス・ファラダ』（北樹出版）2021年。
- 村山宏昭：ヴァイマル共和国における「大戦の語り」と世代間抗争——「前線世代」の戦争文学（『ゲシヒテ』第1号、2008年、39～52頁所収）。
- 村山正雄：ナチス第三帝国時代に生きる芸術家の運命——ハンス＝カロッサの場合（『神戸親和女子大学研究論叢』第30号、1996年、288～304頁所収）。
- 村山正雄：ナチスの前に立つハンス・カロッサ——1938年11月20日、ベルリン・オペラハウスにおける講演をめぐって（『神戸親和女子大学研究論叢』第31号、1998年、297～315頁所収）。
- 村山正雄：第三帝国におけるカロッサの足跡——クリスティアーネ・ドイセン：「自己是認と回想」より（『神戸親和女子大学研究論叢』第36号、2003年、26～43頁所収）。
- 村山正雄：第三帝国におけるカロッサの足跡（二）——クリスティアーネ・ドイセン：「自己是認と回想」より（『神戸親和女子大学研究論叢』第37号、2004年、65～80頁所収）。
- 森貴史『踊る裸体生活 ドイツ健康身体論とナチスの文化史』（勉誠出版）2017年。
- 森貴史『ドイツの自然療法 水治療・断食・サナトリウム』（平凡社）2021年。
- 山下肇：イナ・ザイデル——「ヴンシュキント」を繞つて（『独逸文学』第五年・第一輯、1941年、

126～150 頁所収)。

横山香：戦後ドイツの大衆文化における“*Heile Welt*”の表象と言説——Ludwig Ganghofer の小説と映画を事例として (『奈良大学紀要』第 47 号、2019 年、1～17 頁所収)。

鷺巣由美子：郊外と都市 ワイマール時代の小説に見られるベルリンの周縁 (『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 2 号、1998 年、185～212 頁所収)

鷺巣由美子：ホワイトカラーの家族像 フェラダの『しがない男よ、さあどうする』を中心に (『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 3 号、1999 年、221～237 頁所収)

※シェンツィンガー『アニリン』、ボンゼルス『ミツバチ・マーヤの冒険』、ゲデケ/クルーク『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』、およびバーデ/ホフマン『ドイツは目覚める』を含めたコレクタブルカードにかかわる参考文献の詳細は関連する拙論に記載されているため、ここでは省略した。